

読者が創る新しい性風俗誌

奇譚クラブ

風俗資料研究

1982年

12

・特集・妻の情事
投稿手記・妻の恥態・花電車妻・他



◇文献資料◇

愚蒙いさめ草・魔泉の宿
妻に群がる男たち

1982年

12月号

奇譚クラブ

昭和57年11月1日発行(毎月発行)第1巻第10号



雑誌02805-12

定価1000円

(株)きたん社発行

奇譚クラブ12月号目次



| | |
|----------------------|-------|
| カラー・夜啼妻・新妻鏡・放課後…………… | (2) |
| 特集・懐かしの奇ク嬢たち…………… | (7) |
| 愚蒙いさめ草…………… | (16) |
| 特集・妻の情事…………… | |
| ◆花電車妻…………… | (29) |
| ◆妻の恥態…………… | (34) |
| ◆野外セックス…………… | (41) |
| ◆妻に群がる男たち…………… | (52) |
| 女人切腹…………… | (71) |
| 魔泉の宿…………… | (78) |
| 女郎蜘蛛・前篇…………… | (94) |
| 編集ノート…………… | (142) |
| 投稿規定…………… | (143) |

投稿規定

〔体験・告白・日記など〕

SM・エネマ・フェチ・レズ、スワップ・トリプル・複数・アニメル・窃視・妊婦嗜好など、本誌にふさわしい異色なものをのぞみます。

創作ではなく、実際に経験、実行したことをありのままに、平易な文章でお書きください。

文章の上手下手は問いません。写真（モノクロ、カラー、ボラロイド）のある方はそえて下さい。四百字原稿用紙2枚以上（長篇は連載）。

掲載分には規定の原稿料をお支払いします。文章がニガ手な方は写真だけでも結構ですが、簡単な説明を書きそえて下さい。

〔創作・小説など〕

SM小説界に新風を吹き込む新人の登場を期待しています。

題材はSM、フェチなど情念的なもので、既成の作家のものとは異なる作品を歓迎します。

四百字詰原稿用紙で二〇一三〇枚以上です。

優秀な作品は本誌に掲載（長篇は連載）とし、規定の原稿料をお支払いします。

〔イラスト・カットなど〕

写実的なもの、幻想的なもの、あるいはイメージ画ふうのものなど

自由に描いて下さい。

なるべく白いケント紙か画用紙にエンピツ、ペン、筆で。

イラストの大きさは本誌2ページ大ぐらいまで、カットは葉書半分大ぐらいまで。

採用分には規定の原稿料をお支払いいたします。

〔文献・資料など〕

文献や資料を提供または譲って下さる方はご一報下さい。

※投稿作品（写真を含む）の返却を希望される方はその旨書きそえて下さい。

宛先

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

(株)きたん社内

現代芸術研究会

新妻鏡

今宵晴れて……



貴方のものに……



夜

啼

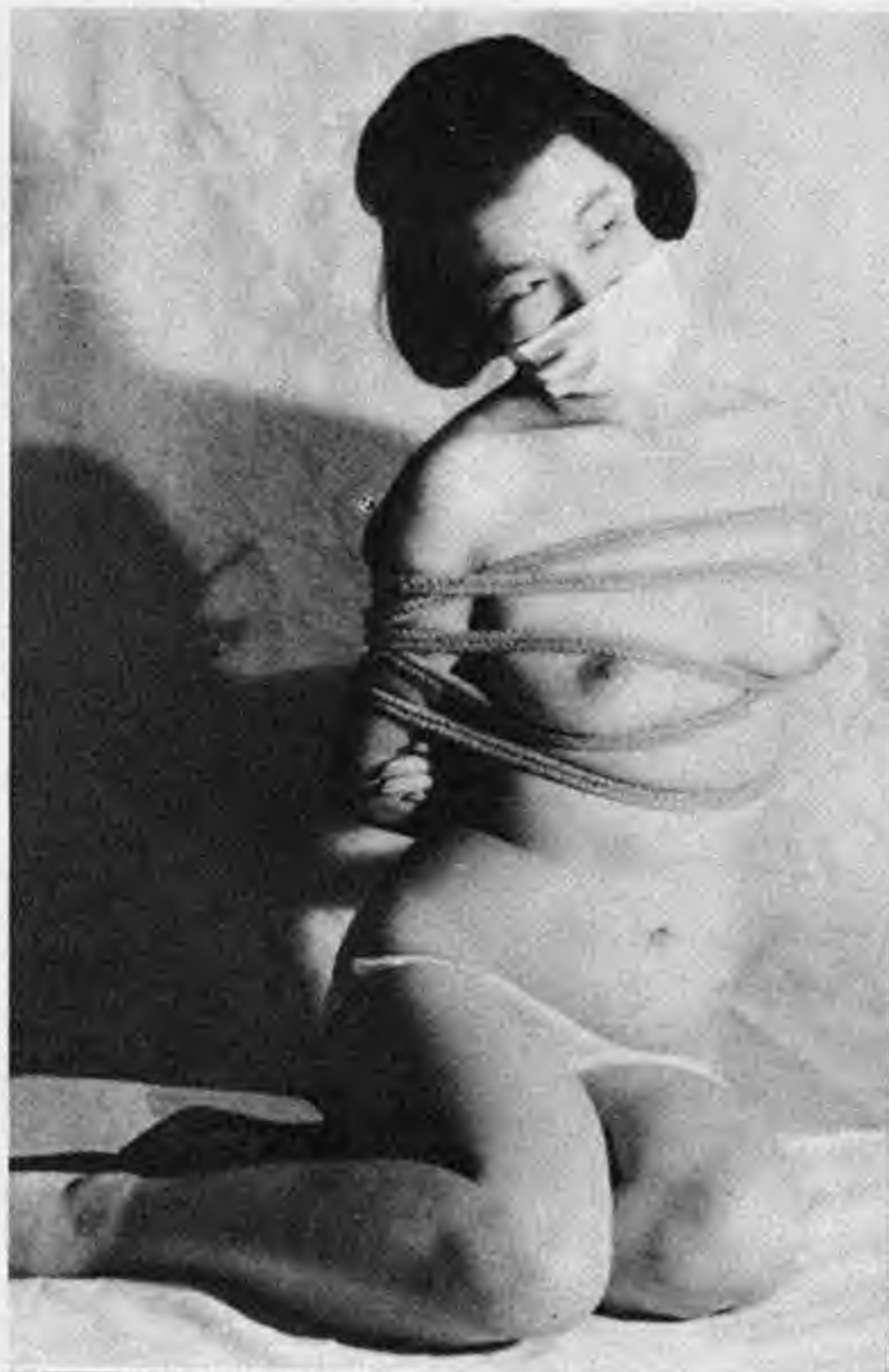
妻



特集・懐かしの奇ヲ嬢たち

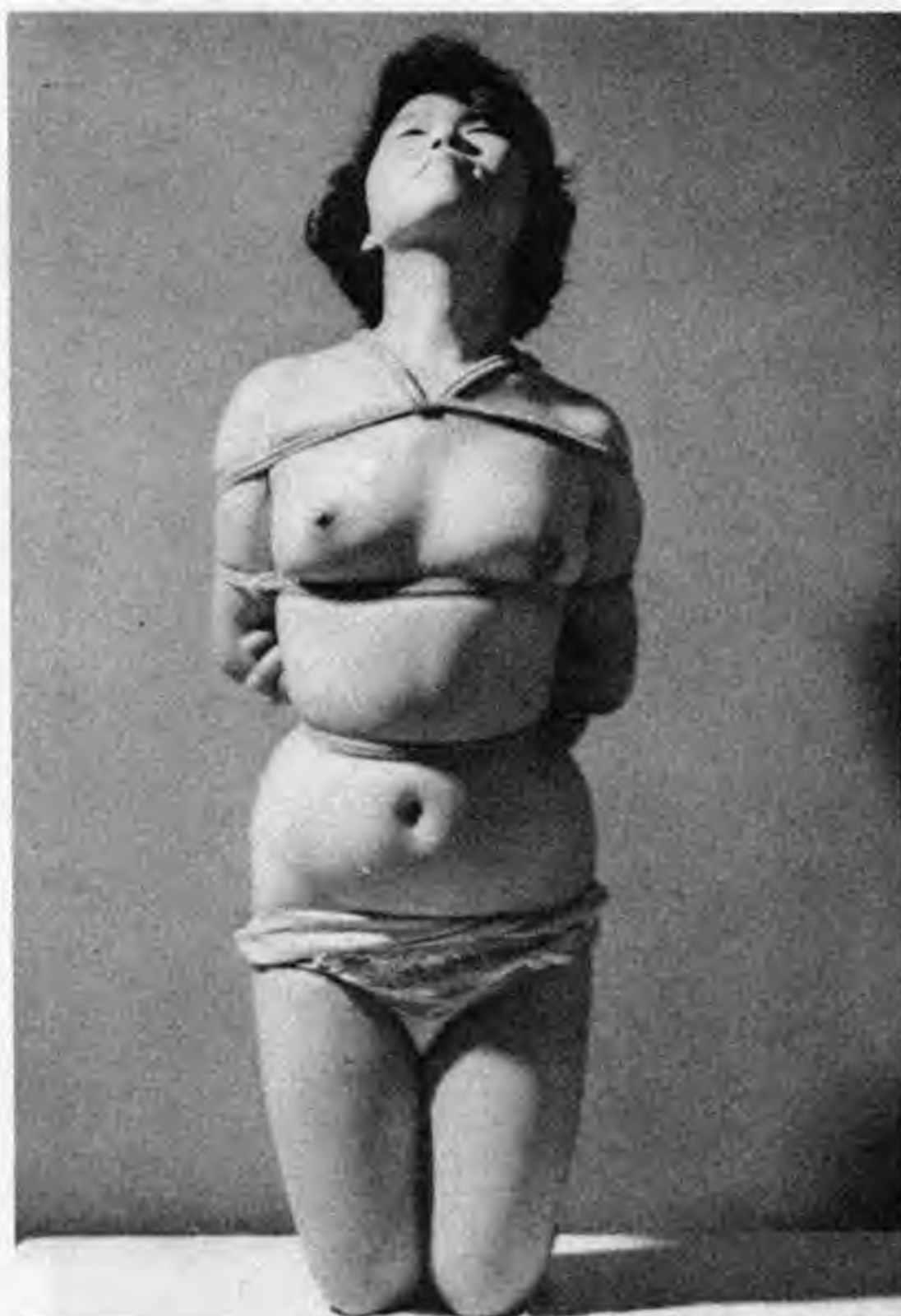


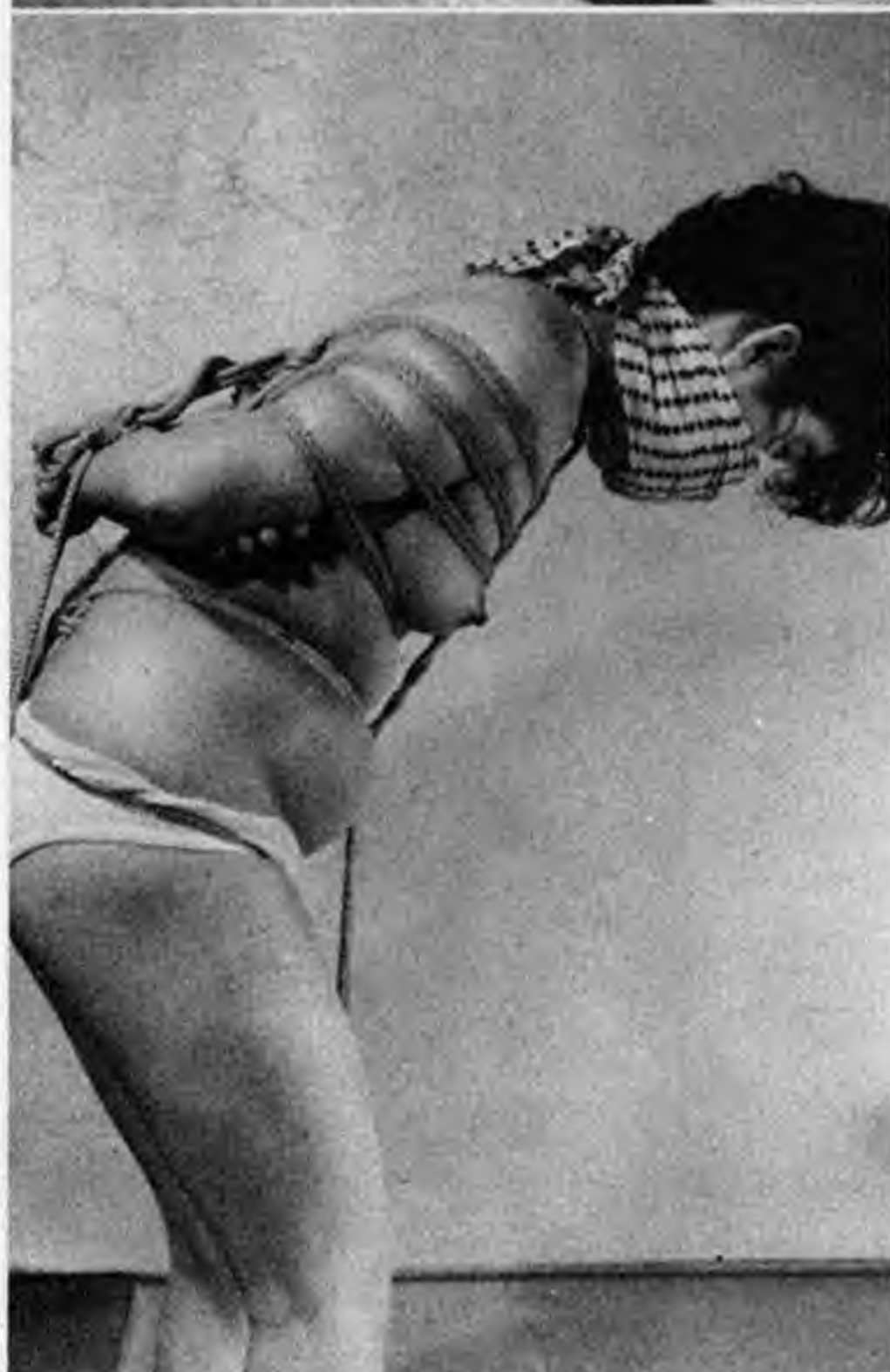


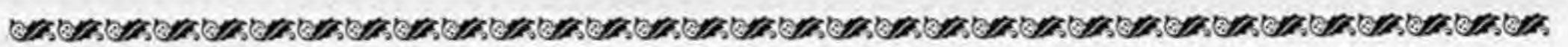
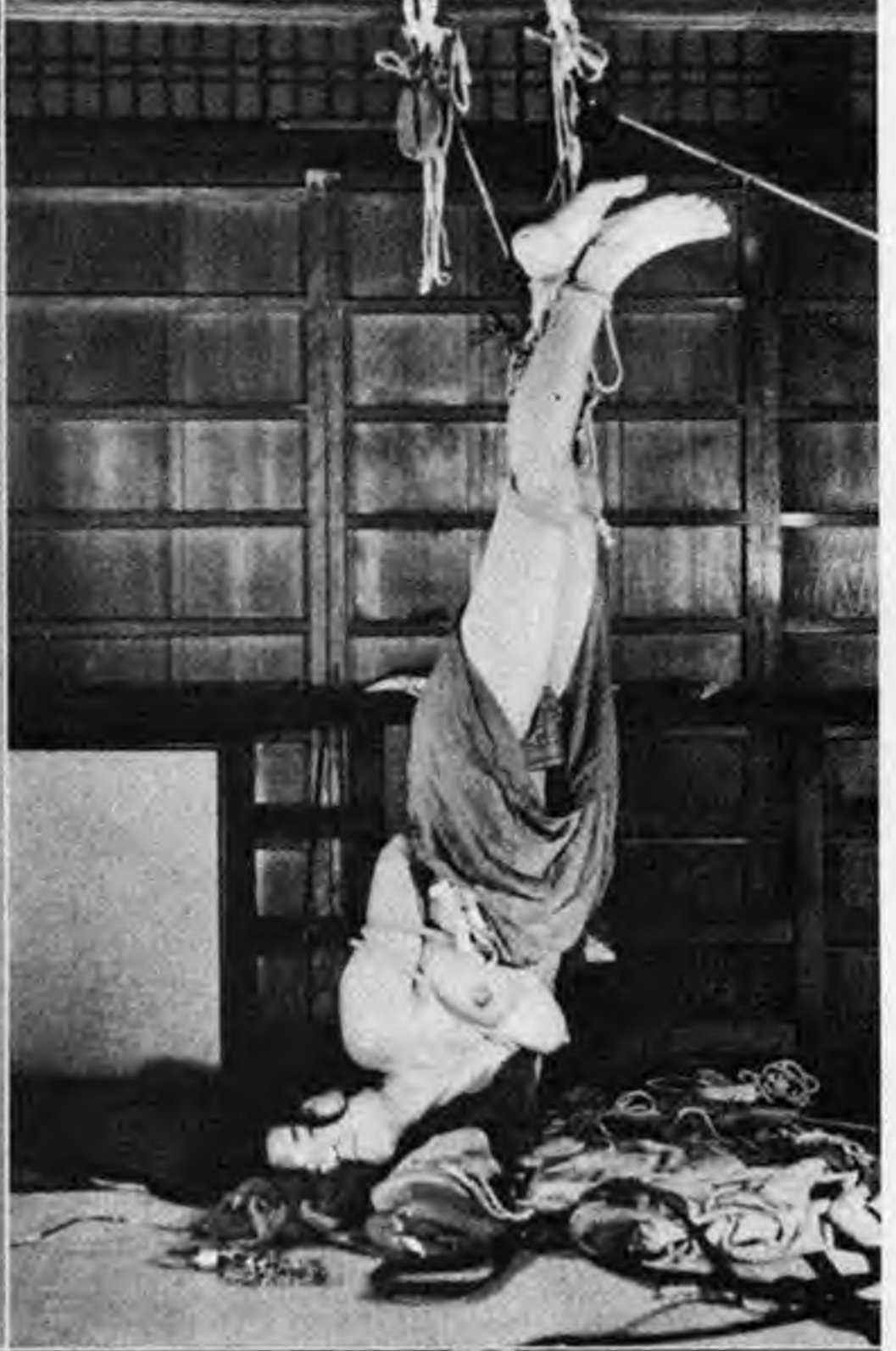
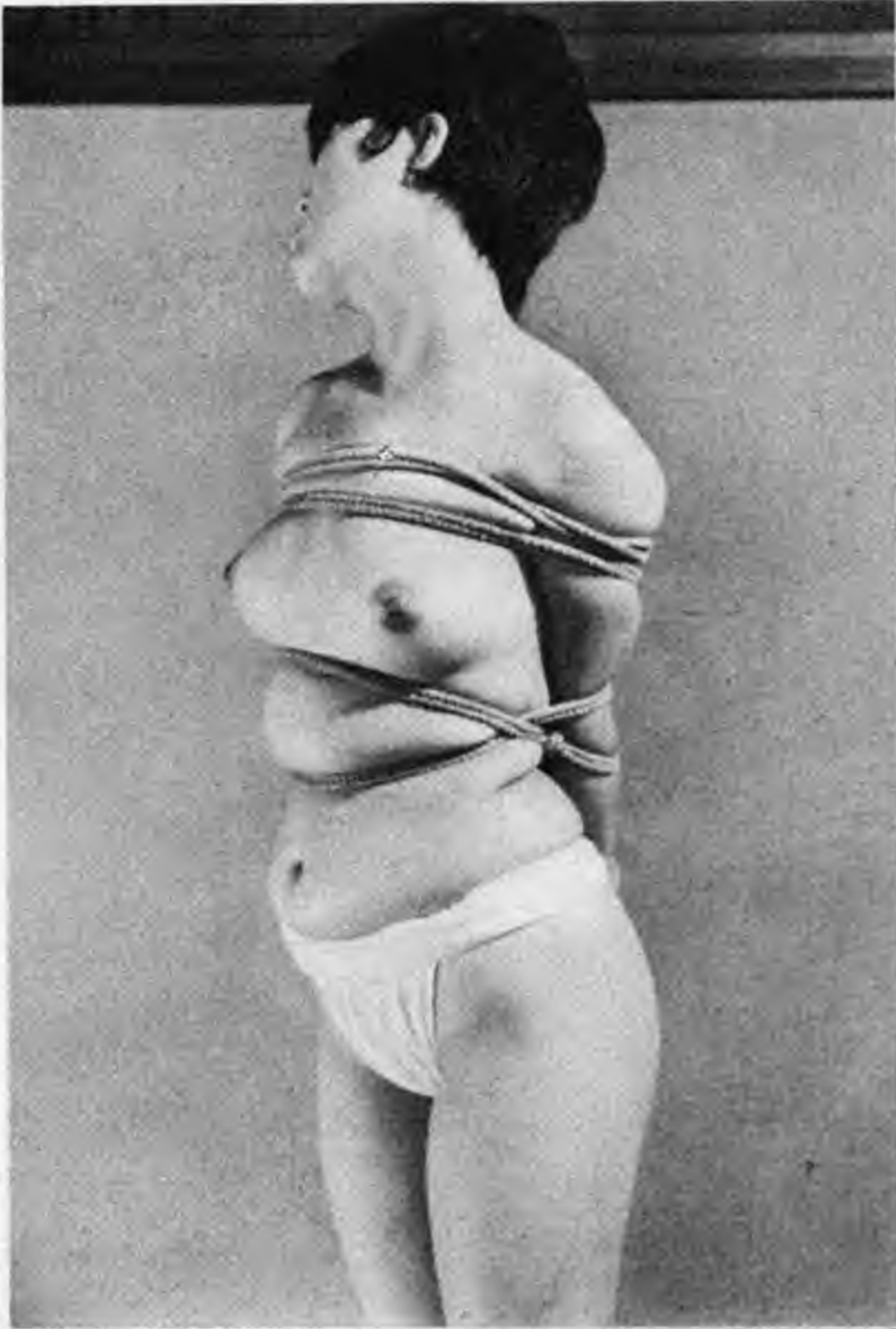




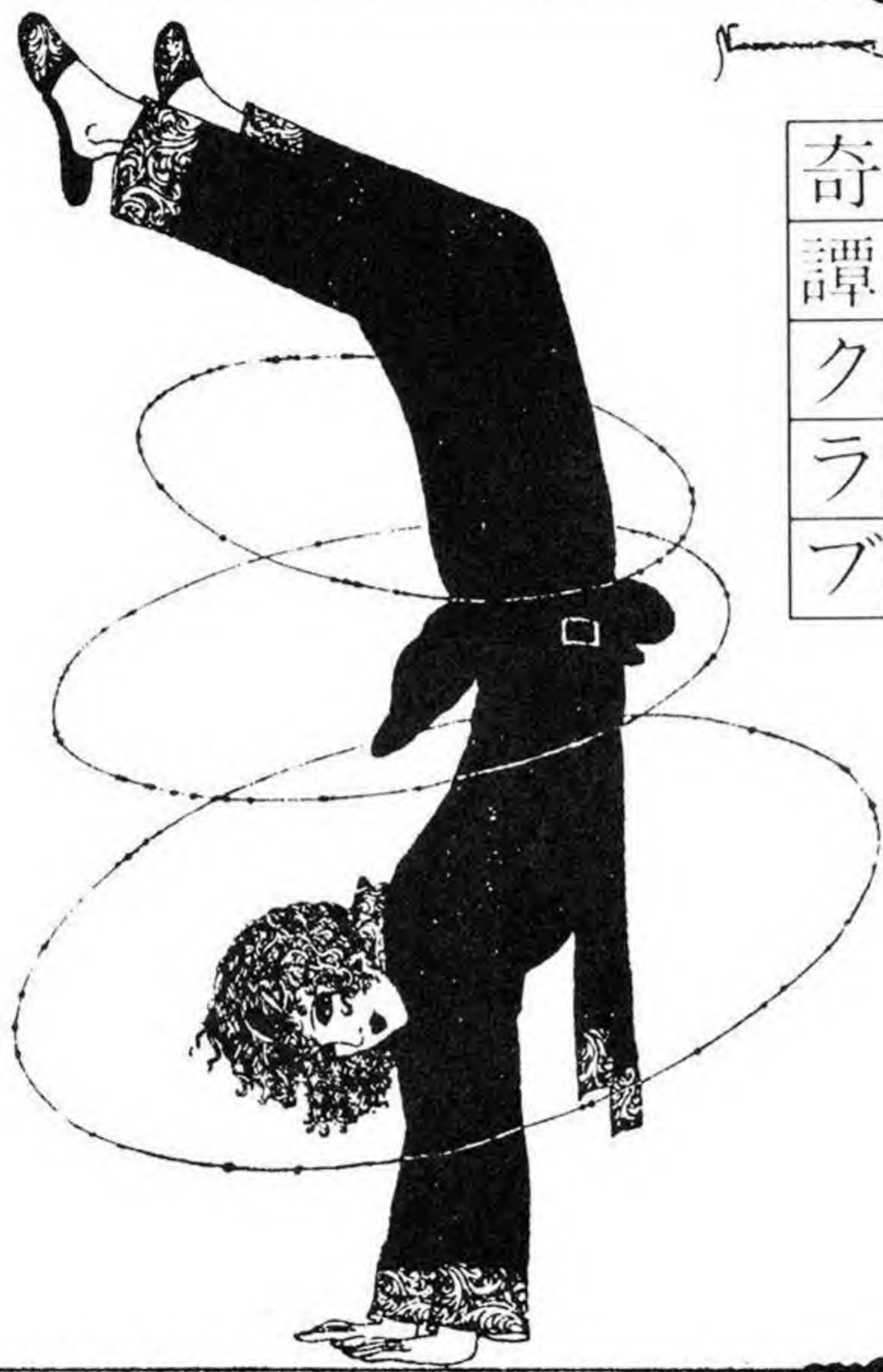








奇譚
クラブ



1982年12月号



愚蒙いさめ草

一 千卷萬卷の書を見ても、千句萬句の理を聞ても、その理を守らず、身持なほらぬ時は無益のよみ事なり、學文するとは身の行ひ志を直さんが爲なり、一句一言の理を聞ても、よく道理を合點して守る時は、其の理に叶ひ、一切の事に亘りてよし、

一 何様の奉公人も、つとめの外の隙はある物なり、是非ともと心ざす時は學文も成べし、又後世の修行も成べき也、是を以て知るべし、主人もなき人の隙のなきといふは志のなきゆゑ

なるを、されば智者は、朝寢、ゆふね、ついへなる話などにて日をくらすをば樂とはせざなり、只學文して義理をよくあきらめて心の内に歡樂す、

一 人の求め持べきものは書籍なり、子孫にゆづらんにも之にまじたる寶あるべからず、書あるときはいつとなく開きてみる事あり、開きて見れば自然に文字を覺ゆる徳あり、文字を覺ぬれば義理をしるなり義理をしれば心さし誠の道に入り、心も靜に、身も修り、家も齊ひ、仁義禮智信の五常をよく守るなり、此五常は佛法の五戒にわたりて功德となり、未來も善果に至るべし、是皆な書をもとめしが元となりて、二世の徳あり、其本みだれては末をさまるとなし、



然ども貧家にては、あたひ出し難き故、大分の書はもとめがたし、一巻二巻にても身持の用心と成べき書をもとめ置き、常に見るべし、南容と云し人は、白圭の詩を毎日三度づゝ詠吟してつゝしまれけるとなり、或書に曰く、わが心の掟となるべきことは、一句二句成とも書きて机の傍はらに置き、又は立居に見ゆる壁にはりつけて心をいましむべしとなり、

一 子に藝能ならはせざるは父のあやまりなり、訓導のおろそか成は師匠のとがなり、父もならはせ師もよく導びくに、しかも子の習はざるは子のつみなり、あたゝかにきて、あくまで喰ふて、ねふりをもとむるは最下の人なり、子に教ざるは子を

にくむに異ならず、教へて學ばざる子はわが身をしらずして、耻をまねぐ成べし、よく學ぶ時はいやしき者の子も貴くなり、物うく思ひて學ばざる時は、公卿の子も庶人と成るものなり、田ありて耕作せざる時は倉の内むなしかるべし、書ありてもをしへざれば子孫愚痴なるべし、萬錢はもとめやすく子孫の賢はもとめがたし、子孫愚なれば禮義をしらず、親のうれひ數々なり、小事もつとめざれば成るなし、よく習ひてこそ發明とも成べきなれ、よく學びて道德をつむ時は、凶邪をもおそるゝ事なし、千金を子にゆづらんよりも、一藝を教へたるは遙かにまさるといへり、
一文道に入らずしては一切の廣



大なる理を知るべからず、井の中の蛙の大海を知らず、たてはむ蟲の甘露のあぢわひをしらざるが如くにて、文盲なるものは萬づにうたがひを起すものなり、譬ば犀の角を身に持て大海へ入に、身を去ること五尺なり、日月にむかつて水精にて火をとる水をとる事あり、かやうの事をも見ざる内は疑がふべし、又蛇は足なくしてあるき、蟬は口なくしてなき、魚は耳なくして聞くなり、是等は世間目のまへのふしぎなり、況んや佛法の不思議には夥しき事ありて大智博學の人さへ疑ひを起して迷ふほどなり、高山に登らずしては天の-high事を知る可からず、深谷に入らずしては地の厚き事を知るべからず、只小智のも

のは書典の理を見ては偏へに信じ、疑を起さるるが第一の事なり、一 學文に入りてよく修習すれば、いかやうに鈍なるものも自然に智恵があり、利發になるものなり、玉も磨かざればうつわものと成るなし、或書に曰く、能く學びてしる者は稻のごとし、まなばずして愚なるは藁のごとし、稻は世上の寶となり、藁は其用甚だ劣り、物識たる人は世上のたからともなり、諸人愚ならば國土はたちまちみだるべし、燈はよくくらきをてらし、學文はよく心のまよひを去て明かにするものなり、一 親にはよく孝行をつくすべし、孝行は百行の本なり、今の世の人は愚痴成親は無理おほき



故孝行なりがたしと思へり、然れども是も道理にあらず、瞽瞍は愚痴なる親にて、舜を憎み、度々ころさんとせしかども、少もうちまらずして、孝行を盡せし故、大孝行の名をとりて國王となる、又曾子は親に大孝行の人なり、孟子は是をさへ中の孝行なり人の子たる者は曾子ほどに孝行するが職分なりとて大きにほめ給はぬなり、曾子ほどの孝行の人さへ中分ならば、今世に中分にあたる孝行はあるべからず、偕又親のちいさき杖にてうたば打たるべし、大なる杖にてうたんと怒かる時は遁ると禮なりと、孔子はをしへ玉ふなり、忠臣は孝子の門にもとむと云へり、親に孝なる人は主君にもかならず忠なるものなり、

一 藝を習ふ人は先師匠をうやまひ畏るべし、子弟は七尺さるて師の影をもふむべからずとなり、奥義に至りては親にもかへてあがむべき道なり、然るに諸人少く習ひ得たる時は師匠も輕賤し、教をあなどる故しかも習ひとげざるなり、弟子はかしこしとも師の半學にも及ばぬ心もつべし、たとひ師は智惠不足なりとも弟子謹んで習ふ時は師よりも上の智を得るものなり、例へば藍はあるより出て水よりも青く、氷は水より出て水よりも冷なるが如し、
一 妻女の道正しからざれば國ほろび家亡ぶる事昔より數多し、殷の紂王の姐己、周の幽王の褒姒等なり、詳しくはそれの書に就て見るべし、此等は皆



國を亂せし人々なり、今時世間に家をほろぼす、妻女多し、第一女は内を治るが役なり、よく正しきを賢女と云べし、宋公の夫人に伯姫といふ方、ある夜御殿に火事出来たり、人々皆にげちりしに、一人の臣下伯姫とく出玉へといひければ、女の禮義二人つれざれば夜はあるかぬ法なりとて出玉はざりしと、この外貞女は兩夫にまみえじとて、入江に身をなげ空しくなり、高行と云ふ女の鼻をさいて遂に二夫に嫁する事なし、令女は二ツの耳を切り、李氏は臂をたち、魔氏は目をくちりてすてしとなり、斯様の賢女は名も高く末代にかいみになり、佛も夫婦の正しくして家をさめ親によくつかふるをば在家のぼさつと讃し

玉ふなり、妻才智あれば夫のわざはひを寡くし、夫の惡敷をばかくし、よきをばあらはし、六親をよく和合せしめ、いやしき夫にてもよく随ひおそれて貴く見するなり、家のさかえおとろへは妻の善惡によるものなり、或書に曰く、己より富る人の娘を妻とすべからず、彼其の富貴を心にさはさんて舅と夫を輕しめ、我心に奢あるゆゑ、萬のやぶれとなりて必ずほろぶるものなり、かやうに惡敷妻なれば夫も災禍にあふ事多し、つねに夫の惡敷をかたり、人にも輕く思ひせ、我はいやしと少もおそるゝ體なく、家内をみだすものなり、貧しく成ては夫婦の口論たゑぬゆゑ、親のうれひもおほし、夫婦は一同に孝行なれば親



の心も樂しきなり、
一 女の性は皆ひがみたる物なり、人我の相ありて、纔かの事にもいかりつゝかほあかくなり、貪欲はなはだしく、恥をも忘れ、我身を愛して人には邪見なり、偽り多くして詞をたくみにし、くるしからぬ事をもとへばいはず、偕は思慮ふかさかと思へば淺ましき事までとはず語りにいひ出し、たばかり飾る事は男の智慧にもまさるやうにて、しかも人に見すかざる事多し、物の哀をしらす、又少の事にも人をうらみ、人のうはさをいひて常の慰とし、へつらひかざるゆゑ損多く、堪ゆべき事には弱くして、弱かるべき事には我慢をおこし、短慮未練にして行末の考へなき物なり、女の

性はかく拙きものなれども、夫の賢きは女もかしこく見ゆるなり、夫の位高ければ女も位高く成るものなり、松高ければ藤も千尋をよづるがごとし、
一 烈女傳に曰く、女懷妊しては身持を大事にすべし、ふす時は身をそばだてず、坐る時に身をまげず、惡敷ものをくはず、又切目正しからざる物をもくはず、夜は書籍をきき、よませて胎内より能事ををしゆれば、才智なる子生るゝなり、下劣なる女は惡食をあくまでくひ、常にいやしき事をきかせ、立居もあらくする故に下女のうみたる子に賢智なるは有るべからず、
一 隣は貧家にても之を輕しむることなく、總じて近隣をばし



たしむべし、互に所用多き物なり、遠き所にある水は近き火をけす事なし、遠所の親類は近きとなりにはをとる事おほし、しかれ共和合なる隣りはすくなき物なり、一切のあじき事は必ずとなりよりひろまるべし、近くして互に非をしるゆゑそしりあふ事あり、兩虎二龍はいつれも争ふがごとし、一家は金殿に非ずとも漏らざればよし、衣服はにしきにあらずともあたゝかなればよし、食物は珍膳にあらずともひもじからざればよし、妻は顔に色あらずともかしこきをよしとすべし、周禮にいはいはく、貧にても心きよければ常に樂しみあり、富ても心おこりて親子兄弟夫婦の六親不和なれば、常に憂ひ多く

して心ぐるしき物なり、一心にたくみ有る者には、常に詞おほく、つたなき者は詞すくなき者なり、しかも利口にしかて詞多きものはつかるゝ事多く、又萬づ巧みなるゆゑ人に損をかけてぬすみにもまさる事あり、又人をくるしめ身にとがたへぬ者なり、にぶき者は身やすくして人にも憎まれず、とがなくして人にあはれまるゝゆゑあやうき事なし、一良薬は口に苦けれども病に用て利あり、忠言は耳にさかふ物なれ共身におこなひて徳あり、人の諫言をば心をとめて聞くべし、いさめをいふ程なほ曲るものあり、是は下等の人なり、人の諫をよく用て身持を直すを賢き人とすべし、親にても不義



なる事あらば諫言を加へてとど
むべし、家に諫子なければ其家
かならずほろぶといへり、畏れ
ていはざるは誠の道にあらず、
將又意見をいひて用ざる子をば
早く捨つべし、憐とてすて置と
きは仇と成ことおほし、
一 士卒のすべき事を大將がい
たし貧者のすべき事を富人がい
たし、若き内にすべき事を年寄
ていたし、貴人の習ふべき事を
いやしき者がならひ、男のなら
ふべき事を女がならひ、京の者
のならふべき事を田舎の者が習
ふたぐひ、何も力はつかれて其
効はすくなきものなり、
一 餘り才能ありて人にうやま
はれあるひは、勢ひさかんにし
て人の上す役となり、君の威
をかりて人をかすめ、利慾を盛

にして奢る人は、現在未來をと
りうしなひたる人なり、先此世
にては人に憎まれ、あの世にて
は現在の名聞にとりまされ、靜
なる修行なくして惡道におもむ
くべし、正道にして諸役をつと
むる人の事にはあらず、前役の
人惡敷身持にてほろびたる事
でもしり、かほどに詞多くいへ
ども人是用ぬものあり、巧者
めきて理をいはんそのひまに其
わざはげみたるが徳なり、
一 家にさまゝの財と一のへ
置て、われ死して名を残さんと
子孫にゆづる事よき人のせざる
事なり、よからぬ物たくはへ置
たるもつたなし、よき物は心を
盡しけんと思へてはかなし、分
を見れば後役の人は是をかいみに
して仁道につとむべき事なる



に、しかもつゝしむ人すくなし、
見れどもみえず、きけども聞え
ずとは、是なるべし、
一 智徳ある人は我身よりしり
顔にはいはねども、大明ひかり
をかくさるならひなれば、人
是を知てたふとぶなり、浅智の
人は自分よりいみじきやうにか
ざり、其實に過る程と一の置
たるも名聞ぐるしきわざなれ、
又死たるあとにて子孫われにゆ
づりしといひて奪ひ取も見苦
し、あさ夕なくてかなはぬ道具
ばかり持て、其外はなくて過る
を要すべし、
一 人中に交ふことは大事の物
なり、己れ覺えずして人に無禮
もあるべし、又人より過分の無
禮あれば堪忍しがたきものな
り、うすき氷をふむが如く、兼

て遠慮を廻すべし、扱事おはり
て人々立さらば、我もとく立去
べし、あとに居のこりつるは萬
につけて失多き物なり、
一 女はあきらかなる鏡にて、
顔の善惡を見べし、人は良友に
善惡をとひてしるべし、惡きを
見て人より諫むる事あらんに悦
んで聞き、身持をなほさる人
は惡き病を以て療治をさらふが
如し、又あしきを見て言はざる
は誠の友にて有るべからず、偕
友をもとめんには我よりすぐれ
たりと思ふ人をよく見て常にし
たしみまじはるべし、我に似た
る人を友とする事は益なき事な
り、我はもとより拙きゆゑなり、
すぐれたる人にまじはらずは我
身なほるべからず、況や我より
劣る友なれば早く遠ざかるべ



し、なきにおとり害のみ成ものなり、古への人は友とまじはるに心に信をつくして朋友には命をもおしまぬ程の仁義あり、今の世の人は面の交をばむすべども心はまことの友にあらずして多くはあだとなるなり、遙かなる道を行きて馬の力のつよき事しるゝ如く、久敷友とまじはりぬれば心に信なき事しるゝなり、初友とまじはるには始めてあひし時の心を持て常にみだれずは、老後に至るまで互に恨みあるべからず、

一 親の子を憐れむに、誠の慈悲と、又あだ成慈悲とある者なり、誠の慈悲といふは、先づ災を加へて病を治し、放埒をさせずして藝能を授くべし、當分は苦しけれども成長しての悦び數

々なり、愚鈍なる親は末のかんがへもなくして、先當分よろこばせんと思ひて、甘きたぐひを食はせ、又一切の食事にあかする故、五臓をやぶりて一代の病者となり、或は其内死するものあるべし、灸はあつかるべしとてやかず、藝能は氣づまりならんとてをしへず、かくの如くする程無藝の者となりて、耻をもかき、事をもかくなり、幼少の放埒一生なをらすして、先祖の名をもくだし、却て親にも不孝に、我身も置どころなく、妻子等にもなげかるるなり、小兒の病む事は飽にやぶらるゝなり、大切に思はし品々のものあくまでくはす可らず、一切の病は口より入、一切の禍は口より出るとなり、ゆたかなる年には病



多し、色々のもの飽くまで喰へば眠りくる物なり、ねむりくれば諸行ものうし、幼少の時ものうきを忍びて藝能習はざれば、年たけて後悔千萬なり、耻を思へば命をもすつべき程の事多し、是を思ひて人の親は心して子をば育つべきものなり、一利口すくなき人の、時に逢ひて高位に登り、又小智なる人の分に過たる事をはかり企つるは、何もわざわひのものとひなり、總じて益もなき大事にとりかゝりしかも果すことなくして一日く日を費やし暮す時は、命も遂にへり、覺へずして老人と成るべし其時は魚の水へりて泥にいきつくが如く、勞苦を受けて生涯も無やうに成ものなり、一學文に心ざす人は書をもと

めす、よき師にあはすして遂に文道成るとあり、偕一卷一章にても覺へたるをば數度ふくして理をかながふへし、理は無盡なるものなり、一句の理も智者の考ふる時は廣大となり、愚蒙なる者は一卷の書も始終をよく考へざる故僻解多くして正理をうしなふものなり、呂舍人の曰はく、書をよむには毎日何程見んといふきはめをして懈怠すべからず、一日に半卷又は一卷までも見べし、末を多く見んとせんよりも、あとをよく繰るべしとなり、一日に十枚づゝ讀みて一男子は誑語をさかすべからず、女子にはしりあそぶ事を戒めて、書のはしをもよますべし、



おさなき内に能く訓ゆるを要とすべし、成長してはをしへを守らぬ物なり、たとへば木のまがりたるが如く、ふとく成ては直らざるが如し、子を憐まば杖を與へ、子をにくし思はし食に飽するのみ、

一 愚者は少も富る時は忽ち貧なる者をわらひ、少も藝能つさぬれば無藝なる者を笑ひ、少も位あがりぬれば俄にひくきをいやしむものなり、

一 福人より貧人に恩をばせずして功をまち、或はしげく頼みつかひ、又貧人より福人にさしたる功はなくして常に恩を恃みあるひは貪るたぐひ、何れも自分のあやまりなり、

一 少の物をも置所を常に定て、用の時たづねぬ様にすべし、

一 一言にても理にあたらぬ詞をはいふ事なかれ、無智のものゝいふ事は理にあたらざる故義をやぶる事おほき者なり、四皓が曰く、詞を以て人をやぶるに痛むこと刀にて切か如し、一言にてもゝつしむべき事なり、詞の多き人をはほむへからず、犬のおまり吠るは惡敷が如し、善語は一言にても大切に守るべし、古への賢人は人のもとへ財をば贈らずしてよき語をおくりたると見えたり、其語をうけたる人音楽よりもまさりてたのしみけるとなり、愚なる人も人の惡敷を言はいすむめなる道理をいふものなり、

鏡山人のしかゝらさきみえて
我身の上は誰もみづらみ
といへる歌の如し、さとき人も



我身には最負ありてあしきをば
しらぬなり、人をいふ心をもつ
て我身をせめ、我身に最負ある
心を以て人を見べきなり、
一 智ある人に常々まじはりぬ
れば、其徳をみづからも蒙るゆ
ゑ、人あなどる事なし、惡友と
まじはる物をは人おそれをなし
ていむものなり、たとへば虎の
さきに立て行く狐をば、一切の
獸おそろゝが如し、狐はおそろ
しからざれども虎のさきに行ゆ
ゑなり、

一 をしへすして人のあやまち
をいかり憎むは大きな無理な
り、又をしへずしてあやまちす
るを待も愚の至りなり、人をつ
かふに、よき事をばほめて、惡
しき事をばゆるくすべし、あし
き事は自らなほる物なり、我身

正しからざる時はをしへを用
ず、我身正しければ教へざれど
直ぐなるべし、よき事したるを
ばもてなさずして、あしき事し
たるをゆるさざる時は、心より
したがはざる故なほりがたくし
て必ずそむきはしるものなり、
勇みある僕は無禮なる事おほ
く、奢る子はさはめて親に不孝
するものなり、主人のいましめ
愚かなるは主の非なり、親のい
ましめ愚かなるは親の非なり、

投稿手記

花電車妻

青山 愛

一

茶色の座卓の上に跨がって、後手に荒縄で縛られた真っ裸の私は、アヌスに力を入れておりました。

丁度トイレで用をたすような恰好になりながら、アヌスをつぼめて花園の筋肉を調節するのでございます。

でも、初めての私にうまくできるわけがございません。

主人は、そんな私に、

「ホラ、もっと締めて。下手だなあ……」

と、カメラのレンズを向けながら、好き勝手な事を言ってくるのでございます。

「これでも、頑張ってるのよ。だけど、思うようにいかないんだもの」

しかし、少し主人に言い返しなごらも、花園にはさんだバナナを何とか、でこぼこにしなければと、女の意地の

ようなもので一杯の私でございました。皮をむいた柔かいバナナは次第に長さを見せて、もう少しで下に落ちそうでございます。

そして、ポトンと板に当たった音がした途端、私は股を覗くようにして、バナナの状態をながめておりました。

それは悲しくもでこぼことはいかず、表面が指で軽く押しつぶしたようになっていただけなのでございます。

ほとんどが、花園へはさむ時の主人の指の跡で、私はあれほど強く締めつけたのにと、ガッカリしてしまうばかりでございました。

一方主人は、その間も休む間もなくカメラのシャッターを押し続けておりました。

主人に正面を向けている私を、時には全身が入るように、時には花園だけが大写しになるようにと、近づいたり

遠のいたりして、正面から撮っているのでございます。

しかし、シャッターの音がひっきりなしに聞こえてきても、バナナに気を取られ夢中になっておりました私は、撮られているという恥ずかしさなど薄れ、随分淫らな女だと見えた事でございました。

私の名前は前田佐知子。結婚三年目の27才の人妻でございます。

主人は35才。平凡なサラリーマンでございますが、子供時代からカメラが大好きで、今では、現像もやってしまふほどの写真マニアなのでございます。

ところが、人前では風景写真専門と称し、撮影旅行に必要なリュックサック、寝袋、雨ガッパ等々と本格的な装備を買い揃えながら、一度も使わずに、押入れの奥に放り込んであるのでございました。

そうなのでございます。主人の対象物はもっぱら私ばかりで、それも痴態ばかりを……。

隠し撮りから始まり、そして淫らなポーズの裸像へと次第に要求が深まっていくうちに、とうとう今度は花電車まがいの事までさせられてしまったのでございました。

土曜日の朝、出勤する前に、バナナと玉子を用意しておくように言われ、それを夕食が終わるとすぐ自分で玉子をゆで、準備を整えた主人だったのでございます。

もちろん、主人の目的がわかった時は、私は恥ずかしさに顔をほてらし、拒否しておりました。

でも結婚してからの毎日で、主人に馴らされてしまったのでございまいしょうか。

いや、いやと言いながらも、結局は一度言い出したら後には引かない強引な夫に従わされ、それらを素直に吸収していつてしまう私なのでございます。それも、最後には、自分のものでもあるかのように身体に泌み込ませ、心から楽しむ事ができるのでございまい

た。

普段はおとなしく、そのような淫らな行為などできそうにもない私なのに、いざ痴態を演じ始めて、一変しますと……。

私の身体には淫婦の血が流れているのでございまいしょうか。

いえ、女というものは皆そういうものなのでございまいしょうか……。

さて、もう一度話をもとに戻して、続きをお話しなければなりません。

あれから、バナナが終わりますと、次がゆで玉子の番でございました。

カラをむいてつるつるに光っているゆで玉子は、Lサイズぐらいの大きさだったでございまいしょう。

それを、白さが隠れてしまうまで、すっぽり花園に収めてから、ゆっくりはずして来いというのでございます。

もちろん、私は座卓にしゃがんだまま、主人に収めてもらっておりました。

主人の温かい指が度々私の花園やつぼみに触れ、くすぐったいような快い気分でございました。

そのうえ、主人は指で押しつぶし白身が割れて黄身が飛び出さないように、

ゆっくりゆっくり収めていくのでございます。

それらの過程を、私は上から見下ろし、そのあられもない恰好を思うと、被虐的な気持ちになって、ますます燃え上がってしまうのでございました。

そして、主人のヨシという言葉で、私は落ちないようにつぼめていた花園を、そっと開いて行ったのでございまいすが……。

ゆで玉子が半分ぐらいまで見えて、急に細くなったかと思うと、あつという間に下へ滑り落ちました。

「あっ！ダメダメ、もっとゆっくり……」しかし、落ちる方が早く、主人の願しも後の祭りになっていたのでございまいす。

私は、そんなに簡単にはずれてしまふとは思ってもおりませんでした。

主人も、きっとそうだったでございまいしょう。

最初、途中、最後と一こまづつ、区切りをつけて撮るつもりだったのが二枚しか撮れず、主人はとても残念そうな表情をしているのでございます。

私は、済んでしまってから、

(ごめんなさいね……)

と、心の中であやまり、主人の思い通りにならなかった結果に、何だか悪い事をしたような気持ちになっておりました。

ところが、すぐ、

「まるでにわとりだなッ。女はやっぱり下等動物だ、へへへ……」

と、にやついているのを見て、反対にホッと安心していたのでございます。いつもなら、強く反撥しているのに、その時は、なぜかそんな主人が嬉しく、そのうえそれを認めたかのように恥ずかしくなってしまったのでございました。

そして、バナナではわかなかった興奮の印が、ゆで玉子の回りに付着しているのを主人に見られ、

「何だ、何だ。恥ずかしくないのか、こんなに流して……」

と、わざわざ手に取って目の前に押し付けられた時、私の羞恥心は最高にふくれ上がりただ顔を赤く染めて、思わずうつむかずにはいらなかったのでございます。

「ひどい濡れようだな、まったく！」

主人は、しきりに言葉で、私をひやかし罵るのでございます。

私は、ただ黙っているだけ……。

そんな私に、主人は目尻をたらしして喜んでいたのでございました。

とても淑女とは言えない行為に、驚くほど興奮し、恥ずかしがりながらも楽しんでる私。

そういう気分まで高まってしまうと、何とひやかされ、けなされても羞恥心が変わってしまう私。

主人の喜ぶ顔を見て、自分の事のよう嬉しくなる私。

私って、やっぱり淫らな素質を多分に持っているのではありませんか。

二

そして、そんな事のあった夜から一週間過ぎたのでございます。

主人は会社から帰宅後、三日間を費やして仕上げた例の写真を、一枚一枚じっくりながめながら、喜んだり残念がったりして夕食後のひとときをくつろいでおりました。

まだまだ私達夫婦の間には甘いムードが漂い、倦怠感などございません。

おかげで主人は、台所で洗い物をしておりました私を途中で止めさせ、自分と一緒にながめるよう、うるさく言ってます。

私は、仕方がないという気持ちで、主人の横にひざをくずしていったのでございます。

「どうだ、迫力あるだろう。これが、皆お前なんだぞッ！」

三〇枚ぐらいある写真の束を、嬉しそうに一枚づつ手渡してくれる主人の声は、はずんで満足そう。

私は、主人に肩をすり寄せる姿勢をとりながら、次第に余りにもエロチックなそれらの写真で、胸がドキドキ高鳴っていくのでございました。

しかし、それは私だけでなく、主人も同じ様子なのでございます。

丁度、バナナが半分ぐらい覗いている、アップの写真をながめ終わった時、主人は急に、

「こんなに股をおっぴろげて！今からお仕置してやるッ！」

と、ふざけた調子で、壁にかけてあった荒縄を取り、私を押し倒して来たのでございました。

そして、両手首を前で縛りつけると、私の下半身からすばやくビキニパンティを脱がせてしまったのでございます。

一方私も、顔が写っていない写真など、自分とは思えないわいせつさに、興奮し始めておりましたものの、やはり強姦めいては、反射的に逃げ出す恰好になり、いつの間にか力一杯抵抗する形になっていたのでございました。

しかし、だからと言って決していややではなく、私の口から飛び出す大きな叫び声ははしゃいだような響きを持っていた事でございましょう。

ともかく私は、丸裸にされてしまった花園を、不自由な両手で隠そうとしておりました。

でも、主人の力強い腕力で、それもさまたげられ、逆に指でもて遊ばれるはめになってしまったのでございます。「そんなに必死になって隠すところをみると何か隠しているな？ 何を隠しているのか俺に見せろ！」

主人の声は甘い調子で、むしろ抵抗する私を喜んでいる様子でございました。

そして、そんな私が主人の愛撫で変化

して行く様子を、面白がっているのでございます。

もちろん、私は主人の性感を心得た愛撫に、身体の方が拒否できず、うつとりしておりました。

そのうえ、主人に強いられたとはいえ、

「そう、そこ、そこ……。うんとお仕置してエ」

と、つい甘く口を滑らしてしまったのでございます。

「よし、望み通り、たっぷりお仕置をしてやるからなッ！」

私は、まんまと主人のわなに堕ちたのでございます。

すぐに主人は、私の両手を胸の所で固定する為に、胸の回りに荒縄を回し、縛りつけておりました。

緩くでございすし、それぐらいの縛りなら、以前にも二、三度受け、別に驚くほどの行為ではございません。

しかし、やはり、手の自由を奪われるという感覚は、刺激的なものでございます。

相手が主人だから、狂暴にされるという恐しさはないものの、これから起

きようとしている未知へのかすかな不安や、怯えにも似た気持ちには、あるものでございましょう。

ところが、それが興奮剤と変わって、胸を熱くさせるのでございます。

それは、私には押さえようもない、性への素質とでも言うのでございましょうか。

さて、それからの主人は、畳の上に寝転がした私をななめ上から見下ろして、まずは一服の様子でございます。

時々横目でにやつきながら、ライトの澄んだ音をカチンと鳴らし、火のついたタバコをおいしそうに深々と……

そうやって、主人は次に何をしようか考えているに相違ございません。

それも、今まで遊んだ事のない、変わった面白い遊びを……

するとやはり、タバコの先が一センチほど赤くなって、それが灰になりかけようとした時、ふと何かを思いついた目つきで、ながめたのでございます。

そして、タバコを指にはさんだまま、私の下半身に近寄ると、すばやくスカートをお腹のあたりまでめくって、太股を強引にこじ開けようとしたのでござ

ございました。

もちろん、私は、束縛されていない両足をバタバタさせ、全身で抵抗しておりました。

「あなた、何をする気なの？　ねえやめてったら」

急に空気の冷たさを感じ始めた下腹部に、主人は何をしようとしているの
でございました……。

私が、それほど心配しましたのも、主人は後向きになって背中を見せているのでございました。

背中が邪魔で、何も見られないという事は、とても落ちつかないものなのでございます。

何もされなくても不安なものですし、触れられればその恥ずかしさに身をよじらせ、いつまで続くかわからないその感触で淫れてしましましょう。

ところが、そんな気分にも襲われておりました私に、主人がして来た事は、何と口に咥えていた火のついたタバコを、花園に植え吸わせる事だったのでございます。

「動くんじゃないぞッ！　動くをやけどするぞ。」

ちゃんと指でささえながらも、主人はそう言って脅しにかかってまいりました。しかし、

「何、何してるの？　何をはさんの？」

と、まさかタバコを植えたとは夢にも思わず、かすかに何かをはさんだ感触に、私は叫んでいたのでございます。

「へへへ……タバコだよ。上の口で吸えるなら、下の口でも吸えるだろう……」

それは、面白い遊びを思いついた時の、嬉しさの表われた口調でございました。

「いやッ、やめて、やめて……」

「いや、だめだッ！　許さん　／＼ほれ吸ってみろ」

一瞬、驚いて激しく拒否した私を、主人ははつきりした口調で無視し、命令するのでございます。

私は、強引に身体を動かし逃げ出すわけにも行かず、仕方なくジッとしておりました。

前もってやけどをすると主人に脅かされた後では、まさかと思ながらも、ひょっとしてという心配で、下半身が硬くなってしまうのでございます。

そのうえ、

「早くしないか、灰がこぼれそうだし……」
と、続く言葉に、私はますます硬くなってしまうのでございました。

しかし、一方ではかなり短くなって
いると想像させられ、同時に早く済ませて、強情な主人を納得させた方がいいと、すばやく頭の中で計算していたのでございます。

三

主人が傍で見ていてくれるのですから、危くなれば助けてくれる事でござ
いましょう……。

でも、火という存在を感じるだけで、今にもやけどをしそうな気分なのでござ
います。

もし万が一、やけどをしたら……。
身体中で、一番微感な、柔かく薄い皮フなのに。

パンティをはく事も、歩く事も、まして主人に愛撫をしてもらう事など……。
そう考え出したら、何だか急にタバコの触れているあたりが、熱くなったような感覚になってしまったのでございます。

私は、あわてて花園に力をこめてお

りました。

そして、吸い込むように、締めたり引き締めたりと、早い速度で交互に繰り返し、主人の反応を待ったのでございました。

ところが、主人は、自分自身に向かって話しているような口調で、

「だめだなあ……、全然変化しないなあ……」

と、元氣のない声を出してきたのでございます。

一応、筋肉の動きで、私が試みたのはわかったのでございましょう。

「ほんと？ 全然？」

「うん、全然。ちょっと煙の出かたが変わったぐらいだ。ちゃんと吸ったのか？」

「いやだわ。ちゃんとしたわよ。無理言わないで」

精一杯試みた私としては、当然もつとよい返事を待っていたのですが、その時は主人の同意など、どうでもよかったのでございます。

おかげで、私の協力的でない態度に、とうとう、

「少し訓練が必要だなッ。よし、これ

からすぐ特訓だ」

と、主人に従わされる事になってしまったのでございました。

私、弱いんです、火とかムチとか、そういう痛みの伴いそうな物は……。

直接、刺激を与えられなくても、真似をされるだけで、最悪の状態を想像、身震いしてしまいます。

さて、それからの主人でございますが、すくんでいた私の気持ちなど知らぬ素振りです、せつせと特訓の準備を始めておりました。

サイドボードの引き出しから、そこに入っていた大学ノートぐらいの木彫りの墨箱を取り出してきたのでございます。

そして、すずりに水をさし、時間にかけて墨をすり出したではございせんか。

手間のかかる作業を、面倒臭い顔も見せず楽しんでいるかのうちに……。

それから、近くにあったその日の朝刊を広げ、二枚くっつけて部屋の空いている所に置いたのでございました。

私は、そこまでの作業で、主人のやらせようとしている特訓とやらを察し

ておりました。

しかし、考えただけでむずかしそうなそんな事が、私にできようはずがございせん。

私は、前もってわかっている結果に、動き回って準備している主人を、また、ガッカリさせるのかと、気が重くなっております。

すると、しばらくして、準備を整えた主人が、ずっと寝転がったままでいた私の身体を抱き起こしてきたのでございます。

そして、新聞紙の上に立たせ、墨をたっぷり含んだ太筆を、私の花園に近づけたのでございました。

それまでに逃げ出す事もできましたが、もう、そんな気持は起きず、あきらめのような心境だったのでございます。

片手で、腰のあたりまでスカートを持ち上げ、覗き込むようにして、

「ほら、広げてみろ！」

と、言う主人に、私は否応なしでございました。

たとえ、そこで拒否しても、時間が延びただけだったのでございましょう。

私は、身体を腰の所から折り曲げ、自分を覗き込むようにして、他人の手にまかせている不安に神経を集中させておりました。

バナナや、玉子のように、丸く柔かい物と違い、固く角のある棒なのでございますから痛くされてはと、心配になるのも当然でございましょう。

ところが、すぐその後、

「これくらいかな？離すぞ」

と、主人が指にはさんでいた太筆の軸を離れた時、想像以上のむずかしさに驚き、たちまち気を奪われて、はしたなくも夢中になったのでございます。たっぷり水分を含んだ毛先は意外に重く、そのうえ、真っすぐな筒の表面は滑りやすくて、少しも気を許せません。

ほんのわずかでも力を抜いたりすれば、簡単に滑り出して、あつという間に支えを失いそうになるのでございしました。

そして、その度に、

「あつ、落ちちゃう、落ちちゃう」

と、大騒ぎをする私を、主人はどれどれという感じで収め直してくれたの

でございます。

私は、一秒でも早く先に進んだ方がいいと、毛先が新聞紙につくまで、腰を下ろしてまいりました。

そう、下腹部での書道なのでございます。

ところが、上から見下ろしている私には、毛先と新聞終との距離感がなく、軽くつけたつもりなのに強く押しつけていたのでございます。

すると、少し腰を揺らしただけで、あつけないくらいに滑り落ちてしまったではございませんか。

しかしそれならと、今度はつくかない程度で試してみても、結果はほとんど同じ……

ただ、みみずがのたくったように震えた、とぎれとぎれの細い線が、新聞紙の上に残っておりました。

でも、それはなさない限りでございました。すると、

「何だ、これくらいの方ができないのかッ。何もできないんだな、お前は……」

と、わざとバカにして、私をからかっっては喜んでいる主人の声が飛んできたのでございます。

思わず、私は、

「始めてなのに、うまくいくわけないでしょう！。私だって練習すればできるんだからッ！」

と……

本当に、私の負けず嫌いにも困ってしまいます。

おかげで、自分でえばった以上、何としてでも、主人に認めさせずにはおかないと、進んでとまでではないにしろ、それから毎日その特訓の連続でございました。

しかし、その度に、私を丸裸にし、やはり縛る主人なのでございます。

そして、それは背中に回させられて後手であったり様々でございましたが、私はどうしても自分から手が出せず、主人を手こずらすのでございました。

まともに覗き込まれ、じつとながめられているかと思うと、女の羞恥心をくすぐられ、とても恥ずかしいものでございます。

そのうえ、肉体の線が丸見えで隠す事も許されません。

その度に、それなくして何の楽しみがあるものかと言った調子で、相変わ

らず主人は私を辱しめるのでございます。

ぜい肉の少しつきかけたお腹やお尻、とても美しいとは思えない花園、大きくふくらんだ乳房、くずれた肉体の線等々……、すべてに主人の視線を痛いほど感じずにはいられないのでございます。

そして、それから……

特訓の成果が日を経るにつれて、徐々に現われてまいったのでございます。

一本の長い線が書けるようになり、太さもかなり安定してまいりました。

それは、手で書いたように、真つすぐの鋭い線ではございませんが、まずまずの出来と申せましょう。

私は、

「ほら、私だってできるのよッ！見直した？」

と、主人にいばり、何となく嬉しくなっております。

そんな事が、決して誇らしい特技だとは思えませんが、私にはやはり嬉しかったのでございます。

近頃ではバナナ切りやお習字にもすっかり自信がつき、夫にもほめられる

のですが、私にはまた新たな心配が増えたのでございます。

それは、私の珍芸を一人で眺めるのはもったいない、だれかに見せてやりたいものだ、と夫が言いだしたことからでございます。

そんな姿を他人に眺めさせるなんて……、でも、夫はきつと実行するに違いありません。

私もなんだか自分の特技？を自慢したいような、そんな気持ちになっているのでございます。



新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビルF

株きたん社内

現代芸術研究会

投稿手記

野外セックス

青木昶久男

復刊号を拝見しました。期待はづれの感じも少々ありました。SMに限らずエネマやフエチ、レズなども扱っていきたい、ということのようなので今後に期待したいと思います。

それはともかく、「奇ク」の誕生は願ってもない好機到来でした。というのも、私たち夫婦が今年の夏に実行したスリル満点の体験を誰れかに話したくてウズウズしていたところだからです。

その体験を書く前にまづ自己紹介させてもらいます。

私は東京都心から一時間ほどかかるところに住んでいる四十一歳の会社員で妻は三十七歳、小学生の子供が二人います。実をいうと、私たち夫婦は三年ほど前から日誌を読み、スワップを

八回経験しました。最初は洩る妻を強引に口説きおとして実行したのですが、これが意外とうまくいき、その後も一、

二カ月おきに続けました。時には相手のご夫婦とうまく噛みあわず失敗したこともありましたが、妻の感度が著しく発達したのは確かでした。しまいには私のほうが呆れるほど積極的になり、相手のご主人だけを借りてきて三人プレイをやったこともありました。

いざとなると、女のほうはるかに大胆で、好色なのだと言った次第ですが、そういう私も好色なことにかけては人後に落ちないと思っています。

ただ、私はどちらかというと内攻的な性格で、スワップにしても実際に相手の奥さんとセックスすることよりアレコレ想像しているほうが楽しいのです。例えば、裸になった時の体の様子やヘアの茂り具合、あの部分の形や色、

それに絶頂を極める時の身振りや声などを勝手に想像して楽しむのです。

正直に言えば、私がスワップや3人プレイを実行したのは相手の奥さんを抱くことより妻の変化に興味があったからでした。妻は年をとるにつれてだんだん感度がよくなってきました。娘たちに手がかからなくなってからはその傾向はますます激しくなって、婦人雑誌に載っていたセックス記事を読んでフェラチオをするようになったり、アヌスにも快感があるんですって、と私に指で刺激させるようなことまでしたのです。

中年になると若い頃のような真面目なセックスはしなくなるものらしく、私たちは快感を得ることならなんでもやってみたい、とさえ思っていたのでした。スワップや3人プレイもその為の手段なのです。

純粹に肉体的な満足といえれば私より妻のほうがずっと得ていたと思います。いくつかの失敗を除けば、妻は私以外の男にセックスされてそれこそ腰が抜けるほど満足したことの方が多かったのですから。

その点、私のほうは前にもいったように想像を楽しむのですから、現実には妻以外の女性を抱いてもあまり面白くなかったのです。ことにスワップの相手の奥さんがひどく好色だったり、経験が豊富だったりすると、どんなに魅力的な体の女性であってもふるい立てないこともしばしばありました。幸い、まるっきり駄目で相手の奥さんを失望させるところまではいきませんでした。したが、なんだか義理でセックスしているような気持ちになることもありまして、自分でお膳立しておいて、たいして面白くない、というのは変に聞えるかもしれません、事実そうなんです。からどうしようもありません。

私には長年連れ添った妻が他の男にセックスされてどんな反応を示すかわかるほうが、ずっと興味があったのです。妻の反応を知るためにも他の男が

妻とセックスしている間も私は傍にいない必要がありました。それで、スワップはいつも同室にしました。私は相手の奥さんとセックスしながら妻の様子を伺い、妻がエクスタシーにひたるのを眺めて満足します。妻のエクスタシーが強ければ強いほど、私は興奮し、その力を借りて私の下で喘いでいる相手の奥さんを満足させることができるというわけです。

そんなことを何回か繰り返しているうちに私は妻を交換しあうスワップより私たち夫婦に他の男を加えた3人プレイのほうがいいと思うようになりました。そうすれば私はいつも妻の様子を眺めることができるし、その気になれば私ともう一人の男とで妻を同時に抱くことだってできます。

私たち夫婦はしばらくの間、3人プレイに熱中しました。交換誌を利用して合計六回も3人プレイをやったのです。ところが、3人プレイは成功すれば大いに楽しめるのですが失敗すると惨めでした。失敗の原因は大抵、相手の男が萎縮して役に立たなかったり、逆に興奮しすぎて早く終ってしまうこ

とでした。私が傍にいたので気が散るのかもしれませんが。

そこで、今度は相手の男に気づかれないように、しかも私が妻の乱れつづりを眺めるにはどうしたらいいか考えるようになったのです。

そんな折に雑誌に載っていたハイキングの記事が目にとまったのでした。私は、コレだ、と思いました。ハイキングにきた男を妻に誘惑させ、雑木林の中でセックスをさせる。それを私がこっそり覗けばいいのです。男は私が覗いてることを知らないから本気になって妻とセックスするに違いないと考えたのです。

妻は最初、この計画に反対でした。男の身元がわかってる3人プレイならまだしも、どこの誰れだかわからない男とセックスするのは怖い、というわけです。妻のいうことももっともなので一時は私もあきらめかけました。でも考えれば考えるほどこれ以上のうまい計画は思いつかないのです。私は妻が欲しがっていたドレスやハンドバッグを買ってやり、気嫌をとりながら懸命に口説きました。

そんな私に妻もとうとう根負けして、いろいろと条件をつけながらも計画を実行することに賛成してくれたのです。その条件というのは、妻の相手をする男は私が選ぶこと、ひどい乱暴をされそうになったらすぐ助けに来てくれることなどでした。夏の真っ盛り、私たちは計画を実行に移すべく、ハイカーらしい格恰をして奥多摩のハイキングコースへ出かけました……。

夏も終りに近い頃でしたが、奥多摩のハイキングコースは若い人や家族連れの姿も見えました。私たちとしてはハイカーたちで混みあうより人影もまばらなほうがいいのですが、人目に立たない場所はいくらでもあるのでなんとか計画を実行できると思っていました。

妻に他の男との野外セックスを実行させるといっても私がそばで覗いている、というのが条件です。そこで、人目に立たず、しかも近くに私が隠れていられる場所をまず探しました。うまい具合にハイキングコース添いの木

立の奥によさそうな場所を見つけ、充分に下見をしておきました。そして、麓近くまで戻り、今度は妻の相手となる若い男を探すことになったのです。その間、妻は妙にはしゃいだり、不意に何事か考えて黙りこんだりして落着かない様子でした。

それまでにスワップや3人プレイを数回経験しているとはいえ、身元もわからぬ若者と野外セックスをさせられるのだから妻が落着かないのもわかります。私は妻が実行を中止しようといひだしはしないかと心配でしたが、幸い、妻はやめようとはいいませんでした。室内でのプレイには飽きていた頃なので野外セックスそのものにはかなり興味を持っているようでした。ただ、相手がどこの誰れともわからない若者ということが心配らしく、あなた、ちゃんと見張っててよ、と何度もいうのです。必要以上に乱暴するようだったから私が助けにいく、ということになっていました。妻を木蔭へ休ませておき、私はハイキングコースを行ったり来たりしながら妻の相手として適当な若者を物色し始めたのですが、これがなか

なか難しく1時間近くも時間を費してしまいました。

とても無理かな、となかばあきらめかけた時、麓から登ってくる若者の姿が目に入り、私は直感的にコレだと思いました。大学生らしいその若者はやや長髪の頭に登山帽を被り、身なりも普通のハイカーと違って重そうな登山靴をはいており、山歩きに慣れている感じでした。

私は道傍へ腰をおろし、休むふりをしてしながら若者が通り過ぎるのを待ちました。そして、軽い足どりで歩き去る若者をよく観察し、妻の相手として適当だという確信を持ったのです。というのは、その若者がハイキングにやってきた目的はガールハントらしいのがその様子からわかったからです。若い女性のグループをキョロキョロ眺めたり、一人歩きの女性に声をかけようとしている様子がありありとわかるのです。女に飢えていて少々乱暴なことでもやれそうな若者、そういう男が私たちの目的にピッタリなのはいうまでもありません。

私は大気ぎで木蔭へ休ませていた妻

のところへ戻り、若者のあとを追うように言いました。妻はパッと顔を赤くしてちよつと拒む様子を見せましたが、私が、早く早くとせきたてると、じゃ、ちゃんと見張ってよ、と言が残して若者のあとを追いました。そのあとを私が少し距離をおいてついて行きました。

心配だったのは果してその若者が妻の誘惑にひっかかってくれるだろうか、ということでしたが、女に飢えているらしい様子からなんとかなるだろうという気もしました。妻は三十七歳ですが若づくりしている上、童顔なので見ようによっては三〇前には見えるのです。とにかく若者のことは妻に任せるほかはないと思い、私は二人のあとを見え隠れに追いかけていったのです。

若者に追いついた妻はしばらくの間、声をかけようかどうか迷っているようでした。グズグズしていると野外セックスを予定している場所を通り過ぎてしまう、と内心いらいらしたのですが、間もなく妻が若者に話しかけるのが見えたのでホッとしました。といっても、もうこれで安心、というわけではなく、

むしろ、それからのほうが緊張の連続でした。

私は何事か話し始めた妻と若者を尻目にハイキングコースからはづれて木立の中へ入り、道もない雑木林の中を走りだしました。二人の先回りをして予定の場所近くの藪の中へ身をひそめなくてはならないのです。あちこちにかすり傷はつくってしまいましたが、ともかく二人より先に予定の場所へ着くと、下見をしておいた藪の中へもぐりこみました。そこは、妻が若者と野外セックスをすることになっている草むらから四、五メートルしか離れていず、それでいて相手からは見えないという絶好の隠れ場所だったのです。

望遠鏡まで取りだして妻と若者がやってくるのをジリジリしながら待っていると、間もなくハイキングコースからはづれて草むらの中へ入ってくる二人の姿が見えました。妻はいかにも歩き疲れたといった様子で若者の片腕につかまって歩いていましたが不安そうに感じはありませんでした。それどころか藪の中に隠れている私に見せつけるかのように若者に体をくっつけて時

折楽しそうに笑い声をあげているのです。若者のほうは年上の女と人目のつかない草むらへ入って行くことが何を意味するかわかっているのでしょうか、やや緊張した感じで、キョロキョロと辺りを見回したりして落着かない様子でした。

若者を誘いこむ格好で目の前の草むらまでやってきた妻は、アア、疲れたわ、少しここで休みましょうよ、と坐りこみました。計画通りの行動とはいえ、妻の度胸のいい演技に感心しながらジッと様子を伺っていると、若者はすぐには坐らず、妻の傍へ立ったまま辺りの景色を眺め始めたのです。藪の中へ隠れているのが見つかったら大変だ、とばかりに私は首をすくめ、息を殺していました。

妻は私が隠れている藪のほうへチラッと視線を向けましたが、やはり見つけられるのを恐れたのか、若者の手首をつかんで、ねえ、坐りなさいよ、というのがはつきり聞えました。若者はテレ臭そうに顔をほころばせながら妻のすぐ隣りに坐ったのです。私のいる位置からだ二人は横向きで妻のほう

が手前でした。

室内での3人プレイの経験は何回かありましたが、野外で、しかも妻の相手に気づかれずに覗くというのは始めてだったので私もすっかり興奮してしまい、体が小刻みに震えるのをどうしようもありませんでした。ただ、物音をたてさえしなければ若者に気づかれる心配はない、と黙っていたので藪の中へしゃがみこんだままジッと二人の様子を伺っていたのです。

それから妻と持者が演じた行為は思ひ出すだけでも息が苦しくなり、こまかいところまで覚えてないのですが、できるだけ冷静に順序を追って書いてみたいと思います。

妻は若者と並んで坐ると、まるで恋人同志でもあるかのように肩を寄せ、ナップザックから取り出した缶ジュースをすすめました。二人は何かしゃべっていました、あいにく私が風上のせいかもしれないと聞きとれません。その時になって二人の傍へ小さなマイクを仕掛けてラジオで聞く方法もあったのに、と思いついたのですが後の祭りです。

何がおかしいのか妻は若者の肩へしなだれかかってキャアキャアと笑っていました。その時、若者が私が隠れている藪のほうへ視線を向けたので、妻が私のことを話してしまったのではないかとヒヤッとしました。でも、それはとりこし苦労で、妻は若者に気づかれないうちに私に向って片手を二、三度と振ってみせたのです。それは私と妻が事前に決めておいたもので、これから始める、という合図でした。

妻の合図で、すべて計画通りにすすんでいけると知った私は次に起こることを見逃すまいと懸命に目を凝らしました。合図があつてから間もなく、妻の片手が若者の太股へ伸びていくのが見え、私はカッと頭へ血がのほりましました。いよいよ始つたな、と思いながら見つめていると、若者がいきなり妻を草むらへ押し倒したのです。若者のしかかられた妻が形ばかりの抵抗をするのが見えました。

欲望をみなぎらせた若者は妻のブラウスのボタンをはづしていき、わざとブラジャーをしてない妻の乳房をむきだしにしてしまいました。妻の乳房は

若い時ほどの弾力はありませんが、そのかわり片手ではつかみきれないほど大きく、乳首も小指の先ほどもあります。

乳房をむきだしにされた妻は恥ずかしそうに両手でおおう格好をしました。が、もちろん、それも形ばかりなのはいうまでもありません。若者はむきだしにした妻の乳房をワシ掴みにして揉みたて、たまりかねたようにガバツと顔を伏せると乳首を口に入れてしまいました。

ウー、ウー、ウーと溜息のような呻き声を洩らし始めた妻はもう形ばかりの抵抗などはやめて、若者の頭を両手でかかえこんでいました。そして、不意に、アア、いいのよ、好きなようにして、と言う妻の声がはつきりと聞えたのです。おそらく、風向きが変つたか、風がやんだかして私にも聞えたのかもしれない。若者が上体を妻から離れた時に気づいたのですが、若者の片手は妻の秘部をストラックスの上から掴んでいたのです。

若者は辺りをサッと見回すと、妻のストラックスを脱がせにかかりました。

すると、なにを思ったのが、妻が若者に手伝うように自分からストラックスを下げ、片足を抜くと今度はパンティのほうも同じようにしました。そして、片方の膝の辺りへストラックスとパンティをまといつかせたまま、若者がズボンを下げるのを待ったのです。

ジーンズとブリーフを膝まで下げた若者はお尻を丸出しにして妻の足元へ回りこもうとしましたが、その前に妻が片手を伸ばして若者の隆起した肉塊を握りました。なにをするつもりだろう、と見ていると、妻はちよつとの間ですが、撫ぜまわしていました。

できたらフェラチオもやるように命じておいたのですが妻はそれをやらず手を離してしまいました。若者は妻に撫ぜ回されてますます興奮したらしく妻の足元へ膝をつくと片手で握りしめたまま押しつけました。しかし、あわてているのか、それとも女の構造をよく知らないのか、数回押しつけたにもかかわらず妻の中へは入っていかないようでした。そんな場合は、導いてやれ、と妻に言うておいたのですが、妻は忘れてしまったのか、若者任せにし

ていたのです。グズグズしているうちに興奮しすぎた若者が終ってしまうのではないかと心配でしたが、どうにかうまくいったらしく、やがて若者が腰を動かし始めました。

ところが、私の位置からでは二人は横向きで、私が一番見たいと思つていた結合部分がまったく見えません。それに二人がいる草むらは二〇センチばかりの雑草が生えていて、妻の体は半分ほども草むらに埋っているのです。

私はあせりました。若者に侵入されている妻の部分が見えないのでは野外で実行した意味がなくなってしまうます。あせった私は隠れている藪の中から抜けだしてよく見える位置へ移ろうかとさえ思いました。

そうこうしているうちに快感を告げる妻の呻き声が一段と激しくなり、若者の動きも早くなり始めました。それと共に仰向けに寝転がっていた妻が、両足を若者にかかえあげられたまま少しづつヒップを移動させ始めたのです。それこそ意心伝心とでもいうのでしゅうか、妻は若者と結びあつてる部分を私のほうへ向けようとしていたのです。

とうとう、若者が私に背を向ける格恰になりました。そこで、私は思いきつて藪の中から首だけだして二人を観察したのです。

斜め上から二人を見おろすことになった私の目に最初にとびこんできたのは重なりあつた妻と若者の丸出しのヒップでした。そして、あのショッキンダな二人の結合状態をあますところなく眺められたのです。その状態を眺められたのはおそらく2・3分だったでしょう。荒い息を吐き続けていた若者は唸るような低い呻き声をあげると、体を震わせて果ててしまいました。

その前に私はまた藪の中に首をひっこめて二人の様子を覗いていたのですが、若者は終つてしまふと急にバツの悪そうな様子でそわそわとズボンをずりあげ、まだ寝そべったままの妻のほうをチラチラと見ていました。やがて、妻はハウッ、と深い溜息をついてナツプザックからティッシュペーパーを取りだして後始末をしました。

そして、服装をととのえた二人はハイキングコースのほうへ向って歩いていったのです。ヘタヘタと坐りこんで

しまっていた私は二人が行ってしまったと、藪から出て草むらのところへ行ってみました。雑草の中に丸めたティッシュペーパーが2ツ捨ててあったのを今でも覚えています。

二人のあとを追ってハイキングコースへ戻ってみると、妻が一人で私を待っていました。若者は妻と一緒にハイキングを続けたかったようですが、妻が、もうすぐ夫が追いつく頃だ、というとびっくりして先へ行ってしまったそうです。私と妻は木蔭へ腰をおろしてお互いに感想を話しあいました。

案の条、妻は始めてといていいほどの興奮を味わったようでした。妻の話では、若者と仲よくなるのにそう苦労はしなかったということです。若者は最初のうち、妻とセックスをしようとは考えていなかったらしいのですが、妻が歩きながら風を入れるふりをしてブラウスのボタンを少しはずし、乳房を半分ほど見えるようにしておくと、目の色を変えてきたそうです。そんな若者を計画どおり草むらへ誘いこむのは難しいことではなかったでしょう。若者は見かけによらず憶病なところが

あり、暴力をふるうこともなかったの
で妻は安心していたようでした。

ただ、やはり私が覗いているせいでひどく興奮してしまい、私が命令しておいたいろいろなラーゲをとることはすっかり忘れてしまったということですね。四つん這いになったり、男の上へ乗ったりするように言っておいたのですが妻はそれどころじゃなかったようでした。

野外セックスをする妻を覗く、という私の奇妙とも思える欲望は運よく成功したこともあって、その後、いろいろと計画をたてましたが、いづれも実行するまでにはいたっておりません。妻も、いつもうまくいくとは思えない、と消極的で、やはり室内でのスワップや3人プレイのほうが安心して楽しめる、といています。でも、私が強引に頼めば妻は断わらないでしょう。ハイキングの季節になったらまた実行してみたいと思っています。



挿絵画家求む！

本誌の小説、読者投稿作品、文献資料などに応しい挿絵を求めています。リアルなもの、イメージふうなものなど、独創的な画風を歓迎します。

- (1) ペン、筆、鉛筆
- (2) ケント紙、画用紙、和紙。
- (3) サイズ

タテ描き——本誌——ページ大。

ヨコ描き——本誌1/2ページ大。

優秀な作品は本誌に掲載、次号より原稿を依頼するほか、他誌にも紹介、推選します。

○画料・一枚三千元

そのほか、カットも求めています。奮ってご応募ください。

へ宛先

現代芸術研究会・編集室

※郵送中に破損することがあるので包装にご注意ください。

投稿手記 妻の恥態

柏 硯 郎

私は三十八歳である団体の職員をしています。都会から離れたところに住んでいるせいか、生活ものんびりムードで、三年前にローンで建てた家の周囲にはまだ畑なども残っており、おおよそ刺激的なこととは無縁なところです。私自身、野心もなく、休日には好きな碁を打つのが唯一の楽しみでした。

その私にとって最も愛すべき者は、KK生氏と同様に十数年も連れ添った妻のY子です。私の家庭はどちらかといえどカカア天下のほうでしょう。といっても夫である私をないがしろにするようなことはなく、私のほうが普通の夫に比べて妻に優しすぎるのかもしれない。

妻のY子は三十三歳で、娘を二人生んでいます。容色はまだそれほど衰

えてはいないと思います。目立つほどの美人というわけではありませんが、もともと色白の肌をしており、最近少し太ったせいかなるでマシュマロのように柔らかで、全体がふっくらした感じでした。

だれに対しても愛想のいいY子は私の勤め先の同僚や友人、知人にもうけがよく、結婚当初からよく遊びに来たものでした。

二年ほど前になりますが、例によって碁仲間のKが遊びに来て、そのままわが家へ泊っていくことになりました。Kとは市内の碁会所で知りあい、私と年齢の差もあまりないところから、親しくつきあうようになっていたのです。

Kは会社員ですが、私同様に下手の横好きで碁となると夜の更けるのも忘れて熱中してしまいます。妻のY子はそんなことは気にもかけず、十一時を

過ぎるとさっさと寝てしまうのですが、その夜も碁に夢中になっている私とKを残して先に寝ようとしたようです。

私の家では二階を娘の部屋にして、一階を夫婦で使っています。といっても一階の部屋数は二部屋で、そのうちの奥のほうを一応寝室にしているのです。私とKが碁を打っていたのは手前の玄関に近い部屋でした。

Y子は私たち夫婦の夜具を敷くと、Kのためにもう一組の夜具を手前の部屋へ敷き始めました。ところが、浴衣の寝巻に着がえたY子が夜具を敷き始めると、Kがそちらのほうをチラチラと見るのです。なんだか盗み見をしているような感じなので、なにを見ているのだろうと、それとなくKの視線の先を追うと、それが妻のY子なのかわかったのです。

私はドキッとしました。妻子もある

Kが、まさか私の妻のY子に興味を持つていようとは思ひもかけなかったこととです。そこで、なおも知らぬ顔で観察してみることにしました。妻のY子はなにも気づかないように立ったり坐ったりしてKのための夜具を敷いています。それでわかったのですが、Y子の着ている寝巻の裾が割れてまっ白い太腿がチラチラと見えるのです。KはどうやらY子の太腿を盗み見している様子でした。

そんなKに、案外に女好きな男なのかも知れん、とは思いましたが、不思議と、嫌な奴だとは思えませんでした。私もKも酒は好きなほうですが、Kは酔っても妻のY子に面倒をかけることなく、悪ふざけをすることもありません。ですから、Y子もKをほめることはあっても悪くいうことはありませんでした。

それにKが我が家へ泊るのはその時が初めてではなく、Y子もすっかり気を許していたようです。そのKがY子の様子をチラチラと盗み見しているのですから私はなんだかひどく愉快になつてしまいました。そして、どちらか

といえはカタブツと思っていたKが氣持をそえられるぐらいだから三十三歳のY子もまだまんざらではないわい、と思つたのです。

そのことは私にとって一面では嬉しいことでもあったのです。器量よしとはいえないまでも、私は妻のY子を内心ではひどく自慢していました。東北生れのY子は色白で、いわゆるモチ肌をしており、肌理のこまかさは驚くばかりです。我が家へ遊びに来る友人たちも、奥さんの肌はきれいですね、と感心するくらいですから男心をそその肌をしているのは確かなのでしよう。それにY子はアレの具合がとてもよく、女盛りのせいか愛液も豊富です。その上、俗にいうよがり泣きをするのです。結婚以来、十五年、私も何度かトルコなどで浮気をしましたが、Y子以上の女は見つからず、そんなことが私を普通以上の愛妻家になっているのかも知れません。

そんなわけで、私としてはKが妻のY子に興味を持ってくれたことがなんとなく嬉しかったのです。その気持は内心自慢している骨董品を觀賞眼のあ

る者がほめてくれた時と同じ、といえましようか。

Kの夜具を敷いたY子は風呂へ入ると、まもなく先に寝てしまいました。そこで、私は碁を打つのをやめてKに酒をすすめたのです。二人でチビチビやっているうちに酔いがまわってきて、私は我慢できずにY子の自慢話を始めていました。その内容はほとんどワイ談に近いものでした。Y子の体の隅々まで、それこそ薄いヘアの様子からよがり泣きのことまで実際より多少オーバーなくらいこまかく話してきかせたのです。Kは最初ちよつと困惑したような顔をしていましたが、そのうち興味深そうに聞き耳をたてて、羨ましいなア、などといいながらY子が寝ている奥の部屋へチラチラと視線を送っていました。

その時の私の心理状態というのはちよつと普通ではなかったと思います。いくら親しい相手のKとはいえ、Y子の肉体の秘密を話したばかりか、更に途方もないことを考えついたのです。それは、自慢話だけでなく、実際にY子の秘密の部分をKに覗かせてやろう

と思ったのです。もちろん、そんなことは口に出さず、覗きたかったら覗きなさいということなのですが。

私はKにも寝るようにすすめて寝室へ入ると、Y子の隣りへ横になりました。枕元の灯りはわざとつけっぱなしにして、Kが寝ることになっている隣り部屋との境になるふすまも広く開けておきました。

Y子はすっかり寝入っていました。夏の終り頃のこととまだむし暑く、軽い夏掛けのふとんをおなかのあたりまでずりおとしていました。私はすぐにもそのふとんをはぎ、Y子の寝巻の裾を開いてしまいたい衝動にかられましたが、それではあまりにわざとらしくなると思い、三〇分ほどジッとしていました。その間にKが眠ってしまうのではないかと気が気でありませんでしたが、いびきが聞えないところをみると、なかなか寝つけなかったのかもしれません。

頃合いをみはからって、私はそろそろ掛けぶとんを下からずりあげ、Y子の下半身を晒けだしました。都合のいいことにY子は寝巻の裾を大きくはだ

け、太腿をやや開いて眠っていました。もし、Kが覗いているとすればY子のパンティまで見えているはずでした。そこまで見せたのだから肝心の部分もすっかり見せてやろうと思い、私は片手を伸ばしてY子のパンティをずりさげようと思いました。

ところが、その気配を感じたのか、Y子はウーウンと低く唸ってゴロンと向うむきになってしまったのです。私はあわてて手を引っこめました。それから、しばらくの間、どうしようかと迷いながらジッとしていたのです。

Kがそっと覗いてることを信じながらも確かかどうかはわかりません。もし覗いているとすればY子の尻をすっかり見ているはずでした。白いパンティに包まれているとはいえ、大きくて丸い尻を眺める気持はどんなものだろう、と私はKの興奮を想像してみました。

Kは興奮のあまり自分のものを握りしめているに違いない。そう思うと、私は更に強烈な光景を眺めさせてやらずにはいられませんでした。そうかといつて起き上ってY子のパンティを脱

がすというのはどうも気がひけてできません。どうしようかと迷っているうちにY子がまた寝返りをうって仰向けになりました。手でさぐってみると、寝巻の裾はすっかりはだけておへそまで丸出しになっています。

なんとかしてY子のパンティをずり下げてしまいたいのですが、目を覚すかもしれないのでうかつなことはできません。考えあぐねた末、股間の部分だけ片側へ寄せてしまうことを思いつきました。幸い、はき古したパンティのゴムはひどくゆるんでおり、指をひっかけて片側へ引き寄せるのはそれほど困難ではなかったのです。それでもY子が気づかないように細心の注意を払って少しずつ引き寄せました。そして、とうとうY子の秘密の部分露わにすることができたのです。その時の息の詰まりそうな興奮をわかってもらえるでしょうか。

ただ、指をひっかけて引っばっていただければならないのがやっかいです。それでも五分ぐらいはそうやってKの目を楽しませてやったのです。Kが覗いていたのは確かでした。というのは、

私がY子に掛けぶとんをかけてやり、いびきをかいて眠たふりをしていると、しばらくしてからフーッとKが深い溜息をつくのが聞えたからです。

そのことがあってからしばらくの間、Kと会うのがひどくテレ臭かったのですが、考えてみれば、私が妙な態度をとればかえってまづくなるのに気づき、知らん顔をすることにしました。

Kの態度もほとんど変わらず、私は私で、Kが泊っていけば出来るだけY子の秘部を眺めさせてやったのです。そうこうしているうちに夏も過ぎ、めつきり涼しくなるとY子も夜具をきちんとかけて寝るようになり、Kに眺めさせるのも難しくなっていました。そのせいか、Kも泊っていくこともなくなり、町の暮会所でたまに会うぐらいになってしまいました。Kにしてみればやはりうしろめたかったのかもしれない。

その頃になると、私はY子の寝姿をKだけでなく、もっとほかの男にも見せてやりたくなっていました。そして、おとなしいKではちよっとものたりなかったので、もっと好色で年令も五〇

過ぎぐらいがいいと思ったのです。私は暮会所へ足しげく通い、適当な男を探しました。そうやって見つけたのがT老人なのです。

T老人はM駅の駅前で戦前から乾物商を営んでいたそうですが息子さんの代になって現在はスーパーマーケットになっていきます。血をわけた親子なのに息子さんとは仲が悪く、Tさんはさっさと隠居してしまったということでした。

息子さんは三十いくつだそうで、なにかにつけ近代的な経営でやりたいらしく、昔気質のT老人とは意見が合わないようでした。といっても、私のみるところではT老人のほうががんこすぎるようなのですが。

それはともかく、まだ六十そこそこで隠居してしまつたT老人は暇をもてあまして碁を始めたということでした。私がT老人と知りあつたのも暮会所です。T老人はでっぷりと太っており、頭はツルツル、ちよっとタコ入道みたいな感じの老人です。

T老人がなかなかの女好きだということがわかり、私は内心、妻の寝乱れ

姿を覗かせるのにはうってつけの人物だと思いました。Kに覗かせてすっきり味をしめた私はなんとかT老人をわが家へ招待してやろうと考え、碁の相手をしたりして親しくなつたのです。同じ趣味を持っていると意外に早く打ちとけやすく、碁をダシにT老人を自宅へ連れてくるのはそう面倒はいりませんでした。酒好きのT老人は陽気なタチで、妻のY子も面白がってしばらく姿が見えないと、どうしてるのかしら、などと気にするようになったのです。

T老人の話題というのはいつも女の話で、かなりえげつない体験談が多く、わが家の客としては柄の悪いほうなのですが、Y子は別に嫌がりもしませんでしたが、Y子は別に嫌がりもしませんでしたが、T老人が女の名器について話したときなどは顔を赤くしながら聞き耳をたてていたのです。身振り手振りを交えてのT老人の話は男の私でさえ顔が赤くなるようなことばかりなのですが話し方がエーモラスなせいかY子も思わず吹き出してしまふことが多かったのです。

T老人の話で私が興味を持ったのは、

三〇代から四〇代の人妻はチャンスさえあれば浮気したがってる、というもので、そういう人妻のラビアはいつも濡れて膨んでいる、というのです。また、唇とラビアは同じで、ラビアが濡れてるときは唇もしっとり濡れているというのでした。

そんな話をしながらY子の顔を覗きこむので、Y子はあわてて手で口を隠したりしていました。女の体や構造についてのT老人の博識ぶりは驚くばかりで、ある時などは恥毛についての講義をながながと始め、一本の恥毛を見ればその女の性格や床ぶりなんかもたちどころに判ってしまうと言うのです。

毛相学というのだそうで、面白がって聞いていたY子に、奥さんのも覗てあげるから一本抜いてくれませんか、と言いだしました。Y子は、いやですよ、そんな恥ずかしいこと、と逃げだしてしまったのですが、T老人が帰ったあとで、そんなことがほんとに判るのかしら、となみなみならぬ興味を示したりしたのです。

妻のY子がT老人への警戒心をすっかり解いた頃を見はからって、私はい

よいよ例の“覗かせる計画”を実行することになりました。ただ、秋ももう終りに近い頃だったのでKのときのようにY子が眠っている掛布団をめくるとはとても無理に思えました。そんなことをすればY子はたちまち目を覚ましてしまうに違いありません。

そこで考えた末にY子にも酒を飲ませて酔わせてしまい、ちっとやそっとでは目を覚まさないようにしてやろうと思ったのです。更に薬局で手に入れた睡眠薬を酒に少し混ぜて飲ますことにしたので。Y子が目を覚ますのをそれほどまでに怖れた理由は、Kのときと違ってT老人にはもっとすごいところまで覗かせてやろうと思ったからです。

その日、夕方近くになってわが家を訪れたT老人は私と碁をかこみながらいつものようにワイ談に花を咲かせ、私のすすめで夕食を一緒にすますことになりました。もちろん、それは私の計画で、夕食には酒を出してY子にも飲ませるつもりだったので。T老人は酒が強いほうなので飲み過ぎて酔いつぶれるという心配はありません。

問題は妻のY子のほうで盃で二、三

杯も飲むともう酔いがまわってしまうのです。たったそれだけの酒に睡眠薬も混ぜなくてはならないのですから大変です。考えた挙句、睡眠薬は細かくつぶしてコップへ入れ、水で溶かしておくことにしました。Y子が酔ったらその水を酔いざましになるからと飲ましてしまうつもりでした。

T老人は私に泊っていつてくれ、といわれてすっかり腰を据えて飲み始めました。酒の入ったT老人は普段にも増して露骨なワイ談を私やY子に聞かせて面白がっていたのです。案の条、Y子は私が無理に飲ませた酒でたちまち酔ってしまいました。そこで、戸棚の奥へ隠しておいた睡眠薬入りの水を持ってきて飲ませたのです。ただ、そのときコップの底に溶けきらない睡眠薬が白く残っており、Y子が妙な顔をしたので、あわてて悪酔いどめの薬だ、というと別に深く考えもせず、グツと飲んでしまいました。

睡眠薬はほんの少し入れただけなので果して効きめがあるかどうか心配でしたが、うまい具合にY子は間もなく眠そうに目をしばたたかせ、あくび

を噛みころし始めました。そこで、私はY子のかわりに奥の部屋へ夜具を敷いてやり、早く着替えて寝るように命じたのです。そのついでにT老人も寝かせてしまおうと考え、まだ料理だの銚子だのが乗っているテーブルを隅に寄せてT老人のための夜具も敷いてしまったのです。T老人はまだ飲みたそうにしていますが、テーブルのわきへ夜具を敷かれてはあきらめるほかはなく、では、わしも寝かせてもらおうか、と私が借した浴衣に着替えだしました。

わが家は2階は娘の部屋しかありませんが階下は二部屋続きで、奥の部屋へは私たち夫婦が寝て、玄関に近いほうの部屋へはT老人を寝かせました。それはKのときとまったく同じでした。部屋と部屋との間には敷居があります。その襖はわざと二〇センチほど開けてあります。やはりKのときと同じようにT老人は丁度私たち夫婦の足元へ頭を向けて寝ることになります。T老人がもし腹這いになれば襖の開いてるところから私たち夫婦の様子をすっきり覗くことができます。

私がパジャマに着替えた頃にはY子はもうぐっすりと眠りこんでいました。私はT老人の部屋の電気を消し、私たち夫婦が寝る部屋のほうは蛍光灯を一つだけ消して少しだけ暗くしておきました。Kのときは枕元のスタンドだけつけておいたのですが、それでは暗すぎて見えないのではないかと思ったのです。

私はY子と一緒に布団へ入り、しばらくジツとしていました。T老人が眠ってしまいやしないかと心配でしたが、軒が聞えてこないので眠ったようには思えませんでした。老人だから眠ったから軒をかくだろうと思ったのです。でも酒が入っているので寝つきもよくないのではないかとも考え、私は十五分と待てずに行動を開始しました。

まづ、わざと体を動かす音をたててT老人の注意をひいておき、おもむろにY子の体をまさぐり始めました。Y子は寝るときはいつも洗いざらしの浴衣を着るので裾をひろげて太腿をむきだしにするのは簡単でした。途中で目を覚すのではないかと思いましたが、睡眠薬が効いたのかY子はされるがま

まになっていました。

Y子が目を覚す気づかいはないとわかると、私は大胆になり、かなり乱暴にパンティをむしりとってしまったのです。KのときはY子のパンティをわきにずらせて覗かせてやったのですが、T老人には丸出しにして見せてやろうと思いました。

Y子のパンティを脱がせてしまうと、太腿を大きく開かせてさっそく下腹部へ手を這わせました。やや濃いめのヘアをまさぐり、それからすぐに秘密の部分へ指を滑りこませたのです。驚いたことにその部分の柔らかい肉片はすっかり濡れてトロツとしたものであふれさせていました。きつとT老人のワイ談を聞かされてるうちに知らず知らずあふらせていたのでしよう。いつもは寝る前に風呂へ入る習慣のY子でしたが、その夜は酔ったせいもあってそのまま寝てしまったのがかえって好都合でした。

その様子をT老人に見せてやろうと足で掛布団を蹴り上げ、私とY子の下半身がむきだしになるようにしたのです。

少し暗いとはいえ、T老人が覗いて
いるとすればY子の秘密の部分は足元
のほうから丸見えになっているはずで
す。

そ知らぬふりをして聞き耳をたてて
いると、T老人が夜具の中で動く気配
が感じられました。T老人が覗いてい
る、と確信した私はY子を2本の指で
開き、奥のほうまで覗かせてやりまし
た。そればかりか指を上下にこすって
粘液がたてるかすかな音も聞かせてや
ったのです。

Y子はまるで生きた人形のようにし
た。私が敏感な小突起をいじったり、
指を深くくぐらせたりすると、ウウー
ン、ウウーッと呻き声こそたてますが
目を覚す気配はなく、下半身が露出し
ているのに寒さも感じてないようだし
た。そして、気持が良いのかときどき
尻をピクピクと震わせて私の指へ小突
起をこすりつけてくるのです。

私は完全に興奮してしまいました。
妻の恥部を他人に覗かせるという異常
な行為がこれほど興奮するとは！ K
のときもかなり興奮しましたが、T老
人の場合とは問題になりません。Y子

の恥部はすっかり露出され、しかも私
の指で弄ばれているのです。その様子
を隣りの部屋から息を殺して覗いてい
るであろうT老人の気持を思うと、私
の興奮は増すばかりでした。

私は我慢できずに起き上り、Y子の
片足をかかえ上げると、いびつな形に
開いた秘密の部分をおも指で弄びま
した。すると、Y子はウウン、ウウン
と呻きながら上半身をくねらせたり、
太腿をブルブルとケイレンさせたりし
ていましたが、突然、ギューンと全身を
ひきつらせるとアクメに達してしま
いました。その間、Y子は目を覚しそ
うになり、何度もドキッとさせられま
したが、想像以上に睡眠薬が効いてい
らしく、幸い目を覚すところまでいき
ませんでした。興奮した私は思いき
つてセックスもT老人に覗かせてやろ
うとは思いましたが、さすがにそこまで
の勇氣はなく、眠りこんだままのY子
にパンティをはかせ、浴衣の乱れもな
おして掛布団をかけてやりました。そ
れから部屋の明りを消して寝てしま
ったのです。しばらく起きていてT老人
の様子を見ようと思ったのですが、い

つのまにかぐっすり眠りこんでしま
いました。

翌日は日曜日で、T老人は昼近くま
で遊んでいったのですが、前夜のこ
とはなにひとつ触れず、ひよっとしたら
眠っていたのではないかと思ったほど
でした。それから半月ほどたってT老
人が私の留守にこっそり訪ねてきて妻
のY子と妙なことになったのです。

考えてみればT老人が妻のY子に対
して妙な気持を起さないほうが不思議
でした。妻の秘部を覗かせておいて、
それ以上は手を出さな、というほうが
無理というものかもしれませぬ。

それにしても私の留守に妻を訪ねて
くるなんてT老人もなかなかやるもの
だ、と感心してしまいました。もとは
と言えば私の奇妙な趣味が原因なので
すからT老人を怒るわけにもいきませ
ぬ。

以下はあとで妻から聞いたことをま
とめたものですが、妻にしてみれば突
然の出来事だったのですべて記憶して
いるというわけではないようです。

その日、T老人は午後2時頃ブラリ
とやってきて、近くの知り合いを訪ね

たついでに寄ってみた、ということでした。妻のY子は私が留守だからといってお客に無愛想になるような女ではありません。まして、T老人は私の基仲間であり、わが家にも泊ったことのあるお客です。当然、お茶でもあがっていつて下さい、ということになりました。

これがもし、自分の秘部を覗かせた相手とわかっていれば、いくら愛想のいい妻でもT老人を家へあげたりはしなかったでしょう。睡眠薬まで飲まされて前後不覚に熟睡した妻は私にパンティをはぎとられ、秘部を指で弄ぶところまでT老人に覗かれているのですが、もちろん、妻はそんなことを知る由もありません。

お茶を飲みながらT老人は例によってきわどいワイ談を始めたようですが、丁度、洗濯を終えて手すきになっていた妻は面白がって聞いていたようです。T老人のワイ談には性器の俗称などが無遠慮にとびだしてくるのですが、妻は何度も聞いているので割合に平気です。それにT老人とつきあうようになってから私もわざと使うようにしてい

るので妻もそれほどいやがらないようになっていました。

T老人のワイ談の内容がどんなものであったか、妻は恥ずかしがって話しませんでしたが、相当きわどいものであったようです。妻の秘部をすでに覗いているT老人のことですから、話しながら自分も興奮していたに違いありません。

T老人は自分で作ったという梅酒をビンに入れておみやげがわりに持ってきていました。もともと商売が乾物屋だったのですから梅酒づくりも本物です。

少し味見をしてごらんさい、と言われて妻はコップでほんの少し飲んでみたということです。よく聞いてみると、ほんとにはコップの半分ぐらいは飲んでいました。

梅酒は口あたりがいいのでつい飲みすぎた、といているのですが、口達者なT老人にうまくすすめられて飲んでしまったに違いありません。もともとアルコールに強いほうではない妻はたちまち酔ってしまったそうです。すると、T老人は台所から水をつい

できて飲ませ、少し横になったほうが楽になる、と妻を背後から抱き起して奥の部屋へ連れていきました。

実をいうと、それから先のことは妻はなかなか話そうとしなかったのですが、私が、たとえT老人と間違いを起したとしても決して怒らないから話してみろ、といてようやく話をさせたのです。

以下は妻が話したまま書きます。

奥の部屋で座布団を枕に寝かされた妻はT老人がスカートをまくって太腿の奥を覗き見しているのを感じた。でも、目がグルグル回るほど酔ってしまった妻は手足を動かすのも億劫だったし、たとえ動かしてもまるで自分の手足のようでなかった。なにか言おうとしても舌がもつれてロレッツが回らない。

そうこうしているうちにT老人はタコ入道みたいにツルツルに禿げた頭を妻の股倉へ押しつけてパンティの上からクンクンと秘部の匂いを嗅ぎ始めた。薄い布地のパンティなのでT老人の鼻息がフーッ、フーッとあたり、ハアハアと熱い息も感じられた。

あまりの恥ずかしさにだるくて仕方

のない両手をどうにか振り回してT老人の頭をボカボカ叩いたが、いっこうに顔を離そうにできなかった。そのうちパンティの脇からはみだしていたらしいヘアをキュッキュツと引っぱりだしたので妻は痛くてならなかった。それほどばかりか、今度はパンティの股の部分をずらしてむきだしにさせると、指でいたずらを始めた。

妻のパンティは着古したものが多いので股の部分のゴムがゆるくなっており、ちよつと脇へ引っぱるだけで秘部が露出してしまふのだ。私などはわざわざパンティを脱がさずとも交わることでできるので便利だが、無防備に近いことは確かだ。

もっとも、T老人に指でいたずらされるまでもろくに抵抗もしなかった妻なのだからもともと警戒する気もなかったようだ。

女泣かせの名人だ、といつも自慢していたT老人だけに指戯のほうも巧みで、妻はいたずらされているうちに気分をだしてしまった。どんなテクニクを使ったのかわからないが、指でタッチされているうちに数回もアクメに

達したというのだから驚く。

そうなのはもう拒むどころではない。T老人が玄関の鍵を閉める間、パンティのずりさがった下半身を丸出しにして寝転がっていたというのだから妻のY子もソノ気になっていたことは間違いない。事実、妻はT老人の指戯で続けざまに気をいかされ、だれでもいいからトドメを刺してもらいたい気持ちになっていたらしい。

それでも顔を見られるのはやはり恥ずかしかったらしく両手で顔をおおっている、T老人は足元へうずくまって妻のパンティを脱がせにかかった。すでに半分ほどずりさがっているのだから手間ひまはかからない。妻のほうもT老人に言われるままお尻を持ちあげて脱がせやすくしたというのであるからとても強姦などとは呼べない。

妻の下半身をすっかりむきだしにしたT老人は、次にブラウスのボタンをはずしてブラジャーをずりあげ、両方の乳房を引っぱりだした。妻の乳房は普通よりやや大きめなので片手では掴みきれない。若い娘のような弾力はないが、柔らかくて掴み心地の良い

乳房だ。茶色の乳首は1センチほども突出していて興奮するとコリコリと固くなる。

T老人は引っぱりだした妻の乳房をそれぞれ両手で掴み、かわるがわる口に含んで乳首をチュウチュウと吸った。吸いながら舌の先で乳首を舐めるので、ただ吸われるよりずっと気持がよかったらしい。乳首が痛いくらい固くなっているのがわかったという。

妻の話を聞きながら、私にはそれが現実に起きたこととはとても思えないのです。というのも、妻のY子は確かに愛嬌のある、男に好かれるタイプの女ですが、特別に好色というわけでもなく、まして、六〇過ぎのT老人に心を奪われるなどということは考えられないのです。それなのに酔っていたとはいえ、秘部を指でいじられたくらいで男を欲しがるほど興奮するなんて普段のY子からは想像もできません。それとも、貞淑そうに見えても女の体は好色にできているのだろうか。

いずれにしろ、妻はT老人の指戯ですっかりのぼせあがってしまい、パンティを脱がされた両足を大きく開かさ

れてしまった。そして、T老人は深い溜息をつきながら妻の秘部を眺めた。老眼鏡をダンゴっ鼻へずりさげてジロジロと覗きこむT老人の姿が目には浮ぶようだ。T老人は妻の構造をいちいち摘まみながら批評したらしいのだが、例によって卑猥な俗語を使ったので妻は恥ずかしくてならなかった。

それでも、子供を二人生んでいるわりには色や形も良いといわれて、内心嬉しかったというのだから女の心理はますますわからなくなる。女にとって体のどの部分であれ、誉められるというのは嬉しいことなのだろうか。

T老人は口を押しつけて舐めまわした、という。予想はしていたことだが、他の男が妻を吸陰したというのはやはりショックだ。T老人のタコ入道のような頭が妻の股間へ埋まっている光景を想像すると息が苦しくなるほど興奮する。敏感な妻は異様な刺激に夥しい反応を吐露したに違いない。T老人はそれをすべて飲み込んでしまったのだろうか。妻はどんな気持ちでいたのだろうか……。

妻は私以外の男を始めて受け入れる

ことを覚悟したに違いない。T老人が顔を離してズボンを脱ぐ音を聞きながら日頃自慢していた女泣かせの一物が進入してくるのを想像していた。ところが、いざT老人が押しつけてきた物の感触に妻は、オヤッ、と思った。まるで力が無いし、固さも感じられなかったという。

それを聞いた途端、私は思わず吹きだしてしまった。日頃の広言に似ず、いざという時に男としての能力を凝われてしまうようなT老人の不甲斐なさを軽蔑して、というのではない。そんなことは男としてありがちであり、それだけでT老人の性力ワンヌンできる筋のものでもない。

私がおかしかったのはまっ昼間、戸閉まりをした家の中で不良老人と不貞の妻とが、今まさにセックスをしようとして突然、男が不能状態とわかった時のなんとも間の抜けた光景が目には浮んだからです。

T老人があせればあせるほど肝心の物は萎縮する一方であった。あせったT老人は妻に協力させようと手に握らせて、さすってほしい、という。そう

いうテクニックは日頃教えてなかったので、妻はどうしていいかわからず、グニャグニャした肉塊をいきなりギュッと握りしめてT老人を呻かせてしまった。

妻は顔をそむけたままT老人の力のない肉塊を握っていたがいつこうにたくましくなってくれないので、だんだんしらけてきた。だれかれ構わず入れて欲しい、と思った気持ちもさめてくる。と、急に恥ずかしさがこみあげてきた。それに娘がそろそろ学校から帰ってくる時間でもある。

T老人は何度も押しつけてなんとか挿入しようとしたがやっぱり駄目なようであった。それでも、あきらめきれずに今度は妻の口で吸って欲しい、といった。

そんなことは絶対に嫌だ、と妻は拒んだらしい。私が考えてもそれは無理な要求だったに違いない。妻はもともとセックスに積極的なほうでなく、私にいわれたたまにはフェラチオをすることもあるが、それもいやいやである。まして、相手が六〇過ぎのT老人ではとてもそんな気になれなかったろう。

そんなわけで、妻の興奮もすっかりさめてしまい、未練がましく舌で舐めまわしてこようとするT老人を振りきって脱がされたパンティをはきなおし、そのまま玄関の鍵を開けて逃げだしてしまった。結局、T老人は妻を抱きそこなってしまったのである。近くの垣根の蔭へ隠れて様子を見てみると、T老人はいつもの元気はどこへやら、なんだか、しょんぼりした様子で帰っていったそうです。

私は妻に、T老人ともう一度やってみる気はないか、と訊いてみた。男の面目が丸つぶれとなったT老人がなんだか可哀想になったからです。それに、私はT老人が好きだったので妻がウンといえど何度でもセックスさせてやり、できれば妻の性感帯をもっと開発してもらって好色な女に教育してもらいたかったのです。T老人のクニニリングスは気が遠くなるほど上手だったと妻もいっているのです。

でも、妻はもう絶対に嫌だと拒むばかりで、とりつくしまありません。梅酒に酔ってついあんなことになって

しまったけど、しらふだったら指一本ふれさせない、というのです。

私の考えでは、妻はT老人を嫌っているのではなく、たまたまあの時にうまくいかなかったので顔を合わすのが恥ずかしいのではないかと思うのです。その後、T老人はわが家へは現われなくなりしました。碁会所のほうへもあり姿を見せていないようです。私としてはT老人が早く顔を見せてくれることを期待していたのですが、T老人のほうは私を避けたかったのかもしれない。

私はまた碁仲間を一人失いました。私はもう妻の秘部を覗かせたり、セックスさせようとしたりするのはやめようかと思っているのですが、奇譚クラブを読むとまた妙な気を起しそうでありません。



新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

株きたん社内

現代芸術研究会

奇ク「友の家」紹介

本誌愛読者のご好意により奇ク「友の家」が誕生しました。場所は、国電・総武線「本八幡」駅よ

り、クルマで一〇分。高塚交差点近くです。

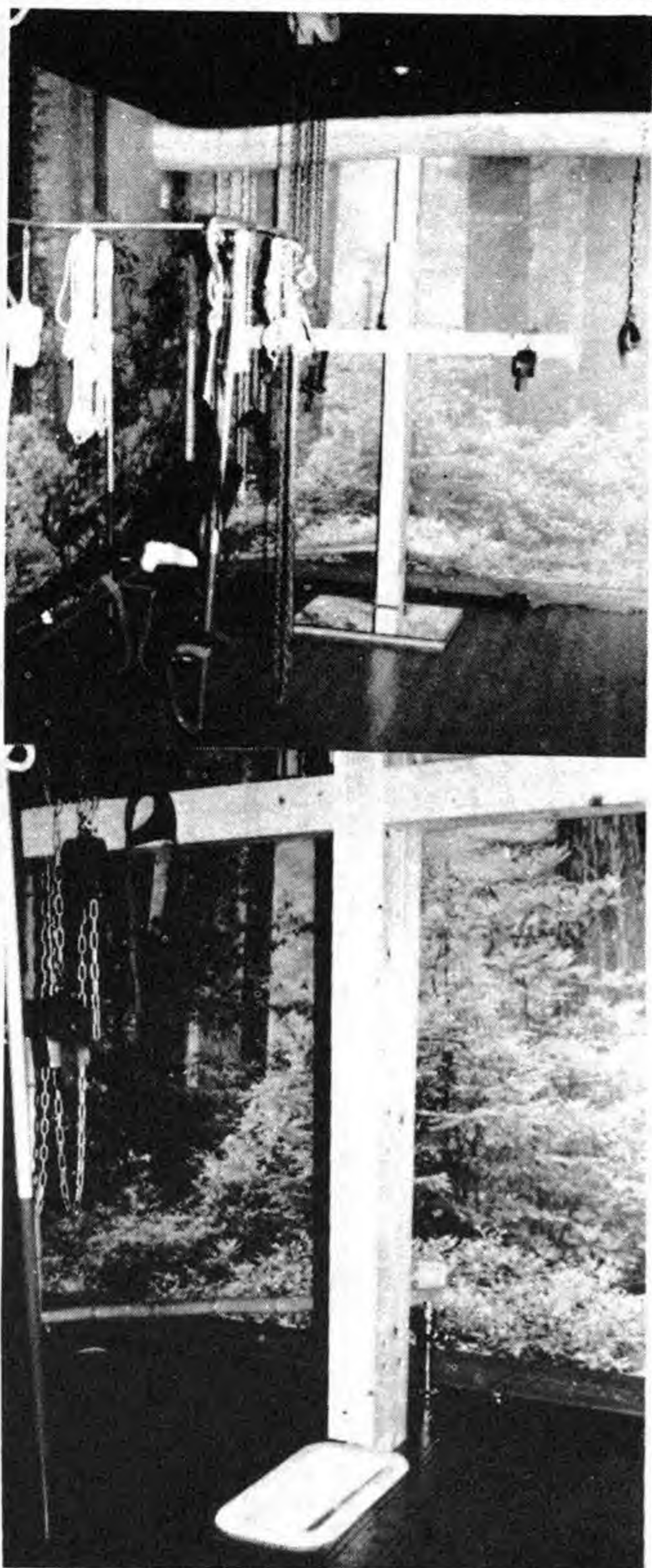
提供者のT氏が、ご自分の専用

プレイ室として作られたもので、プレイに必要なものはすべて揃っており、完全防音の一軒家なので、存分にプレイが楽しめます。

費用は、使用料として五千円、宿泊は五千円増となります。

使用希望者は、編集部までお問い合わせください。

※一般客は使用できません。



◆文献資料◆

妻に群がる男たち

お庄は生れつきの姪婦かも知れぬ：と落合亨介は時々そう思ふのである。

何にしろ彼女は今年もう三十だと云うのに、顔や皮膚の色艶などもいつまでも処女のようなだし、身体だって、胸や下腹のあたりのむっちりとしたふくらみとか、弾力のある内腿のあたりなんか、いよ々肉付を増して、性慾的な脂肪が、その美しい皮膚の下でみなぎりおどっているのである。

実のところ亨介は永いあいだ、お庄の節操のない無軌道な行状を、いやと云う程見せつけられてきた。そして普通の人間なれば殺してもやりたい程、念怨の炎を燃やすに違いないそんな妻の不貞を、自身の変質的な性行のために許してきたのである。

亨介はお庄を知るまでには、かなり

浮気ものだったと自覚していた。それにお庄を知るようになってからは、どういうものか、他の女にはまるで去勢したように欲情が起らなくなってしまう。彼女に対するひたむきな性慾だけが、奔馬のように狂うのを自分ながらどうにもならぬのだが、そんな亨介の弱点を知っているお庄は、亨介にそんな乱行を知られた場合、わざと挑発的な姪らな姿をして見せる。亨介はその魅惑的な肉体の前に、いつも樂を脱ぐのであった。

お庄の生れは亨介もまたはっきりとは知らない。新潟だとも云うし、秋田だとも云っているが、生れ故郷の垢なんか少しも身につけていない彼女は、遠うの昔にそんなものは忘れてしまったように、其日々を浮々と暮している。

亨介が始めてお庄に逢ったのは、もう十年近くも前のことだが、その時彼女はセルでも汗ばむ程の季節だったのに、お召らしい黄と黒の荒い縞の拾に、黒襦子と麻形羽二重の腹合せになった帯を締めていた姿が、すっかり亨介の心を据えてしまったもので、彼は今でもお庄のその時の様子が、いつでも瞼に浮ぶのであるが、お庄はそう云う江戸時代の女みたような変った姿で、何かを求めるようにして、京都駅前広場に立っていたのである。

亨介は何回も振返って見たが、いつまでも女はそこを動こうともしないで、とう々後戻りして言葉をかけたのだった。

お庄はその時男の言葉を疑う程の余裕もなかったのか、亨介の云うがま、に大阪までついて来たのである。

この頃、亨介は、桃谷の路次の興で家を借りて自炊生活をしていたので、戻ると二人前の夕食のつくるのに、彼女は水を汲んだり、火をおこしたりして亨介を感激させたものである。

夜は布団が二枚きりしかなかったのだ、二人は枕を並べて寝たのだったが、お庄はずっと亨介から離れて、甲訳だけの布団の端を被っていた。

「寒いやろう、もっとこっちえ寄ったらどう」

「いゝえ結構です」

と、ちよっと眼を開けてすぐまた眼をふさいだ。睫毛の長い彼女の顔は起きている時よりも魅力があった。亨介は眠るどころではなかった。そっと薄目をあけてうかざうと、彼女は起きているのか眠っているのか、身動きもしないので、心の駒の狂った亨介は、いららとして一人で興奮していたが、とうとう寝呆けた振で、そっとお庄の掌の上に手を重ねにゆくと、別にのけようつもしなかったので、思い切ってその手を握ると、柔かい彼女の指に力が入った。そうなるとうちも遠慮しなかった。カッとなっていきなり の下に

片手を入れに行くと、彼女も横向きになって寄添ってくるので、そのまゝ、引寄せた。

女の芳香が亨介をいやが上にも興奮させた。口が潤びてものが云えなかった。彼は物をも云わずに眼をふさいで、女の胸をひらけたが、それでも彼女は抵抗しなかったのはいよいよ図にのつた亨介は、乳房をいぢりながら、片方の脚を内肢に割り込んで腿を××につけ、花びらのような唇に口を押つける、とお庄はじんわりと舌を吸わせるのだった。

やゝ暫くそうしているうちに、女もだんだん、亢奮してきたらしく、臀をもだえつゝ、片手を男の肩に打かけ、引寄せるようにして、スンスンと鼻息さえ荒くなってきたので、もう大丈夫と思った亨介は片手を内肢に入れると彼女も充分ぎざしているとみえて、ぬらぬらと臀の辺りまで××が流れていた。

亨介はもう遠りもなく、指を二本重ねて、ぬるぬるに濡れ渡った××から××のほとりに指先をくねらせて、やんわりとくじり廻すと、彼女はいよいよ

鼻息を荒くすゝりあげて腰を押つけ押つけすがりついてくるので、「えゝのん、えゝのん」と亨介も女以上に昂奮して、一生懸命に指先に力を込めると、女は夢中に取乱して、

「あ……ッ、えゝわえゝわ、フンフン」と腰をつかう情慾の激しさに、亨介も今は甚りかね、女を仰向けにして、松の木のように勃起した××を××に押つけ、口元をせわしなく五六度擦っておいて、グッと力を込めて根元まで押×れようとしたが、どうしたのか××の入口が狭くて、激しく腰をつかうと、ぬるりと抜けて、どうしても×らぬので、起直って彼女の片脚を上げ、肢を充分ひらかせ、グッと押×れ一氣に突込む途端に、

「痛いッ」

と叫んで男の胸をついて、臀を引いたので、亨介の××は空しく空をついた。「どうしたの」

「痛いわ……もういや……いや」と、お庄は急に長襦袢の前を直すと、くるりと後ろを見せて、枕を引きよせるのだった。

亨介は女の態度の急変に呆氣にとら

れたが、それからとはどんなにしても、彼女はまるで貝の口を閉じたように受けつけぬ。

亨介は満ち足らなかった。一たん極度に亢進した性慾のやり場に困った。しかしその頃の亨介は、その上いどんで行く程の心臓はもっていなかったのである。

二

翌る晩こそはと張切っていた亨介の期待はまた裏切られた。

無理に×れようとする、

「痛い、やめてやめて」

と叫んで、手がつけられず、折角勃起させた××に、再び脾肉の嘆きを見せたゞけだった。

亨介はそれまでに二度程、初交の女に接したことはあったが、こんな馬鹿なことはなかった。一体どうしたと云うのだろう。女は生理的に不能なのか、故意にさせないのか、どちらにしても亨介の興味は歴然となる筈だったが、もうその頃から性慾の塊りのように、身体のある部分から、色気を発散させていた彼女の肉体の魅力で、凡腦

の犬のようになっていた亨介の欲情は最早少々の水をかけたぐらいでは消えそうもなかった。

それから亨介は、お庄に対して正常な性交を求めることを諦めて、変態的な性慾で満足した。

そんな訳で、其後彼女の上に異変の起きるまでは、夫婦でもあり、夫婦でもないような奇妙な関係が続けられたのである。

兎に角完全な夫婦になるまでの、二人の性生活程不思議なものではなかった。その間はさすがの亨介も、お庄の氣まぐれな性慾のため、彼自身の性慾を漏費したり、中絶したりするような、悩ましい道化の役で満足しなければならなかった。

梅雨があけて夏を迎える頃になると、暑がりやのお庄は毎晩裸で寝るのだったが、寝相の悪い彼女は太の字になったり、両脚をあげたりするので、いつの間にか布団は脱げてしまつて、彼女の豊満な臀が見えたり、むっちり弾力の増した胸や下腹まで惜しげもなく見えるので、亨介はもうすっかり神経衰弱になつて、そのままでは眠れなかつた。

た。

本能の要求に満足の与えられない亨介の野性は、女を征服することによつて、自己の性慾に拍車をかけ、そして不自然な手段によつて、慾情の満足を得ようとした。

彼はそれから殆んど習慣的にお庄を抱擁し、あらゆる手段によつて彼女を愛撫した。亨介は烈しい色慾で昂奮すると、彼女の××に舌を入れた。彼がお庄の内腿に顔を入れると、彼女の股は自然に外転して、亨介の顔が入り易くなるので、舌をつけて強く摩擦すると、快感のために××はいちじるしく充血し、大××が強く膨張して開けられ、××が益れ出て、×挺が固く勃起する。

そしてお庄がだんだんとよくなつて、有頂上になればなるほど、いよいよ逆上した亨介は、彼女のよがる××の最鋭敏な場所を、舌先でさがし、一層彼女をよがらせようとした。

それでお庄も×をやってくれて、彼にもやらせるやうな方法をとってくれたら、亨介はそれで充分満足できる筈であつた。ところがお庄は亨介の望

む通りにならなかった。……と云うのは、そうして彼が一生懸命に汗を流して大骨を折っている時でも、不意にさつと腰を引いて、

「もういや、やめて」

と云って二度とさせないことがあったり、そうかと思うと指を×れてくちつている時でも、フンフンと鼻息を荒くして、××でぬるぬるになった××を押つけ、せわしく腰をつかいながら、二度も三度も×をやるときがあったり、気が向けば亨介の××を握って上下に擦りながら、

「もっと大きくならんのか……」

と、まるで、おもちゃのようにいぢり廻したあげく、二度もつづけて射精させて、喜んでいような晩もあった。

そんなわけで、大抵の場合二人の満足は別々だった。

性に無智なのか、多少性慾に異状があったのか、其後亨介がそれを匡正させるために快感を表現させることや、愛撫し合うときの技巧など……熱心に教えたのであるけれど、一向その甲斐がなかったのである。

こう云う事情で、亨介とお庄は、そ

んな歪んだ不自然な関係で妥協し合つたのであるから、やはり何となく物足らぬ感じで、夫婦としての情愛が、お互の胸の中で充分に醗酵しなかったのは、ほんとうだった。ところが……。

三

夏も終わろうとする或晩のこと、例によつてお庄と宵から戯れていた亨介が一寢入して眼を覚すと、傍に寝ていたお庄が居ないから、どうしたのかと思つて、ふと気がつくと、襖一重向こうの玄関で、ひそひそと話声が聞えるのであった。

「フ、……」

突然、女の忍び笑いが聞えた。それがまるで性交時の女の喜悦声のようだったので、ハッと起き上った亨介が、そつと襖の間から覗くと、お庄は畳に片手をついて、府向きながら、少し臀をもち上げるように膝を立て、いた。そしてその向うに、彼女の影に隠れてよく見えなかったが、上り口のところに腰をかけているらしい白いワイシャツを着た若者の姿があった。

それからすぐ亨介が襖をあけたので、

それはほんの瞬間の出来事ではあったが、その時チラリと見た亨介の眼に、若者の腕がお庄の膝のあたりにのびていたように思われた。間もなくその男は氣まり悪げに、コソコソと帰って行った。

「あれはどこの奴ぢや、お前知っているのか」

「え、心安い人なの」

「なんや、いやな男やないか。何用あつて来たんや」

「別に用ッてあれへんけど遊びに来たんやわ。男前でッしやろ、あたしあの人好きやわ……」

「阿呆ッあんななまったれた男のどこがえ、のんや」

「妬けるの、フ、……」

「馬鹿……あんな奴に妬く程の価値があるか、ハハハハ」

と威勢よく笑ったものの、心の底は嫉妬の火が燃えていた。亨介はその上争うのも馬鹿らしかったもので、黙り込んでいると、彼女はもう鼾声をたて、いた。

それから亨介も眼を閉じて眠ろうとしたが、さっきのお庄の嬉しさうな忍

び笑いや男の様子が胸を疼かせて、どうしても眠れない。

お庄の身体のことを思うと、まさかとは思うが、夜遅く、自身よりは年の若い男を引入れていたそのことだけで……亨介はなかなか眠れなかった。

眼を開けて他愛なく眠っているお庄の顔を見ると、今夜にかぎって娼婦のようにさえ見えた。この女があゝの青年に何をさせていたのだろう……亨介はそう思ふと、胸の中が煮えかえる思いだった。

そのことがあってから亨介は、よく夜になってから外出した。そして家に戻ってくるのは大抵十二時過ぎで、折には一時二時にさえなる晩もあった。ところで亨介のこうした行動には深い計画があったので、彼は外出するたびに、お庄の帰宅の遅くなることを祈って出るのだったが、心に一物のある亨介は、かえってそれをお庄が喜んでくれるように感じて、ますます疑いを深くするのだった。

十日程たってから、いよいよ亨介は計画の実行にかゝった。
元来、長家建になった亨介の家の裏

手には、隣家と共同の細い道があけてあった。亨介は其晩何食わぬ顔で外出すると、そっと引返して、足音を忍ばせながら便所の汲出の外はめったに人の通らない、その狭い小路の板塀に蝙蝠のようにへばりついてじっと息を殺すのだった。

板の割れ目から覗くと、庭が狭いので目の前の部屋が一部分しか見えぬが幸い、割れ目が所々にあったので、位置を変えさえすれば部屋全体が見える彼はそんな狭い場所に一晚中立ちつづけて、板塀の間から目を放さなかった。しかしその晩も翌る晩も何事もなかった。だが亨介は根気よく毎晩のように立ちつづけた。
ちようど六日目の日曜の晩のことであつた。

四

蒸暑い晩だったが、お庄は風呂にでも行くらしく、家を留守にして出て行った。

二十分程して戻ってくると、鏡台を座敷の中央に出して、両肌をぬぎ立膝をして彼女は化粧を始めた。湯上りで

ポツと上気した彼女の顔は、見えているうちに白粉や紅で彩られて、妖艶になつて行つた。明るい電燈の下で見るお庄の美しい肌は、まだ水気をふくんだように、しっとり真白に彩っていた。厚みのある肩から腕へと流れる柔い線……成熟した乳房のふくらみ……腕をあげるたびに覗く腋毛のあたり……まるで歌麿の描いた浮世絵のような媚かしさで、いつも見馴れている亨介でさえ、我を忘れて抱きついて行きたいような衝動を感じるのだった。

化粧を済すとお庄は台所と奥との間を二三度往復した上、今度は押入から布団を出して敷くので、寝るのかと思ふと、そうではなく、またそれをたゝんで片隅によせ、その上でデンと腰を下していた。それからまた向うに行ったり、座敷に座ってみたり、簞笥の抽斗をあけて見たりして、彼女の態度はそわそわと落付きがなかった。どこかで秋虫がなっていたが、緊張した亨介の耳に入らなかった。

裏側の家で感度の悪いラジオが鳴りはじめた。

その時座敷にいたお庄の顔に、瞬間

嬉しそうな感情が走った。と見る間に立上った彼女は、玄關の方へ行った氣配だった。

亨介の胸は急に高鳴った。

あゝ、それから亨介は何を見たか。

彼はこの刹那までお庄をうたがってはいたが、まさかと思っていた。ところが、今彼女が座敷へ引きずり込んだ男の顔を見た瞬間、彼の信念が、空気の這入った風船玉のように、たちまちぺちゃんこにひしがれてしまった。

その男と云うのは間違ひもなく、この間のあの生白い青年だったのである。

しかし彼は嫉妬に燃えるうちにも、彼女の不能を知っていたから、腹の立つうちにも幾らか余裕があったので、一たいどんなことをするのだろうと、好色的な覗見に淫情を燃やして、隙間から一心に眼を放さなかった。

すると何としたことか、亨介にとっては驚天動地の出来事が目の前に展開されたのである。始めお庄とその男が何やら話合っていたけれど、小声だったのでその内容は解らなかったが、二人はだんだん昂奮して、手を握り合ったり、膝をつねったり、恋する男女に

は常態な仕草があった後、二人は寄添ってびったり唇を合した。

亨介の××は浅間しく勃起してくる。

やがて男はぼっと上気しているお庄を抱いて、布団のところへ連れて行く。と、左手を女の首に捲いて、ぐっとそれにもたせるように押しつけ後ろから脚を延して、彼女の臀をその上にのせるようにしながら、右手を××に押されるのだった。

亨介は少し見えにくくなったので、位置を替えて、下の方にある割れ目から覗くと、こちらを向いて前を上げたお庄の××が、下腹の辺から見えた。そして黒い×毛に覆われた肉付きのいい××は開かれ、根元まで差×れられた男の指が出入りするたびに、薄赤い×内の秘肉が見えたり隠れたりしていた。

お庄はだんだんよくなるのか、上向きになった鼻の穴が心持ち広がって、肩と喉の辺が大きく波うって、くねくねと腰を動かし始めた。

お庄がよがり出すと、男は見る々亢奮して後ろに廻した片手で乳を押え、下から彼女の舌を吸った。……性的

興奮に鋭敏な三ところの急所を攻められて、お庄は夢中らしく、いきなり男の顔をひらくと、顔に似わぬ淡紙色の太い男×がヌッと顔を出す。お庄はそれをぐっと握りしめて、いつも亨介にするように、上下にすぐくのである。いつの間にか亨介の嫉妬の炎は、激しい情慾の炎と変っていた。彼はもうさっきから勃起し切っていた男×から、ほとばしり出る粘液を感じていた。

室内は今や佳感の絶対境と見えた。内裡の二人も夢中だったが、外の亨介も夢中だった。そしてそこまでは亨介の予期通りだった。

ところが、それから後のことは、亨介は意外な衝動を与えたのである。

五

つまり実のところ、今迄男が指でくじったり、女が男×を握ったりしていたのは、彼等の前哨戦だったのである。それから亨介の熱心に覗いている目の前で、どんなことが行われたか……やがて狭い部屋の中程に布団が敷かれたと見る間に、二人は丸裸になって、お庄を仰向けにさせた男は、その両脚

を肩にかけてグッと押つけた。

……男の重量がかゝると、彼女の身体は××を空に向けて海老のように曲った。男は猛然とその××に太い男××を押つけていった。

一度やったお庄の××は、充分に満腹して××を流しているらしく、××先でかすか口元を擦っていた男の腰に力が入ると、何とヌルヌルと、苦もなく根元まで押×ったのである。

「アッ」

その時亨介は思わず叫声をあげた程驚いたのである。それもその筈、ゆうべまで亨介は最初の失敗に凝りて彼女を全くの不能者として扱って来た、だからどれだけ慾情の激しい時でも、じっと抑制してお庄の××を狙わず、不自然な行為だけで甘んじていたのである。

あゝそれなのに、今宵この経緯は何事だろう。亨介は足が震えて立っていられなかった。胸の中は嫉妬の情怒と奇怪な性慾との交錯で、眼もくらむ程に勇き立った。

しかしそれでも亨介は、すぐ飛込んで行こうとはせず、はやる胸を押えて、

部屋の中の無残な光景をじっと見守っていた。それは見ていて息詰るようなすさまじさだった。

激しい××のたびにめくれあがる大××のあいだから、××にぬれ光った強大な××が見えがくれている。自体を曲げているので、思うように腰のつかえぬお庄は、臀を振りながら、痺れるような快感を堪えてゐるらしく髪を振乱した顔を真赤に上気させて、枕をはづし眉をよせてよがりながら、

「えゝわ……えゝわ……アレ……
：×××××……×××××……
う死にそうやわ……×××××フンフンフン」
と途切れ々に呻くのが、
亨介の胸をえぐるように聞えるので、
亨介は思わず、カッとして、いきなり裏口の切戸をたゝいた。……一瞬しんと静まりかえった。

次の瞬間慌てふためく物音が聞こえた。亨介はもうさっきまでの余裕を失って力限り切戸を押すと、半ば腐朽していた破れ戸がすぐ開いたので、八ツ手の間から縁側に飛上ると、男の姿はもう見えなかったが、お庄は布団の上で、腰から下に浴衣を巻き、血の氣の

失せた唇をキッと結んで、充血した眼に涙をためながら、ぐったりと人魚のように膝をくづしていたが、一切を見てもしまった彼の目にその姿が、如何にも挑発的に見えた。

亨介は今までにこんな淫婦らしいお庄の面相を見たことがなかった。そして亨介の血を吹くような眼に逢っても彼女の顔の筋肉は微動だもしなかったし、無論あやまろうとしなかった。

亨介はこのお庄の態度を忌々しく思ったけれど、憎めば憎む程彼の慾情が燃えたぎって最早制止出来ぬ限度まで来ていた亨介は、奮然とお庄に飛びかゝっていった。

アッと云う間に亨介の重い身体が、お庄の腹の上にのりかゝっていった。

さっきいきかけてやめた彼女の××には、もう臀の辺まで××が溢れ流れていた。亨介がいらって押こむと、ぬるりと根元まで××り込んだがさすがに長いあいだ耐えに耐えたあげく、さつきから痛い程張り切っていた男の熱鉄のような××で、すかすかとこすられる心地は、天にも地にもたとえるものでなかった。

亨介も、いつの間にこない、××になったのか、不思議だったが、今はそれどころではなかった。

「え、か……え、のんか」

「え、ねん……もう死ぬ程え、ねん……あんたそこえ、わ……もつとぐつとして……あーッ、そこそこ……もう何んやら身体がとけるみたいや……どうしよう……え、わ……フンフンフン」

「あ、ッーもう堪らん……×××××」
「あれ待って……ア、×××××」

初めの一つはあっけなくいったが、若い旺盛な性慾は、それだけでは満足しなかった。暫くするとまた、寄添ってびったり肌と肌を合す二人だった。

亢奮が静まると亨介は、お庄がいつ完全な女になったのか、そのことを白状させようとしたが、彼女は容易にそれを亨介に打明けようとはしなかった。しかし憶せず隠す程、亨介の獵奇心を挑発して、一層執抑にせまるので、お庄はとうとう止むを得ずに、次のような真相を亨介の前で告白したのだった。

六

それは二十日程前のことだった。芝居好きな彼女は、亨介の許をうけて、中座の夏芝居を見に行った帰り、桃谷駅前で電車を下りると、味原町で乗りかえた其時から、前の吊革にぶら下つて、彼女の姿に好色らしく眼を向けていた、若い三人の男が、お庄が下りるとあわてたように、どやどやと続いて下りるのだった。

もう十時過ぎだったろう、広い電車道に人影はなかった。

お庄は氣味が悪かったので、足早に北の辻を東へ曲ろうとすると、その男達は追すがって来た。

「姉さん、桃谷の駅はどう行くの？」

とだしぬけに尋ねかけられたので、お庄は黙っているわけにもゆかず、

「あの……その辻を左え曲ると、すぐですよ」

と南の辻を教えると、

「あ、そう……」

と云ったが、後ろへ戻ろうとせずについて来て、

「姉さんはどこまで帰るのや」

と云うから、

「すぐそこです」

と云いすて、逃げるように行きかけると、いきなり前に立ちふさがつて、
「淋しいやろ送ったろか」

「結構です」

身を避けて走ろうとするお庄の手をぐつと掴んだ。そして、

「アレッ」

と叫ぶ彼女の口を一人が後から、大きな手でグッと押えた。

一時間後にお庄は、附近の稲荷神社の境内の松林の間に、ぐったりとなっていた。

その時お庄は、必死に抵抗はしたのであるが、周りは高塀に囲まれた大邸宅ばかり淋しい場所だし、しかも男三人の力で抱か、えられていたので、弱い女の力ではどうすることも出来ず、とうとう力つきてぐったりなるところを、一人の男が乗りか、ってきた。他の二人に手足を押えられた、餌を見付けた猛獣のような勢いで、鉄のように勃起した××を××目がけて短刀のように突込んでくる。逆上した男の前に否も応も、苦痛も不能も、あったものではなかった。

「アッ」

と叫ぶと同時に、お庄は××に激痛を感じた……その瞬間、彼女の処女性は、永久に失われたのである。

最初の男はお庄の苦痛？とまでは云えぬが、少なくとも何の快美も感じぬうちに、太い××をビクビクと痙攣させて、おびただしい×液を吐きかけるのを、彼女は×底に感じた。

お庄はもう反抗する力も失せて、芝草の上に仰向きに倒れたまゝ、もうどうにでもなれと観念していると、その上に跨った、夜目にも逞しい二人目の男は、彼女の両脚を股の間に挟んで、灼熱した××を押つけると、前の男の×液でぬらぬらになっていた××は、一気に××を吸込んだ……途端にお庄が、

「ウッ」と息が詰って、一尺ばかり身体を乗り出したほど、男の××は物凄い容量だった。

男はその刹那の快感に、たちまち昂奮して、七八編×××しすると、ぐつと腰を押した。すると、さしにも偉大な××ではあったけれど、一たん堤の切れた彼女の××はさほどの苦痛もなく、ただ×内の肉を押分ける××の、

異常な感触を覚えるだけで、くりくりと根元の×際まで押×れられた。

その時からお庄の××は交合の快味を感じ始めた。一たんそうになると、男の両股ではさまれて挟くなった××に情容赦もなく、ずぶずぶと××しされる。名状出来ぬような摩擦の刺戟は、痺れるような快感を全身に伝えて、歯喰いしばって堪えるお庄も、思わず鼻息が荒くなるのだった。

「やってはいけない。やらされては恥かしい」

お庄は、溺没しようとする官能を引緊めて、やゝともすると消えようとする理性を追駈けた。しかし夢中になった男に抱きしめられ、大腰小腰に×××されるといつしか知らぬ間に、彼女の腰が動くのだった。

「どうや、えゝだろう……もうこうなったら……な一しよに××なよ……な……それ……こゝを……こ……うしたらえゝやろ……どうや……えゝか……えゝか……あ……ッ……も堪らん……××よ××よ……早く××な……さあ……もう××……あゝ……ッ××××」

「フンフンフン」

男は貌のように咆哮して、圧倒的に×をやる瞬間……お庄は顔を真赤にしてもう一擦り二擦りで、痙攣しそうになる××にブレーキをかけるように呼吸をつめていた。

××× ×××

三人目は色の白い頭髪を長くした、年若い男だったが、その男は中でも一番気が弱いらしく、他の二人のように急に乗りかゝってこなかったが、

「愚図々してると人が来るよ」

とさきの男に押されて、漸くじんわり割り込んで来た。優しそうな男だった。

そして男が不器用に、だが割合に太い勃起し切った××を、もう内腿から肛門のあたりまで、滝のように××の流れる××に押×れた時は、最早お庄の良心は麻痺していた。……何しろかわるがわる二度まで犯されて、絶頂の一步手前まで押つめられていたお庄が、三たび精力絶倫な××を押し×られたのであるから、これは到底辛捧の出来る筈はない。もう上手も下手もなかった。ただ×れているだけで、もう身も骨もとろけるようなこゝろよさ……

「お庄はどうとう取乱して、身も恥も忘れ我から男の身体にしがみついて行った。するとお庄の耳元で、

「済みません々」

と小声で云いつづけた。……お庄はその舐めるような男の眩きを、甘い音楽のように聞いて、いよいよ夢中になった。

心がゆるむと、今まで亨介とのあいだでは味わえなかった刺戟の快感が、電気のように××から全身に伝った。

……彼女はいよいよ亢奮して、

「えゝわえゝわ」

と喜悦声をあげ、一生懸命に持ち上げていった。

旺盛な精力を蓄積していた若い男と、最早佳境の絶頂に登りつめていたお庄はその晩そこで、生れて始めての性交の醍醐味を味わったのであった。この最後の男が、亨介の見たお庄の対手の青年だったのである。

七

お庄から事情を聞いた亨介は、まるで顔を逆なでにされたようだった。硝子壺の中の果実が、いつの間にか他人

から甘い汁を吸われてしまっていたのである。憤満？それもあった。しかし彼の頭の中は、そんな簡単な言葉では割切れぬ程、感情の渦が巻いてゐた。

「何と云うてもあたしが弱かったのや……そやからあんたが許してくれやはらなんだら、出て行くよりしかたがないわ……」

「出て行く？……お前はそんなにあつさり、俺と別れるつもりか」

「好きこのんで別れとうないわ……けどあんたがあんまりしつこいからやないか」

「俺は何もお前が穢されたそのことで腹が立つのんと違ふ。ただお前がその後から、あんな若い男を引づり込んで楽しい目をしていながら、俺には相変らず、前と同じような関係をつづけさせていた。そのことが俺には解らんのや、それと云うのも、お前が俺に対して愛情がないからやないか、それが一ばん俺の氣に入らんのや」

「打開けたらあんた怒るやないの」

「別に打開けて云わんでも、お前さえその氣なら何でもない筈やが、何にせよ、お前は水臭いねんわ、一ぺんぐら

い……」

「一ぺんぐらい？」

「……入れに来たらえゝねんわ」

と小声で云って、ちよつと赤くなる。

「……」

これで三角になっていた男の感情は、ぐんにやりとくづれる。それでなくてさえお庄の話で、抗みながらも三人も男に犯された淫虐な場面を想像すると、いまわしいとは思ひながらも、彼女の姿態や呻き声までが生々しく頭に浮んで、サディズム的な性慾が奔流のように溢れかけていた亨介の欲情は、今のお庄の囁きで一度に堤を切った。

もう怒りも、不満も、面子も何もなかった。亨介は火の玉のようになってお庄の弾力のある身体に飛ついて行った。

お庄も昂奮して……そこへ四つ這いになった。亨介はその白い豊かな臀を引きつけた。彼の逸物の胴中は血脈が怒張して筋くれ立ち、強大な××はムンムンといきんでいた。焦立ってズブリと××先を押×れ、三腰四腰擦るうちに××が溢れてくると、亨介はぐつと腰を押した……その刹那の、戦

慄するような摩擦の感触……あゝ宿望して得られなかった禁断の木の実は、遂に亨介の口に入った。

この一瞬の感激に、亨介は有頂天になった。

「あ……ッ」

お庄もあまりのこゝろよさに、歓声をあげて、畳半分程のり出し、両腕で座布団を抱えた。

すぐずぼりずぼりと、物凄い×××しが始まる。

「あゝえゝ……えゝ……うーふん

……ふん……あゝとてもえゝわゝ

……どないしよう……辛抱出来んほ

どえゝわゝ……あゝもう死んでも本望

やさかいもつとぐつとして々フンフン

フンフン」

と夢中になって××り出すと、××の奥から糊のような××が流れ出て、××を伝い、×毛から下腹のあたりまでべとべとに濡れわたって、ぐつと腰を押すたびにしぶきがあがる。

およそ女の××と云うものは、上つき、下つき、大きい小さい中庸を得て、その×壁は複雑柔軟で弾力があり、陰内が温くて、××を×れると狭からず

広からず、××のぬめりも充分にあつ

て、口元で巾着のようにしまるのが上々であるが、お庄の××はそれ以上稀代の絶品だった上、性交の味を知ってまだ間のないのに、閨房の技にかけては、百戦錬磨の年増も及ばぬ、よがり上手だったので、始めはあなどっていた亨介も、いよいよ油断ならじと、深く浅くゴボゴボと、次第々に××し激しくすれば、お庄も一層逆上し、自由にならぬ臀を振って××に押つけ、鼻息荒くあせるので、こちらもいらって××む拍子に、ずぼりと×けたので、持添えて×れたその指先で、女の急所をいじりながら、大腰にすかさずやると、お庄は堪らず、

「あれもうどうしよう々」

と両の膝を右左に踏み張り、思うさま股を開いて、××を子宮へ当てさせる様子……身体を反らせると、明るい電燈の下で、裸のお庄のむっちりとした雪のような臀が、鏡餅を二ツ並べたようで、その間から渋茶色の××が××するたびに、めくれあがる××はこゝろよさに膨張して、そのあいだからぬるぬると××が伝い流れる。

亨介も早や××そうになったが、今

はの際にもう一層よがらせると、片手に女の乳をもみ、片手で××をぬるぬると×××ながら、××も折れようとすくいあげ、えぐり廻して、はげしく腰をつかう三所攻めに、さすがのお庄も身もだえの泣きじゃくり、

「あれもう、××××××」

と取乱しながら、大きな溜息をついた。

「やった？」

「フン、あんたまだ」

亨介は返事のかわりに引×いて仰向に寝ると、濡れた××がびくびくと下腹をうつ凄まじさに、一たんおさまりかけたお庄の息づかいが、再び荒くなってきた、いきなり男の上に跨り、その上から茶臼におしかぶせ、すぐ夢中になって上から腰をつかうその欲情の烈しさに亨介も堪りかね、

「あッ××××××」

と弾丸のような勢で、熱い精×を子×の口にはじきこめば、それに誘われてお庄の××もまたビクビクビク。

だがお庄は男がやろうがやるまいが、そんなことはお構いなく、つづけて腰を動かしていた。女は一たん××を×る

と、もうとめどがなく、果ては取乱して、しくしくすゝり泣きながら、ひっそりもなく×を×るのであった。

××× ×××

そのときから亨介は、お庄の××の魅力にすっかり圧倒されてしまった。

お庄は慾情が募ってくると、亨介を裸にして四つ這いにさせ、自身も裸になり其の上に跨って、部屋中をぐるぐる歩き廻らせたり、寢床の上で、按摩をさせたりするのだったが、亨介はまたそれを喜んで、お庄よりも一層愛情を燃やし、彼女の身体のあるゆる場所に接吻したり、凡て互の性慾の亢進に役立つことなら、どんなことでもしてやって、お庄の満足を買ったので、それがいよいよお庄の淫心を挑発して、彼女はだんだん放縦に流れていったのであった。

八

亨介はもうその頃は千里山で、相当間敷のある家に住んでいた。その内幕になって、亨介の勤めていた会社の慰安会が、嵐山と決った。もう其頃は会社でも相当な位置を占めていた亨介は、

朝早くからめかし込んでいたお庄を連れて、集合場所の天六まで出て行った。亨介等が電車から下りると、そこで待っていた皆の目が、美しいお庄の姿に集るので少してれていたが、得意でもあった亨介は、嫌がるお庄を重役の前に押しやるようにして挨拶などをさせて喜んでいた。

花の嵐山は少し遅かったが、初めて来たお庄は亨介を引張って、酔ぱらいの中を、縫うように橋を渡って、亀山公園のあたりまで足を延ばさせた。漸く引返して来ると、小橋の際で舟が待っていた。

会場の嵐山温泉の広間では、お方の座が決って黒い膳が運ばれてくるまで可なり長い時間がかゝったが、その頃になって社長の国島利平氏がやってきた。

それから簡単な社長の挨拶があつてそのあとは無礼構だったが、さすがに始めの内は緊張していた連中も、酒が廻ってくると最早や社長も蜂の頭もなかつた。一人が唄い出すと、それからハ乱痴気騒ぎで、銚子が廻ると盃が飛ぶ………いつの間にか外は暗くなつて

いた。

ふだんから余り酒の飲めぬ亨介は、かわるがわる前に来て献酒されるのを、正直に飲んでいたので、もう座にも居たゝまらぬ程苦しいのを、じっと我慢していたが、その隣に坐っている美しいお庄のところへは、一層盃の雨がふっていた。

まるで花に集る虫のように、若い社員や頭の禿げた重役級までが、年甲斐もなく盃を強いてくるので、もうその酒の捨て場もなくなり、その内にお庄も次第に酔が廻って、前後も解らぬ程になった。

いつの間にか彼女の居住いはくずれていた。

潮時が過ぎると、一人二人づゝ席をはづし始めて、座敷が淋しくなつていったが、その内亨介は何が何んだか解らなくなつてしまった。気がつくとも目の前の柳の縁があつた。疏水の流れが渦を巻いていた。

彼は友達の肩にもたれるようにして宮川町の軒燈の下を、一軒々々覗き歩いていたのである。

同じ頃お庄は、京津街道のアスファ

ルト路を、自動車に揺られていた。彼女も気のついた時は、崖に面した小座敷に寝ていた。

亨介のかわりに側にいた、でっぴりとした五十位の重役タイプの男が、社長国島利平だったとは、自動車に乗せられてからも気がつかぬ程、彼女は酔っていたのである。

一坪程もある失塗の飼台に、いろいろな料理が並べられて、サイダーか、ビールだか飲んだのは、あとで考えると解っていたようにも思えるのだが、はつきり意識した時は寢床の上だった。

その時になって、そばに寝ているのが社長だと気がついて、お庄はハッとした……夢のように何かされたように思うのだが……お庄の顔は急に赤くなった。男に知れぬように、そつと前に手をやってみると、ぬるりと滑る程濡れている。

「アッやっぱり?……」

そうと気がつく、そんなに悪びれも知れないかわりに、お庄の腹の中にはちゃんとした成算があった。

「何かしたの……」

と、しなだれていくと、国島は今眼が

さめたように、

「あ、奥さん、気がつきましたか。大変だったですよ。僕は国島やが」

「存じてます。済みません……でもあたしも落合に合す顔がありませんわ」

「落合君に……どうして」

「どうって……あたしより社長さんの方が、よく御存じでしょう……」

「おかしいね。何か思違いしているのと違う。僕は何もしやしないよ」

「それほんと」

「ほんとも」

「そう……それではあたし失礼しますわ」

と起きかけると、国島はその肩を押えて、

「も晚いですよ。今頃から何処へ行くのです」

「何処って落合のところえです」

「落合君は今頃みんなと、京都か伏見あたりで遊んでますよ。だから奥さんも少々浮気したって怒りはしませんよ」

と、内股に脚を割込んでくる。

「いやです。あたし帰らせていただきます」

「いから。じっとしてなさい。もうこうなったらおとなしくしてるものだよ」

といきなり逞しい腕で首を捲きにきた。

「いやったら……どうするのです……あれ痛いわ、放して」

「おとなしく云うことを聞くまで放すものか」

「……痛いやないの」

「あれ……」

「それみな、この通りぬるぬるだよ」

「ちよっと待って……ねえ社長さんさっき何かしたでしょう」

「フ、フ、フ、ちよっとくちっただけだよ」

「それだけ?」

「うん……」

もう二人とも、耳に口を寄せて、さ、やくような小声になっていた。

「こんなことしてもえ、の……社長さん……責任もってくれる」

「もつよもつよ心配せずに充分におやりよ」

「それは男はんしだいやないの」

「そうか君も話せるねえ」

「あれ、もうよくなってるのよ」

「こゝい、だろう……それこゝをこ

うすると……」

「まだ足らんは、もったきつにして……あゝえゝあゝえゝ……早くなんとかしてフンフンフン」

お庄は息も絶え々によがるので、男も物凄い程亢奮して、ガツガツ えながらお庄を裸にして、自身も丸裸になり、真白な彼女の身体の上に、浅黒い巾のある巨体を、押破せるようにして両手をつき、びくんびくんいきり立つ××に反をうたせて、彼女の××の上に、どったりとおいた。

お庄もさっきから、指先でくじられて、気が遠くなる程亢奮していたので、いきなり握りしめて×れようとしたが、男はそうはさせず、そのまゝ××の腹を、××れから××の上にべったりとつけて、溢れ出る××を幸に、ぬるりにちやりと擦り廻す。戦慄するようなそのこゝろよさに、お庄も堪らず、

「えゝわ、えゝわ……」

と喘ぎながら、枕をとって臀にあてがい、男の腰を両手で引きつけ、臀を跑えて一生懸命……

「あゝもう××そうになった……早く×れて々」

と夢中になって、濡れさらばった××に手をかけ、持ちそえてのぞませ、ぐっと一気に持上げると、さしもに太い××も、ぬるぬるツと××まで×り込む。その×れ具合の尊とさと有難さに、諸々の女体の神秘を知りつくした、さすがの国島も、

「アッ」

とばかりに驚喜した。

ぐっと奥まで押×れると、子宮はくると廻転して、××に吸いつき、づぼりと×く時は、×内のびらびらが××の胴をしごいて、魂まで持って行かれるよう……、すかり……ぐしゅっと、深く浅く×××しするたびに、五臓六附に浸み渡り、頭のしんまで痺れさす、天下一品の上開だもの、男の身体が溶けてしまわぬのが不思議なくらい。

「こないゝ××は生れて始めてだ」

と国島は、精力一ぱいの力を××に込めて、お庄の舌をしごきながら、跑いたり、抓ったり、抱きしめたり、どうしたらこの感激の表現が出来るのかと、感極まって、臀をひねる、その逞慾の凄じさ、汗は滝と流れた……

「ウッ、フンフンフン」

「フ、ン、フ、フンフンあーッ……もう堪らんわ、早う××して××してフンフンフン」

「僕も××そうだが……あんまりよくて×るのが惜しいのだよ」

「一ペン×って、またしたらえゝねんわ……もうどうなってもえゝ……何んべんでも×るさかい朝までしてッ」

と、ぐっと腰を押す拍子にビクビクビク。

××× ×××

翌朝、玄関で見送る女中連に、疲れた顔を見せて自動車に乗ったが、昨夜あれから、どれだけしたのか……二人の他には解りようがなかった。

九

こうしたことがあって間もなく、亨介は課長に昇格した。それと同時に、お庄の身なりが、だんだん華美になって、持物なども贅沢になった。

彼女はそうした買物をするのに、今日は丸、明日は高島屋と、毎日のやうに出歩いた。しかしお庄にそんな金のあるわけではないので、亨介は、

「そない色んな物買う金、どうしたんや」

とたずねると、

「借りたの……でもあんたの迷惑になる金とちがうさかい。心配せんでもえ、」

「金のことは兎に角として、そんな贅沢な真似をするんの、よした方がえ、で」

「もう買うだけ買ったよって、今更云うてもあかんけど、もうやめとくわ。金もあれへんし……」

お庄は別に不平な顔もしなかったがそれから時々外出はしているらしいかった。偶の日曜日に遊びに行こうと誘うと、

「あら、あたしちよつと約束あるねんわ。今度の日曜一しよに行くさかい、今日はあんた留守して、よ。頼むわ……」

と、亨介に留守をさせ、自分は亨介がまぶしい程美しく着飾って、

「あんた、夕御飯ちゃんとしたるさかい。遅くなったら先にたべといてね」

「かえり何時頃や」

「何時でもえ、やないの。ちゃんと寝

床しいといて、寝たらあかんし」

最後の言葉に媚を含ませて、さっそうと出かけて行くのである。

そんな場合は一度や二度ではなかった。時には夜遅く酒気を帯びて帰る時もあった。

そしてそれを詰問すると、

「済みません」

とあっさり断って、それからそんな晩に限って、寝床を別にして、わざと淫らな格好をして眠るのである。

それが亨介に、地獄の呵責にもまさる苦しみだった。

始めからそれが解っているのに、亨介も意地になってそれを見まいとしても、彼女が亨介の鼻先で、派手な長襦袢をずらして、煮ぬき玉子をむいたような麦しい肌へ糸もまとわず、素早く布団にもぐりこむのが、眼を眼っていても解るので、そつと細目をあけてみると、酒にほてるのか、乳まで丸出しのしどけなさで、股を広げて大の字である。そこまでは何やらぶつぶつ云っている亨介だが、途端に胸がわくわくして、温い股間のものが鎌首をもたげるのである。

それから他愛のなくなってしまうのは、いつもの事であった。その時分から亨介の家へ、会社の若い同僚がよく遊びに来た。お庄がまたそれを喜んで歓待するので、図にのって彼等は毎晩のようにやって来た。

来ると彼等はお庄も仲間に入れて、トランプしたり、花を引いたりしてキヤッキヤッと騒ぐので、亨介は面白くなかったが、むくれていて大人気ないと思はれるのも癪だったので、渋々つきあったりしていた。

×××

×××

或る晩亨介は会社の客の接待役で、浜寺の或る料亭に行つて、九時過ぎに家へ戻つてくると、玄関が締つていたが、勝手口に廻つて扉を押すと、そこが開いたので、何心なく座敷へ上ると奥の間に人の気配がして、何だか数人の男の忍び笑いの声が聞えた。それが何んだか亨介をハッとさせるように、妖しい声音だったので、彼は咄嗟に息をのんで足音を忍ばせながら、襖の側に近付いたが、どこにも隙見する場所がないので、暫らく考えている内に、襖の向うからお庄のらしい、フーンフ

ーンと云う呻き声がしたので、カーツとなつた亨介は、その時急に思いついて、台所から飼台を持出して来ると、それを足つぎにして、欄間のあいだから下を覗くと、これはまた何んたることぞ………。

十

部屋の中は落花狼籍だった。

花札が一面にまき散つた十畳のその真ん中で、仰向けに倒れているお庄の上に、会計の檿村と云う若い社員が重っている。其の上を吉村と辻とが折重なるように押えているのに、いゝ年をした庶務の大岡までが、顔で笑っているくせに、真剣な眼色をしながら、それに加勢していたのである。

そしてお庄は反抗していたせいか、着物の前はすっかり捲かれて、白い左右の股を拡げているのが、男達の胸の間からのぞいている。

一番下になつた檿村が何をしているのか………上になつた男の影で見えぬが、こちら向きになつてお庄は、髪を乱し、顔を真赤にして、盾を八の字に寄せながら若しいのか楽しいのか、

途切れ途切れに何か云つてフーンフーンと喘いでいる。

その様子を見た途端に、亨介の頭が急に熱くなつて、眼の前が暗くなつたと思つた瞬間、飼台をひっくり返し、襖を蹴はづした亨介は、とりあいの敷居に、ワツと云つて尻餅をついた。

みんなが逃げてしまつた後に残つたお庄は、いきなり倒れている亨介の顔を跨いで唇の上に××をつけた。

「ウツ………」

もうこうなると、嫌でも応でも舌を入れるより仕方がなかった。浴びるような粘液を唇に感じながら………。

×××

×××

二三日後ある酒場の一隅で、亨介はもう赤くなつていた。

「檿村君、僕は決して怒りはしないから、ほんとうのことを云つてくれ、彼女はあの晩僕の前ですっかり白状したのやが、僕は君の口から、それをもう一ぺん聞き度いのだよ。ねえ檿村君………君はあの晩、目的を達したのだから………」

「済みません………しかし目的つて仰有るけど、あれは初めから僕の意

志じゃなかったのですよ。………大岡さんなどがよつてたかつてあんなことにしてしまつたのです」

「それで、彼女は素直に黙つて君に許したのか」

「いゝえ、そんなことはありませんけど、大岡さんがいやだったら社長との間を、貴方にしゃべると云つて、初めのうちは嫌がつていた奥さんを、無理に押倒してしまつたのです」

「何にッ社長とッ」

亨介は其時になり、始めて嫉妬らしい感情を爆発させて、思わず酒場の椅子から立ち上つたのである。

——おわり——



妖艶 刺青腰元切腹

西京朱鷺

「おい、八公。石見守さまの二た不思議って知ってるか」

「ハテ、そりや何のこった」

「ムム、知らざア言つて聞かせやしよう」

「オ、芝居がかりだナ」

「その第一は、刺青腰元よ」

「そう言やア聞いた事がある。何でも花恥ずかしい年頃のお腰元が、見事な彫物をしよつてるとか」

「その通りよ。お下屋敷には御隠居の先代殿さまがおられるが、これが風流なお大名でヨ。極道と名乗られお氣に召した腰元に刺青させてお楽しみよ」

「へえー、刺青芸者つてのは聞くが、お大名のお腰元の刺青姿とは確に不思議だ」

「うい奴じゃ。余が命ずる。その方の玉の肌に刺青いたせ。というわけさ。殿さまの下

命とあれば否やとは言えねエ」

「大名とは勝手なものだ」

「町方の女と違つて、武家娘の刺青姿つてえのは又、格別乙なものだそうナ」

「ムム、さもありなん。一度でいいから拝みてえものだナ」

「若いきれいな腰元が裸になつて、玉の肌に針を刺され墨を入れられ、呻きもだえるさまを、殿さまが御満悦で見られるそうナ」

「そりやこたえられぬ見ものだテ」

「その刺青腰元に、肌の透けるよううすもの一つ。腰巻なんて野暮なものなんざ着けちやいねエ。そんな姿で舞い踊るから、ひよつとして有難い観音さまも拝めようかという寸法サ。石見守さま御隠居の御酒宴と言やア何処のお大名方も大喜びでお招きに応じられるとか」

「俺だつて喜び勇んで行くぜ」

「目尻を下げてだらしねエ。間違つてもおめえなんざ招かれつこねエから安心しナ」

「ハハ、大きにそうだナ。で、もう一つの不思議てのはなんだ」

「それよ。それが又、一段とすげえ」

「刺青よりすげえつてナなんだ」

「いいか。女の腹切りヨ」

「なに、石見守さまのお腰元は刺青した上腹を切るのか」

「そうよ。侍の自害は切腹するのが作法よ。所が石見守さま御家中じゃ、女でも自害は切腹というのがきまりだとヨ」

「へえー、お腰元がこう乳房から臍までむき出して腹を切るのかい」

「もちろん大つぴらの話じゃねえが、昔からのしきたりで、知る人ぞ知るつてわけよ」
「急に難しいこと言いやがる。それにしても刺青腰元の腹切りとは、色っぽいのと、おつかねえのと妙な取り合わせだ」

「刺青と切腹。つまり文武両道の二た不思議よ。どうだ解ったか」

「ヘン、氣どりがつて。それにしても、なんで女が腹を切るのがきまりなのかネ」

「それよ。ヘエン。そも時は何日のことなんめり。頃は戦国、世は麻の如く乱れ兵馬山野を馳せ回り、刀槍の光りまばゆく血汐は

流れて川となり、骸は積んで山となる――」

「何処の講釈場で聞いてきた」

「とにかくずっと昔の話よ。石見さまの御先祖が戦さに負けて、城主は討死、落城となった。残るはまだ若い奥方と乳呑子の男子。いくら赤んぼうでも城主の嫡男では助からない。打首が定めよ」

「大名はそれだから嫌だ。それでどうなった」

「奥方がまだ西も東も解らぬ乳呑子の首を斬るのは余りのこと。城主討死の後はこの身が城主。わが一命に代えて助命をと寄手の大将に願ひ出た」

「泣かせることだ。もちろん、その奥方とはびきりのいい女だろう」

「まあそうだろう。とにかく奥方の涙に負けたか、色香に迷うたか、その願ひ承知いたそうとなった」

「やっぱいい女は得だ。その大将め、いい女にぽーっとなったに違いないテ」

「承知いたす代りに夜伽ぎせいと言ひ出した」

「それぞれ。下心あつてのことよ。助平大将だ。で、その奥方、大将と枕を交したか」

「べらぼうめ。てめえのかかあじゃあるまいし」

「俺のかかあのことア余計なお世話だ。どうなった」

「己が夫の仇に肌を許しては申しわけなしそれだけとは――」

「お許し下され、おん大将さま――」

「想うた女に断られ、ならば玉の肌だけなりと見たいと思うたかどうか、一命に代えてと申すからにはその覚悟あろう。城主の作法に従ひ自害なしその首を渡すなら、子供の命は助けてとらすと、のたもうた」

「のたまはくときたナ」

「城主の作法に従ひ自害といやア、切腹がきまり。女に腹は切れまいと見ての難題。切腹出来ぬと言へば子供は助らぬ、では夜伽ぎせいという考えだ」

「なる程、どうでもものにするつもりだ」

「この由、聞かれた奥方は、にっこり笑ませたまいて――」

「玉が痛いのは疝氣の筋だ」

「ええ、うるせエ。奥方に玉は無いや。話をはぐらかすナ。えーと、その、たまいて申されるには、こはかたじけなし。女ながら心得あり。仰せの如く城主の作法にて切腹いたし、この首お渡し申すべし。御検分下されたしと」

「のたもうたか」

「ウム、のたもうた。寄手の助平大将、当てが外ずれたが、大将たる者が一度び口に出したことなれば、されば検分仕らん。見事に切腹なさるべし、いざ、いざ、いざ――」

よう。成熊屋ア――

「おきやがれ。そこでいよいよ奥方切腹の場だ」

「忠臣蔵でも、判官や勘平腹切りの場は、見せ場だからナ」

「そこで、奥方には白無垢の死装束、黒髪を背に流し、しづしづと設けの席に着きたもう」

「よし、なんぼでもたまいやがれ」

「さらばこれより腹切らん。それにてしかと見届けあれとのたもうて、するりさらりと帯を解く――」

「ウム、あの女が帯を解く音はたまらねエ、聞いただけでこちとらの逸物がひくついてくらア」

「吉原の安女郎ぢやねエ、一城の奥方だ。」

帯紐解いて白無垢を肩をすぼめて脱ぎ落せばたちまち見ゆる玉の肌、腕を伏せたような両の乳房、円くふくらんだ腹に、可愛いお臍まで出して、覚悟のさまぞけなげなりイ――

「よう、よう」

「九寸五分の短刀の、鞘を払いて右逆手、

氷の刃握りしめ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、わが子の命助けん為。女の腹を十文字、切腹見事にいたさんと、胸に念じて臍下を、そりそりと撫で回す―

「よう、デン、デン」

「床に腰を打ちかけし、寄手の大将このさまに、むらむらむらと男の情、勢い立ちくる逸物を、ぐっと押さえてこらえている―」

「ハ、ハ、ハ、大将もつらい所だ」

「ヘエン、東西東西。腹切る覚悟の奥方も、人には見せぬやわ肌を、思う存分むき出して、下腹するりと撫で回せば、ひよんな気分になさそわれて、しだいに乳房も張り切つて、腰の辺りがむずむずと、秘めし所もしつぽりと、女ごの情の動き来る―」

調子づいて語る所へ、のれんを分けて入つて来たのは、近所に住む踊りの女師匠にながし、年増の色気たっぷり小股の切小上った腰つき、うなじに一筋二筋の後れ毛が、男心をそそります。

「おや、いつもながら御神酒徳利のご兩人、なにやら面白そうな話だねエ。なんだって、女の腰の辺りがどうしたとか、秘め所がなんとかと、この私の来るなり聞きずてならないねエ。私のあそこがどうかしたのかい」

「こりやすまねエ。なに、熊の野郎が石見

守さまの奥方女腹切りの場を語っていた所サ」

「エッ、石見守さまの奥方さまが御切腹。そりや一大事。女腹切りの話、聞いてはいたが本当におやりなされたのかい」

「師匠、あわてちゃいけねエ。昔の話ヨ。石見守さまの女腹切の由来の一席を、八公に聞かせていたわけだ」

「おや、私の早とちりかい。そうだろうね。大名の奥方が切腹なんぞ、される筈はないやね。で、その由来とやら続きを私にも聞かせなよ。ちよいと、二三本熱いのをここえ頼みますよ」

「こりやどうも、おいらに師匠がご馳走してくれるのかい」

「まあ、木戸銭代りサ」

「えーと、どこ迄話したっけ」

秘め所がしつぽりと―という所だ」

「いやだねエ。女の私の前で」

「ほんに、師匠も女だった」

「こんな婆さんで悪かったね。それで話の方は―」

「そうよ。そこで、しつぽりと―へ、それはとにかく、奥方も味な気分になって来たというわけだ。ねえ師匠は人の前で腹を出して見せたことは無いかい」

「馬鹿におしでないよ。狸じゃあるまいし、見せるわけが無いだろう」

「そりやそうだな。でもなかなかぼっちゃりとして、臍の形がいいと、留の奴が言ってたぜ。留と師匠、出来てるんじゃないか」

「おおいやだ。留なんぞにこの玉の肌を見せやしないよ。行水でもしてる所をのぞいたのかしら。今度のぞいたら、湯をぶっかけて目の玉を洗濯してやるからと、そう言つてくがいい」

「一体、これから腹を切ろうって時に、乙な気分になれるものかねエ。師匠も女なら、その気持が解るかい」

「さあー同じ女でも私のような者と、身分ある奥方じゃ一つにはならなからうしね。でも、検分の大將がサ、ちよいと男前できりりと苦味ばした渋い男。お供の小姓が役者のような前髪置いた色若衆。そういう前でサ、こうお乳からお臍の下までむき出した姿を、じっと見られたら、心は切腹に固くなつていても、体は又別ものだから、あそこだつて―おや、いやだねエ、私になにを言はすのサ」

「は、は、師匠の顔が赤くなつたゾ。とんと色っぽくてこりや―」

「ぶつよ。それより早く話の方を―」

「おおそうよ。そこで、奥方気を取り直し、

双手に腹切刀を握りしめ、えいと気合もろ共腹に突き入れた」

「とうとうやったか」

「ぶすつとばかりに氷の刃、腹に突立てぐいぐいと、腹中深く貫けば、痛苦の程はすさまじく、思はずもらす呻き声、唇かんでこらえつつ、ぎりぎりぎり引回す」

「さぞ痛かったろうナ」

「でもネ、いざとなると女は男よりよっぽどがまん強いよ。なにしろお産の時には、障子の機がかすんで見えなくなる程の苦しみだというじゃないか。それでもしんぼうして、女は子供を産むのだからね」

「おや、師匠は子を産んだことがあるのか」

「よしとくれ、これでも私や一人者だよ。牢屋で責められると、男は案外だらしなくすぐ白状するが、女の方がしぶとくって手こずるって、目明しの旦那の話だよ」

「しかし、女の体は脂づいて厚く、刀の切味も鈍るっていうぜ。女盛りの師匠の腹はどうだい。簡単には切れなからう」

「うるさいねエ。好いた人と心中する時にや、切腹して見せるから心配おしでない」

「こりやすごい。その時はこの熊五郎、検分役を仕る。さて、臍下一寸、豊に張った下

腹をぶりりぶりりと切り回せば、さっと飛び散る紅の、血汐に赤く白無垢は、色染め変えて妖しくも、げに美しき姿なり。女の腹切り凄さまじく、うーむ、むむっと呻声、髪ふり乱し身もだえる、美女切腹のそのさまは、想う殿ごと睦つごとの、よがり姿に似たりける」

「よう、いいぞ」

「やだねエ」

「七寸余り一文字、見事に切りし刃をば、さっと引きぬき鳩尾へ、再び深く突き立てて、ぐいと押し下げまっ二つ、臍断ち割って十文字、女の切腹仕遂げたり。から紅にまみれたる、己が腹をばにっこりと、笑みをうかべてうち見やり、いざ見たまえよ十文字、女の遂げし切腹を、検分あれと呼ばはって、ぐいと腹を押出せば、如何でたまろう十文字、切口がばと縦横に、広く開いて流れ出す、血汐と共にずるずると、細そわた太わた溢れ出し、五臓六腑に子袋まで、残らずのぞく切腹の、げに見事なる眺めなり」

「さすが大名の奥方だね」

「石見守さま女腹切り由来の一席先はこれ迄」

「なる程それで子供の命が助って、それが今の石見さまの御先祖というわけなのネ」

「そうよ。切腹見事にされた奥方は、介錯を受けられ、お首を大将に渡されて一件落着だ」

「それにしてもその大将、残念だったろうな。如何に美人でも、はらわた喰み出し、体と首と別になつては抱きようもないテ」

「でも奥方は満足だったろうネ。見事に切してサ、子供が助ったのだから安心して往生出来たということだもの」

「だろうナ。だがどうだい、師匠なんざ氷の刃で痛い腹を切るより、熱い逸物であそこを貫けて往生する方が望む所じゃねえかい」

「そりやその方が、極楽往生確かだわネ。ほ、ほ、ほ」

「ハ、ハ、ハ……」

江戸下町の居酒屋の片隅、天下泰平の時が流れます。

(二)

噂の石見守下屋敷では、その噂の通り刺青腰元の切腹が行はれようとしています。庭前に設けられた切腹の場に、白無垢姿の腰元が着座し、老女より中渡しを受けようとしています。庭に臨む広縁には御隠居の極道さま以下、下屋敷の奥女中が同輩の切腹を見守って

います。老女初音が進み出て、御隠居に一礼し向き直り沙汰書を読み上げます。

「先代石見守さま付、龍、その方儀先頃御遠祖法要の席をも、ばかり刃傷に及びし事不届の至り、これに依て家法により、切腹申し付くるもの也」

日頃刺青腰元の噂が江戸中の評判なのを心よからず思っている上屋敷の腰元と、法要の席で争いが起り、龍の創が上屋敷の腰元を傷つけ、それが為にその腰元が死去してしまいました。喧嘩両成敗は武家の習い。龍は既に覚悟の事とて、

「切腹のお申し付けありがたくお受け仕りまする」

と、さわやかに頭を下げます。腹切刀を置いた三方がお龍の前に据えられ、介錯役の刀腰元が大刀を構え、用意は終り後はお龍の動きを待つのみ、緊張の気が満ちて来ます。冷く輝く腹切刀を見つめていたお龍が

「今生の名残りに一さし舞いとうございませ。何とぞお許しを」

と、初音に申し出ました。思はぬ言葉に初音は御隠居を伺います。

「面白かろう。心よう舞うてから心残りの見事腹切るがよいぞ」

「かたじけのうございませる」

御隠居の許しに、つと立上ったお龍は、よく澄んだ声で

年々に人こそ旧りてなき世なれ」と白無垢を裾を翻し、死の座を舞台に舞い初めました。ふと緊張した気が緩み、死を前に乱れも見せぬ舞姿に居並ぶ者の目が集まります。

色も香も変らぬ宿の花ざかり

さす手引く手も優しく舞いながらお龍の手が白無垢の帯にかかり、結び目を解いてゆきます。

た小見はやさんとばかりに又めぐりきて

するすると体に巻いた帯を解きたぐりよせ小車の我とうき世にあり明けの

さつ、と後ろへ投げ

つきぬやうらみなるらむ よしそれとて

も

はらりとだけた白無垢を肩をすぼめて脱ぎ落しました。はっと目を見開く一同の前に、うすもの一つを身に着けただけの姿となったお龍は、艶然と笑みをうかべ

春の夜の夢のうちなる夢なれや

と舞い続けます。うすもの越しに、その名

に因んだ龍の刺青が見え、盛上った両の乳房、円やかな腹、豊かな臀、そしてほのかな股間のかげりまで、舞う毎にうねり伸び縮み、

時には鮮に、時にはおぼろに見え隠れして、時ならぬ妖しう艶めいた気が、切腹の場に漂います。ほーっというような吐息が女中達の間からもれます。

夢のうちなる夢なれや

二度繰返し、正面向いてびたりと形を決めて舞い収めました。

「見事、よう舞うた」

御隠居の声に一礼したお龍は座り直すと「おかげさまにて心易らいでございませ。

では、これより切腹いたしまする」

と言うや、うすものをかきしつろげすっぽりと脱ぎ落しました。ぱっとうすもの越しに見えていた刺青が露にむき出されます。臀の凹みの辺りから登り龍が雲を巻いて立上り、背中から肩ごしに前に回り、龍の頭が胸から腹にかけて彫られ、龍の爪が乳房をつかみ、臍を中心に描かれた宝珠を口にくわえた、見事な龍の彫もののさまに、見る者は只感歎するのみです。己が刺青姿を誇るように笑みをうかべたお龍は、うすものをとめた腰紐を太ももの際近く迄低くずらして締め直し、ぐいと前を押し下げました。かげりののぞくかと思はれる程存分に露になった己が腹を愛しむように両手を傍腹に当て、しぼるように押すと腹がせり出し、臍に描かれた宝珠が縦長に

伸びます。三方を引きよせ短刀を取上げ、添えられた白布で刃を巻き、腹切刀にしつらえで行くさまに、刺青に心を奪はれていた一同の者は、改めてこの刺青美女が腹を切つて果てる身であることに心を冷やし、新らたな思いで切腹の仕度をするお龍に目を注ぎます。二寸余り白刃をのぞかせた腹切刀右手に取り、左手で三方を後ろへ回すと、下腹を静に押し撫でます。息づきと腹を撫でる手に、刺青の龍の動き、己が主の切腹に憤るかのように見えます。介錯の刀腰元がお龍の斜め後ろに立ち、八双に刀を構えるときすがに厳しい気配となります。お龍は左手を左腰に当て、右手に取った腹切刀の切先を左傍腹に向け、軽く目を閉じ氣息を整えにかかります。乳房が固く張り乳首がつんと立って、心の昂ぶりを示します。

「では、おさらばにございまする」

と一礼し、大きく息を吸いぐうーと腹がせり出すと見えた時

うむっ

低く強い気合をかけ刃を腹に突立てました。鋭い鋼の刃をやわらかな女の腹が受けとめ深く凹むのを、そのまま右へすつと引くとーぶしゅっ、微な音と共にすつと切先が腹の肉を喰みました。一瞬お龍の眉間にしわがより唇

が歪みます。見つめる者は拳を固く握りお龍の下腹に目を向けます。ゆすりこむように力をこめて腹切刀を押すと、凹んだ腹が元へ戻り、二寸余り出ていた白刃はすっかり腹の中に吞まれていました。とうと腹を——女の切腹が今確に——居並ぶ者の胸も高鳴ります。お龍の顔から血の気が消え、唇の紅が極立って鮮やかです。口をぎゅっと結び、正面を見据え、全身の力で腹切刀を右へ引くと、刃に押されて腹の皮肉も右へより、臍が少しよじれますが分厚い女の腹は刃の動きを阻みます。

ムム ムツ むうーっ

鼻息も荒く刃を引くと

ぷりりっ、不気味な音がしてついに腹が割けました。顔に脂汗の滲みが光り、痛苦耐えるお龍のさまに、見る者の目も血走り自分も切腹しているかのように身を強はばらせ、中にはたまらず顔を伏せてしまう者もいます

ウツ ウツ うむ むっ むうー

呻きとも吐息ともつかぬ声。ぶしゅっ、ぶりっ、厚い布地を割くような腹の皮肉が切られてゆく音、ひたひたと暗い死のかげりが一同をも包んでゆくような心地に、心も氷る思いです。一寸、二寸、少しづつ伸びてゆく切口から血汐が滴り下腹を朱に染めてゆきます。にまくれた腹の切口は脂づいた若い女の厚

い腹のさまを見せ、滲み出る血汐を弾じがて妖しく光って見えます。臍の下辺りまで引回すと一息ついて、お龍は己が切腹の切口を見えていましたが、腹の弾力に押され少し浮上りかかった刃を、ぐぐっと深く突き入れ、

きえーっ、叫ぶような気合もろ共ぎりぎり一息に腹切刀を引回しました。ぱっと血がしぶき、朱く太い筋となって右傍腹迄切口が伸びました。刃を右傍腹に突入れたまま、ぶると体をふるわせ、面をのけぞらして苦痛をこらえたお龍は、ぎりりと刃を上向けにこじり、うーんと大きく呻きながら鳩尾の方へ斜めに切上げて刃を腹からぬきました。血脂にまみれた腹切刀を横に置き、ひざに手をつき、がくがくとふるえる体を支えました。

ぐえっ……

しほするような呻声。ぶるる、と腹が波うつと、がばつと切口が口を開き、むくつと妖しい形のものが喰み出しました。お龍の臓腑をくわえるように、刺青の龍の口の辺りからぬめぬめとしたほそわたが垂れ下がります。苦痛をこらえ、うむ、と腹に力を入れると、刺青の龍の顔が歪みずりと更にはらわたを押し出します。

「ここの通り、せっ せっ ぶく とげでござり まする——」

息を継ぎつぎ切腹遂げた事を告げるお龍の面は蒼白く、凄艶な美しさをたたえています。細面のお龍の顔が、さながら龍そのままの如くにさえ思えます。

「見事。よういたしたぞ。侍にも仲々のまことの切腹。女の身でよういたした。天晴れじゃ」

御隠居は己が 愛の刺青腰元の、覚悟の程に感服の極みです。

「あ ありがたく 存じまする。心地よう存分に 腹切って うれしく——い いざ 介錯 下されませ」

お龍は体を少し前にかがめ首を伸ばします。

介錯に備え予らかじめ高く髪を結び、すんなりとしたうなじを充分に見せています。一筋二筋はちりとかかった遅れ毛が白い顎筋に艶めかしさを見せています。刀腰元の手にした大刀が高く上ると、見守る女中達の中から、南無阿弥陀仏と える声がもれます。

「か 介錯——」

思い切るようにお龍が叫び、ぞろっと太わが溢れ出たせつな、きうり、刃が輝きました。ばしゃっ——濡れ手ぬぐいをはたくような音がして、ガクッとお龍の首が折れるようにうつむくと、ビュッ、ビュッ、と勢よく血柱が噴上ります。ビクッとお龍の体がのけぞ

りかかりましたが、皮一枚残して抱き首に打落された、己が首の重みに引きずられるように、どっと前にのめり倒れました。皮一枚でつながった首がねじしるように横向き、両肩で体を支え、つき上げた臀がうすもの越しに円ろく張って、亡骸となった今も女体の美しさを偲ばせています。刀腰元が差し添えの脇差しで残った皮を切り離し、検視に供えるお龍の面は、に口がほころび、半眼に見開いた目は輝きを失っていますが、存分に仕遂げた切腹に満足して介錯を受けたさまを見せています。蠟色に変わった肌に刺青のみが生まなましく変らぬさまを止めているのが憐れをさそいました。



挿絵画家求む！

本誌の小説、読者投稿作品、文献資料などに応しい挿絵を求めています。リアルなもの、イメージふうなものなど、独創的な画風を歓迎します。

- (1) ペン、筆、鉛筆
- (2) ケント紙、画用紙、和紙。
- (3) サイズ

タテ描き——本誌——ページ大。

ヨコ描き——本誌1/2ページ大。

優秀な作品は本誌に掲載、次号より原稿を依頼するほか、他誌にも紹介、推選します。

○画料・一枚三千円

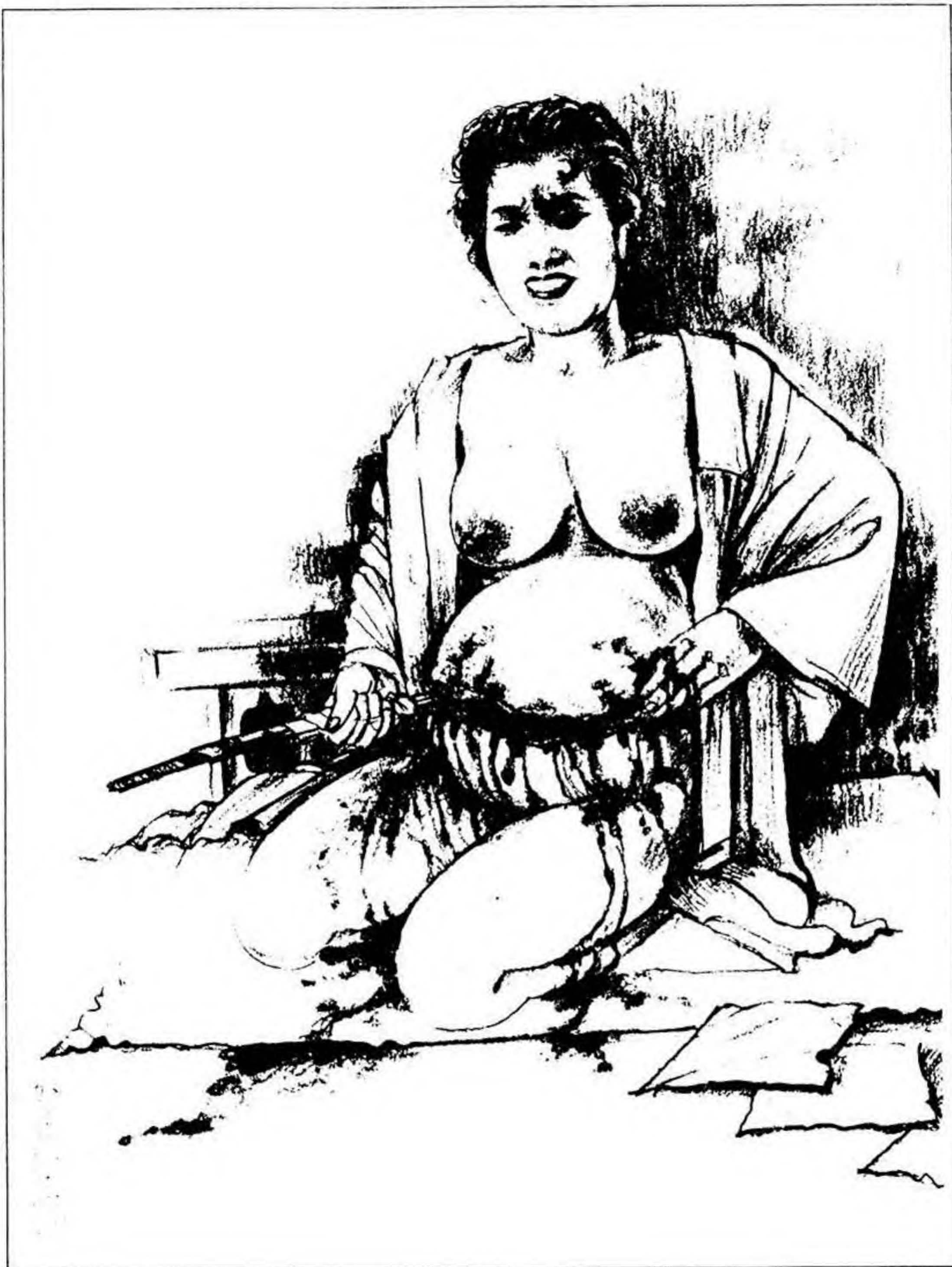
そのほか、カットも求めています。奮ってご応募ください。

〈宛先〉

現代芸術研究会・編集室

※郵送中に破損することがあるの
で包装にご注意ください。

鞘 和彦 凄絶画譜！



デッサン

切腹考証

切腹の実相

三富浩生

舞台や映像の切腹は形式で見せるからカッ

コよく、悲愴美を表現する。しかし現実には切腹を見た人や切腹未遂の人からきいたり、読んだりすると、介錯のあった昔は知らず、太平洋戦争当時、みずから腹を切るだけで死なねばならなかった人人の様相は、壮烈悲愴のきわみである。真一文字・正十文字などの形式を教わったわけでもない開拓団の娘たちなどが、腹を切りおおせることだけを念じて、腹切刀でもない鎌や短刀か包丁で腹を切ったありさまは全くいたまじさをきわめている。

少し例を挙げると、開拓団の22才と20才の姉妹が、互いに苦悶の状を見まいとしてであろう、板戸をへだてて同音に割腹した。妹は出刃包丁で臍の下を真一文字に切ったのち、臍の右脇を鳩尾から右股の付け根へ切り下げて絶命。姉は鎌で同じく臍下を真一文字に切ったのち、来合わせた娘仲間の手をかりて、鎌を右股の付け根に突き刺し、鳩尾の方へか

き切り上げて絶命。初一念を貫いている。

樺太では年令不詳であるが、砲撃でこわれた家の台所で、若い娘が全裸のまま、出刃包丁の柄に濡れ手拭いを巻きつけ、血すべりとめておいて割腹した。沈着と言う他ない。

上海では暴徒に拉致された17才の娘が「母や弟妹の命に代えて腹を切りはらわたをつかみ出してみせろ」と強要され涙ながらにキツパリ承諾した。案内されて切先四寸巻き残した軍刀の前に坐ると、腕も胸も動悸でふるえて容易に突き立たない刃を、やがて腹が丸くなるほど力を込め、プツリと二寸ほど突き刺し、体を左へ刃を右へとひねりながら、真一文字に右脇までかき切り、両手で腹の両側を押して、あふれるはらわたと共に伏した。

満洲の林の中で暴徒に襲われた22才の娘とその妹は、抵抗むなしく肌もあらわになるほど衣服が裂けると、ここで死のうと言いな

ら、姉は立ち木に寄りかかり、短刀をふりかぶりさま腹に突き刺し、キリキリと臍の下を真一文字にかき切った。あふれ垂れるはらわたを左腕で支えながらである。彼女はそれでもみごとに立ち腹切って果てた。妹は今ならローティーンの年令だったようだが、同じく短刀で臍下を真一文字に立ち腹切ったのち、鳩尾へ刺して十文字に切り下げようとして力尽き、倒れたという。無念さが偲ばれる。

これらがみな20才前後の娘たちのしとげた切腹である。ピストルで心臓を射ち損じた將軍もいた時代に、である。なお田谷敬生氏も論じておられたが、臍の一―二寸下をかき切った例が多いのは、やはり刀をあやつるとき肱の角度が直角になって、最も力が入れ易く柔らかい腹を非力な女性でもみずからかき切り易いのであろう。鎌で切り上げる例も、柄と刃の角度から、縦は上へ引き易からう。

レスポスの園 7

結城紀子

私と純子との初体験は、意外に早くやってきました。

失踪していた母が戻ってきたのは、私が同じ学園の高等部へ入学して間もない頃で、母が戻る経路などについて、私は父から何も聞かされず、ただ、淳子先生と母が逃避行に疲れたらしいということは、子供心にも感じていました。母が泣いて私に詫びたこと、父と母との間に派手な立廻りがあって、母の顔が青く膨れあがっているのを目撃したことなどその当時の記憶はかなり鮮明に覚えていますが、この手記はそうした修羅場を描くことが目的ではないのでやめます。ただ、何年か後になって、私が淳子先生と再会して、私と淳子先生との間に官能の炎が燃えあがり、母娘ともに愛されるという異常な体験を経ていった時、淳子先生の口から、母との逃避行の頃の興味深いお話を聞かされたことについては、いつか書こうと思っています。ともあれ、私が母娘二代にわたり、レスの世界の住人とな

った第一歩は、何と言っても純子との体験が最初ですので、今日はそのことを書きます。

高等部でも同じクラスで、純子との親密さは増すばかり。お互いの家へ泊りに行き、いっしょにお風呂に入り、私よりも、アンダーヘアの生え方が少し早く、そして濃密な感じの純子、薄くて、ワレメのはっきり見える私がお互いのその部分を見つめ合って、個人差を観察したり、年の割に豊かな乳房の私、まだほんの少し、それも固い盛りあがりしか見せていない純子のそれをお互いの指先で確かめ合ったり、S的な気分は、次第に性と肉体への興味に集中していくようになりました。

純子の家に泊った、夏休みの一日です。レスの体質というものは、ホモでも同じでしょうが、私にはもって生まれた資質という気がしてなりません。だって、純子にしても、私にしても、特に衝撃的な出来事があったとか例えれば小説によく出てくるような、お互いの関係が肉体関係にすすむきっかけになるような、突然の衝動とかひらめきとかがあったわけではなく、知り合って親密になり、時が経ち、ごく自然に結ばれたとしか言いようがないのです。だから、もともとが二人共、レス体質だったのでしょう。ボーイッシュな純子がタチ、私がネコという図式は確かにありま

したが、純子のベッドで、いつものように、おやすみなさいのキッスをしていたら、どちらからともなく、ごく自然に腕をお互いの身体にからませていき、眼を見つめ合って、乳房へ指先を這わせながら、暗黙のうちに、

「今夜を私達の初めての夜にしようね」

と了解し合っていたのです。純子の指は私のパジャマを脱がせ、一枚の残った下着も外し、純子は自分で全裸になって、しばらくはお互いのヌードを鑑賞しました。お風呂場で見せ合うのは慣れていても、ベッドの上では初めて。私の両の手はアンダーヘアを被い隠そうとしています。純子は、私の予測と違って、いきなりその私の手を払うと、顔ごとぶつけるように、私のワレメへ突進してきたのです。

「紀子、あんたのここ、私にちょうだい」
そう叫ぶと、もうめっちゃめっちゃに、噛んだりめたりです。お互いにオナニーは体験していましたが、自分以外の人の触れるのは初めての経験。私もただめくら減法、純子のその部分に指を這わせて、もみくちゃにしてみました。ヌルヌルした感触。でも、まだ二人とも、その肉壁を分けて、処女の証しにまで指をのばそうとはしませんでした。

魔泉の宿 前篇

湯の街も金詰で四苦八苦であった。

新聞に広告を出すと税務署からにらまれ、儲けもしない腹をさぐられた。そこできれいどころを揃へて色街を復興したが、やっぱり駄目で借金がかさむばかりであった。街の裏にある神様に、街の顔役が集って祈願した。一年たっても何のきゝめもあらはれず、神宮だけが儲けた。

街全体が金／＼金／＼と血眼になっているとき、そんなことにおかまいなしに経営を続けてゐる春乃家といふ旅館があった。美しい女将、美しい娘、そして美しい女中が大勢ゐて、こゝだけが不思議に繁昌してゐた。その秘密をさぐるべく、私はスパイとして春乃家に送られたのである。私も金欠病で

ピイピイしてゐたから、この役目を喜んで引受けたのである。

この春乃家には伊東安夫という男が住んでゐた。あとで知ったが、彼のその巨大な××と野性的な性的技巧は、それとなく色街の女達にも知られてゐた。亭主でもなく下男でもなく番頭でもない妙な男であつた。春乃家の美しい女将は、精力的といふよりあまり肥りすぎてゐた。そのはちきれるやうな欲望は、夫なきあと更に拍車をかけられて、空閨の淋しさを感じてゐたらしい。といふのは彼女はその好色のため夫を五人も替へたが、どの男も彼女の役に立つことはなかった。彼女の財産を目当に来る男がたくさんあつたが、ただ一回の××の勃起力テストで駄目になつてゐた。選ばれた五人は、その道にかけてかなりの自信とすぐれた道

具を持つてゐたにもかゝらず一年と続かずに逃げ出したり、病氣になつてのびてしまつたのである。彼女は客を片端からテストし、番頭をテストし、街の若い男をテストしたが、どれも満足できる男にはぶつつからなかつた。彼女はいつも男に飢え、無遠慮に男を漁つた。それが有名で春乃家だけは、いつも押すな押すなの満員続きで、金詰りの不況を知らなかつたといふわけである。

私もテストを受けたが、それは伏せてこの夜話を進めた方が面白い。

伊東安夫は能なしのなまけもので、小学校もロクすっぽ出てゐず、山の中でひとりで二十五までもターザンのやうな生活をしてゐた変り者である。彼がたまたま街へざるを売りに来て、女将のお目にとまつてテストされ、たう

たうこの街でブラブラ暮すやうになつた。つまり女将が自分の愛玩用として養ふことになったのである。私は三日間にその秘密をさぐり当てた。

女将は毎晩のやうに彼をよび出した。山男の彼もすっかり街の空気になれ、リーゼンススタイルで女将の前に立つて、彼女の顔をじろじろと眺めてゐる。名探偵の私はその一部始終を天井裏にひそんでうかがつてゐた。

「安夫さん、あたしのいふことをきかないとお前は山へ帰されてしまふよ、近頃ずいぶん遊んでるといふぢやないの？」

安夫は笑ふ、なかなかいゝ度胸である。

「さうしたら女将さんは、わしが誰としたといふんだね。わしだって我慢することが出来るよ。でもね女将さん、わしのはあまり太くて長いんで駄目なんだよ」

安夫は笑ひながら答へる。こゝで彼女はもうこれ以上、妬いたり体裁をつくることをしない。この男に逃げられずには切角のお楽しみがなくなつてしまふ。

「お前のいふ通りだね。なみの女ぢや出来っこない。あたしは今夜思ひきりお前を可愛がつてあげるよ」

と彼女はいふ。壁に耳あり、天井にスパイありだが、女将は御存じない。もっぱら急いで御座る。

「もうあたしたちの邪魔するものはない。ねえ、お前さあすぐに一番しようぢやない？」

彼女は派手なお召を着てゐる。広襟でも胸のところがなまめかしく開けてゐるので、一層彼女は肥つてみえる。

安夫は彼女の帯をとき着物を脱がせ、赤い柄の長襦袢一枚にする。

彼はかうした仕事にはもうなれてゐるらしい。女将は長襦袢一枚のしどけない姿で立つてゐる。伊達巻もとかれ、腰紐一本が彼女の豊満な肉体のこぼれ咲くのを防いでゐる。赤い海のやうに大きなおっぱいが、はだけた襟からはみ出してゐる。なまめかしくその両腕は肉付がよい。男のふとももほど肥つてゐる。どこもかしこもその割合に大きいのであるから、それをいちいち書きつらねる必要もあるまい。

安夫が女将をかるがると抱き上げて、

次の間の寢室に運ぶ。私も次の部屋の天井裏に移動したことはおわかりのことと思ふ、裾がはだけて真白い太い脚がみえる。その根本に本当の毛の原始林がある。安夫が布団の上に彼女を静かにねかせると、彼女は眼をつむつたまゝ、脚を開いてゐる。安夫は彼女の腰紐をほどき、おっぱいをやさしくもみはじめる。私はどこの男も同じやうなことをするものだと思つた。やがて女将の腹の肉がひくひくと動きはじめ、フンフン鼻で息をしながら腰をくねらす。膝を立てたまゝ、両股を開いてゐるので、原始林の中にこんこんと××の湧き出る一つの穴があらはれる。彼女の大まかなからだの外の部分にくらべると、大へんに小さくみえる××である。こんな可愛い××なら私も一ぺんテストされたくなつた。いろいろさぐりを入れてみると、女将のこの×が小さいといふので、これまた有名らしかった。そのために彼女は一層愉しみを増すのである。しかし、この×の快感地にとゞくのがなかなか困難だ。なぜかといふと、この巨大のやうな女にこよなき快樂を与へるに足るほど深く

××が×の奥深く入らねばならない。ところが彼女のおながが大きいために××が法外に長く伸びるものでなければならぬからだ。それかといって後から入れるも容易ではない。しかし前からするよりはるかに便利であろう。即ち彼女が枕を下へ敷いて、その助けをかりるときは、どうやら彼女を楽しくさせ喜びに狂はせることができるやうだ。そこで男たちはいつでも彼女の背に木にとまった蟬のようにへばりついて腰を使ったといふ話だ。しかし、それは男にとって嬉しい芸当ではなかった。かつ多くの男がこれでは満足出来ない。ところが安夫は正々堂々と正面からいどむ業物を持ってゐる。目測で計ってみると、長さ二十五センチ、囲りが二十センチ、想像出来ない超人的××で馬に近いしろものである。

私には驚きのあまりさうに見えた。

誰もがするように、彼は、女将の××をくじり、××を愛撫して、原始林が彼女の××でぐっしよりぬれるまで前戯をつづけた。女将はハアハアとすでは荒い吐息を鼻からもらしてゐる。彼の××はやおら頭をもたげてゐる。

すると彼は顔を丁度広くひろげられた両股の中へ入れて×の前へ近づけた。そこで彼はかのたくみな舌を使って更に強く愛戯をつづける。いやはや他人のかうした情交を見るものぢやない。

彼は幾人も男を悩ました好色なこの×の奥深くふれるやう、そして特に最も敏感な××を刺戟することにつとめたので、この女将がフウフウとあえぎはじめたのも無理はない。彼女のおっぱいは、はげしく波打ち、彼女は布団の上でからだを前の方へのり出して、安夫の巨大な××の侵入するにいややうな姿勢をとった。数分後には彼の顔は×から出た××でベトベトになった。それでも彼はたゞこの女を事務的に取扱つてゐた。この事務を満足にすませば金が貰はるのである。まことにうらやましい仕事もあった。

女将がよがり出す迄にはかなりの時間がかゝる。それに十分×を大きく開かせ、ドロドロにしておかないと、彼の大きな××は容易に入るまい。「お前、もう我慢ができぬから、早く×れてよ。」

と彼女は叫んだ。安夫は笑つて前の

の方へ四つんばいになつて行つて、彼女の腹の上に乗った。彼女は両腕をひろげて彼をつかんでかゝへた。さうしながら、彼女は腕をのばして彼の××をしごきはじめる。彼女の唇は彼の唇に吸いついてゐる。彼も彼女の舌を強く抜けるほど吸いながら息を切らしはじめてゐた。××は大きく脈うつて十分の長さで固さを持つて来た。

「腰に枕を――」

彼はいはれた通りにしてやった。彼はこのあふむけにねてゐる女の腰の下に枕を押し込んでやると、それから彼女の両足を肩へのせて、彼の二十五センチの××をやつとのこと×れよくなつた×へ押し込んでやった。

悲鳴に似た声が女将の口からもれた。彼の前にはすっかり裸になつた、はりきつたおっぱいが波打つてゐた。彼はそのおっぱいを両手でいたいほどつかんで握りしめた。しかしこの好色な女将は、それは大してこたへないやうだ。彼女の全身の感じは××にあった。いたいやうな、快いやうな、何ともいへない感覚が××にたゞよつて彼女は酔つてゐた。この巨大な男根が次第次第

に彼女の×の中に姿を没して、安夫が強く二三度突き上げたときには、彼女はすでに第一回の気がいきはじめて、うづく快感のためにスウスウとはげしくあへいでゐた。

それだけに彼が突然に、××を引き抜いてしまったときには、彼女は驚いて飛びあがった。

「どうしたの？ お前。」

彼女はあえぎあえぎいぶかしがった。

「意地悪しないで、さあ、やっておくれ！ もっとね！」

「へい、いけねえ、あなたがわしにあることをお許し下せえますまでは。」

「どうしようといふのかい。いやよ、途中でやめたりして、今夜は二千元あげよう」

「もうそれは沢山だす。わしはお金なら数へきれないほど稼ぎためましただ」

「ぢや一体なにがほしいの？」

「女将さんには美しい娘さんが二人いるね。」

「お前なにをいってるの。あたしはね——」

「ではやめにすべえ。」

「あたしは三千元払ってあげるよ。」

「山男のわしに金はいらねえよ。」

彼は女将の腰の上から横にすべり落ちた。将にいかんとする前、彼女にはひどすぎる仕様である。彼女は充血する眼で妙ちきりんな事をする安夫をにらみつけた。

「あたしの×は熱くほてってゐる。」と彼女はつぶやいた。

「あたしはこの×を冷やしてくれる男がほしい。でも、私は自分の娘を取り持つやうなパン助ぢやないわよ。」

「パン助といふのは女将さん、金をもらって自分では金を出さない女ですぜ」

「あゝ、このろくでなしめ！」

「女将さんは、わしの来る前は、番頭さんとも、見知らぬお客さんともおやりだといふぢやねえか。しかし今では女将さん、このわしが御入用なんだからせう。ほかにはもう男はゐますまいからねえ。女将さん、わしがあなたとお嬢さん二人とって御満足だなどといふ御心配は御無用でござえますだよ。」

「ではお前は、あの娘たち二人を一所にしようといふの？ そしてあたしたちを順番に？」

外の者はぼかんとみてゐなければならぬことになるぢや

ない？」

「さようでございますだよ。女将さんのおっしゃる通りだ。ですが母親がやってもらつてゐて、それを娘がみており、またその反対に娘のとき母親がやってもらつてゐて、それを娘がみており、またその反対に娘のとき母親がみてゐるなんて、とってもすばらしい遊びぢやございませんかよ。」

「出ておいき！」

女将は烈火の如く怒って叫んだ。安夫はぬれた××をふいて、パンツをはきズボンに足を通して立ちあがった。そこで彼女はその男が本気で出て行くのだといふことを知った。

「お待ち！」

と彼女はよびかけた。その声に彼が立ち止まったとき、彼女は言葉をつづけた。

「娘の代りに二人の女中を上げよう。」

「わしはもうとつくに二人共やってしまいましたが。あの女たちも一所に見物させてやりますだよ。」

とこの山男は笑った。これには流石の女将もギョツとなつて色を失った。彼女は口をつぐんでしまった。

「わしは十人の女を相手にして一度にやることができるだよ、どの女にも甲乙なく損得ねえやうに。」

私の調べたところによると、彼は色街の女たちと試みたことがあったそう。十人の女を並べ、つぎつぎと氣をいかしてやることは尋常ではない。普通の男なら一人目の女をいかす寸前に参ってしまひ、強い男でも三人まではいかせしようが、己の快感にたへか氣をやれば、四人目からの芸当は休まない限りちよつと困難であらう。かりに一人の女に十分間づつサービスしたとして、十人目まで役目を果すまでには、一時間と四十分わゝる。一人残らず完全に氣をいかしたといふからには、それは凄い力の持主である。

「あたしの娘たちは、まだ処女なんだよ。」

「どうですかね。がしかし、温い×だけは親ゆづりぢやねえかよ。」

教養のない山男は、実もふたもないことをあけすけにいつてしまふ。女将は今までの興奮はきれいにさめきつて、再びどなりそうになったが、彼女にはある考へが浮んだので止めた。どんな

考へが浮んだか、天井裏の私にわかるはずがない。

それから数日の間、何事もなかったが、やがて女将の考へた計画を実演する日がきたらしい。その日の昼間のこと、二人の娘は女中の真理子にいはれた通り三階の布団部屋で安夫の訪れるのを待つてゐた。二人の娘たちはどんな面白いことが起るか、いろいろな想像しては話し合つてゐるところに、安夫がやつてきた。姉の美津江は待ちあぐんでゐたかのやうに積んだ布団から飛び下りた。そのはずみに布団の山がくづれたら、私のかくれてゐることがわかつてしまふのでひやりとした。

「安夫さんなによ、世の中で一番愉快なことって？」

とせき込むやうに姉娘は尋ねた。安夫は上衣のポケットから舶来タバコをおもむろに取り出すと、その一本を口にして、

「お嬢さん、そんなにせかなくてもゆつくりお話しませう。」

と、美津江を抱へるやうにして積んだ布団に掛けさせ、姉よりもむしろ大きな、母親によく似て張切れるやうに

肥えた肉感的な妹の恵美子を顧りみて、
「今日のお話は、二人一所でなくて一人づつでないと具合が悪いんだよ。」

といひながら姉の美津江をふりむいた。そして言葉をつゞけて、
「美津ちゃんはいくら遊んでいらつしやい。あとでゆつくり遊んであげよう。」

といった。美津江はいかにも不服さうであつたが、
「ではなるだけ早くね。」

と仕方なく部屋を出た。二人娘とするときは、姉の方からせにやならぬ、といふ唄の文句と反対だ。二人きりになった彼は、恵美子を軽く抱いが膝の上に乗せた。そして彼女のかたく張り切った胸をそつともんでやった。彼女はかすかにからだをふるはせて、
「なによ安夫さん、面白いお話って？」
とせがんだ。

「お嬢さん、今日のお話はね、お嬢さんの美しいものをみんな楽しんでしまふことだよ。」

といつて、早くも彼女のスカートをはずしてしまつた。彼女は恥かしさのために耳まで赤くして、と書くと、こ

れは暗くてはつきりしないのでわからないのであるが、大方生娘なら赤くなるにきまつてゐる。

「いやよ、なにすんのよ、よしてよ。」

とからだをくねらせて脚をバタバタさせたが、そのとき彼の手は巧くみに彼女のズロースを脱がせて、××にふれてゐた。そしてその可愛い××を、彼の巧妙な太い指がふさいでしまったのである。

「お嬢さん、これからとても楽しい世界が訪れてくれるよ。」

と、山男にしてはうまい文句をいひながら、なほも指の活動を続ける頃には、彼女は早くも××をぬらして、ピチャピチャと音を立て、夢を追ふやうなうつろ瞳を彼の肩越しに投げてゐた。やがて彼は彼女を布団の上に寝かせて、自分もズボンを脱いでたくましい××を握り、彼女の上に馬乗りになった。二、三回突いては見たが、とても中まで×れることは困難であつた。だが処女の彼女に快感を与へたことは、その××の流れと、盛んに動かす腰の運動によってわかつた。やがて彼がその×の入口でウウンとうめきながら×

×したとき、彼女の両腕は彼の背中をいやといふほど締付けてゐた。そして終つても彼を離さうとはしなかつた。

「ねえ安夫さん、もう一ぺん、お願いよ。今度は中へずっと××るかも知れないわよ。」

といったところに足音がしたので、もとの姿勢にかへつた。それは姉の美津江であつた。

「安夫さん、まだなの？」

といひながら部屋に入つて来た。恵美子は思はぬところに邪魔が入つたので顔をしかめた。

「ぢや恵美ちゃんは、美津ちゃんと交代だ。」

と、スカートををはかして恵美子を抱へたまゝ、部屋の外に出し、

「ぢや、しばらくね。」

と肩をたゝいて廊下へ送り出した。

彼女は、股の間に丸太でもはさまつたやうな気がしてならなかつた。そして、意味ありげな微笑をのこして姉と交替した。姉娘を迎へた彼は、さっきと同じやうに積みかさねた布団の上に腰かけさせて、自分もその横に腰を下し、「では楽しい遊びを教へよう。」

と彼女を抱きよせ、上衣のボタンを外して、

「恵美ちゃんのおっぱいはとってもきれいだつたよ。でもあんたのお乳はもっと美しくてすばらしい。あゝ、そして前には――」

といひながら、美津江の乳房をさすり腰のあたりをなで廻しながら、彼女は彼女のスカートと一緒にズロースまで押しさげて脱がせて、彼はゆっくりと美津江の××をつかむことができた。彼はまづこの××をよく眺めてゐるやうなことは今度はしなかつた。美津江の×も非常にせまかつたので、彼はたゞやっぱり入口のところまでしか×らなかつた。二人とも処女だから仕方ないことである。××のへりに大きくやはらかい××がこすりつけられる妙感に、彼女もまた鼻をならして下から突いてゐた。

彼女は腰をはげしく動かして持ち上げれば、上げるほど快感がたかまるので、彼の××を全部×の中へ×れてしまふとつとめたが、それは駄目だつた。彼がはげしく××したときには、その熱い精液の衝動にさそはれて起つた快

感のために気が遠くなりさうだった。彼女もまた彼を容易に離さうとはしなかった。

その時、恵美子がやって来た。

「ねえ、お姉さま、すてきではなかったこと？」

美津江は身を起さうかと思ったが、年の多いだけ厚かましいのでねたままであつた。

「私はあれを、私のへ×れられるか、実験してみたいわ、ねえ、安夫さん、×れてみて頂戴！ すっかり！」

安夫はそばに恵美子がゐたので、ここで×れては、恵美子へもサービスせねばならないのでよした。

「いけないよ。今夜きつと×れて上げるから、それまで待ちな。」

彼はそこに坐った。そして彼の側にかぐんでゐる娘たちの××をいぢつてやった。そして二人の娘たちにも自分の××をいぢらしたり、自分の乳首を吸はせたりした。間もなく三人ともだんだん気分がよくなつて気持よく××がほとばしり出た。彼女たちは、彼から流れ出て来たオネバのやうな白い熱

いドロドロした液を見て、目をみはつて驚いていろいろと質問を發した。これは精液といつて、これが出る時が男にとって一番気持のよいときであると、出来るだけやさしく答えてやつた。説明がすむと、したあとはかうして後始末するんだよと、脱ぎすてられたズロウスで娘たちの××をやさしく拭いてやつた。

彼女たちが腰をふらふらにして自分の部屋に帰ったとき、彼らは今夜また会ふ約束をして別れた。しかし娘たちは二人きりになると、お互に恥しくなつて顔を見ることができなかつた。そして二人ともお母さんが恐しかった。だが母親は、まさか娘たちがそんな危険な愉しい遊びをしたとは夢にも思つてゐなかつた。

新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、繩師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性には、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160 東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

株きたん社内

現代芸術研究会

魔泉の宿 後篇

女将は安夫に、夜の仕事をするために来るやうに命じた。すると彼はやつてきた。しかし、まづ彼は娘たちの部屋を訪問してから、女将の部屋にやつて来た。

その夜は客が全くない日といふより、旅館の休業日なので、洋間で内輪の慰安の宴会を開くことになってゐた。私は原稿書きといふ名目で滞在しているので、彼等の邪魔にはならなかった。安夫は女将の指図通り働いた。その間、二人の娘たちは着物にしようか、洋服にしようかとおつくりに一生懸命だった。彼女たちは白いはりきった乳がでるだけ裸になるやうに見える、イヴニングドレスを着ることにした。腕も肩も裸のドレスにした。

女将は一時安夫と仲たがひしたが、

すぐに彼が彼女に末だかつて味ったことのないやうな享樂をたびたび与へてくれたので、彼と仲直りしてしまつてゐた。そこで女将も娘たちに負けない大變なおめかしをして着物を着た。

女将のだぶだぶした巨大なおっぱいは、帯で締めつけられてしまつたが、それがまた息がつまりそうで快よかつた。帯さえとけば、すぐ半裸体になれるやう、着物の下には長襦袢をまとはなかつた。彼女は酒の出る席へはいつてもさういふ變な恰好をして出かけて、酔ふとすぐ男と寝た。そばにゐる強さうな男が、その相手をおほせつかつてゐた。

洋間の食卓にはすばらしい御馳走が運ばれてゐた。そこへ安夫は女主人を案内した。女将がその席へつかうとしたとき、彼は巧に彼女の着物の裾をまくり上げて、椅子にかけさせた。長い

テーブルクロスのため、露出した脚は見えなかつた。それから彼は娘たちをつれに出で行つた。彼女たちは彼を喜んで迎えた。目を輝して彼は彼女たちをみた。そして半裸体のドレスの脇から手を入れて、やさしく二人のおっぱいをなでてやった。私はカーテンのかげから、部屋の模様をうかがつてゐた。

「すばらしいことになるでせうよ」

と彼女はいつて、

「なにもこわがることはないわね」とつけ加へた。こつそりと後をつけて行くと、娘たちが母の前に出たときには、ちよつとの間ではあつたが真赤になつた。娘たちも物もいはずに自分の席についた。彼が彼女たちのドレスの裾を母と同じやうにまくり上げて、腰かけさせたときには、恥しくて更に真赤になつたが、彼のなすがまゝにされてゐた。娘たちは眼を上げることも

できなくなつて、自分たちの前へ出てゐるものを食べ始めた。

すると、そのとき入口のドアが開いて二人の女中が入つて来た。真理子と須磨子である。この二人の女中は、女将のお氣に入りであり、娘たちと大の仲よしでもあり、安夫に幾回となく犯され驚喜したことのある女たちで、好色の点では女将にひけを取らない強者であつた。芸物の着物をまとして、帯も締めず、帯の代りに小さいサロネエプロンを締めてゐた。真理の体格はがっちりしてゐた。そして彼女の巨大な乳房は、はりきつてかたくしまつてゐた。いくら先がとがつてゐたので、本当の乳が入つてゐる乳房のように見えた。彼女の腕や股は太くて丸かつた。おしりも偉大であつた。すべてが女将を少し小さくしたと思へばよい。これに反して須磨子の方は小娘のやうな着付をしてゐた。

「おいおい急いだ急いだ、わしはのどがかわいて仕方がない！」

まるで自分が主人であるかのやうに安夫は叫んだ。教育のない彼は、たゞ本能的に女五人を前にして、今宵は自

分が一番の大将であり、自分の腕一つで彼女たちが肉欲の享樂を十分に味ふことができるのであると、覺つてゐた。彼は娘たちと向ひあひ、女将の側に席を取つてゐた。私は洋間の戸棚の中にひそんでゐた。

真理子は彼の側へ歩みよつて酌をした。そのとき彼は無造作に彼女の大きなお尻をびしやりと平手でたゞいて、彼女のおっぱいをつねつてやつた。正面にゐた美津江も恵美子も目をあげることもできなかつた。だが、彼女たちの波打つてゐる胸は、いかに彼女たちがかくそうとも、あきらかに興奮してゐる証拠である。安夫が自分の杯を乾杯のために、娘たちの方へ差出したときには、娘たちは自分の杯をそれに打当てた。そして大急ぎで飲み干した娘たちは、まだ自分にくつついてはなれない恥しさをなくすために酔ひたかつたのである。強い燃えるやうな酒が体中に廻つてくると、娘たちの股の間がいやにむづかくなるのを覺えた。安夫が山で猿がさかりのついたとき、猿たちが好んで喰べる木の実のエッセンスを入れておいた、つまり強烈な淫薬

である。安夫は薬の効きめを見てとつて彼の椅子をいくらか前へおし出し、足を娘たちの方へ延ばしてやり、姉と妹に一本づつ公平にその大きな足の指で、二人の××をくじりはじめた。娘たちは股を開けたり、彼の足を両股で強くはさんだりしながら、彼の方へ身を出して来た。彼女たちは赤くなつたが、ほかの人には知れなかつた。やがて彼女たちはドロドロした××を流しはじめ、身ぶるいをしはじめた。彼女たちの母親は、もう薬がきいてずつと前から、じれて切望してゐた。彼女はたゞ機会を待つてゐただけである。ところが正面の娘たちがからだをくねらしたり、よぢらせたりして鼻息さへ荒くなつてゐるので、これは変だと思ひ、「お前たちはどうしたの？　なぜそんなに息づかひが荒いの？」

「なあに、酒が廻つたんだよ。」

と安夫が答へた。そしてとぼけた顔で、

「おい、須磨子おいで！　お前はおいしたから、お前のお尻をつねつてやる。」

この呼ばれた女は、彼のところへ行

って、彼の膝の上へからだを伏せた。
勿論、須磨子とて早く彼にいちごでも
らいたいのである。彼女は上気して顔
が真赤になってゐた。

「これでいゝや。皆さん御覧なさい」

彼は椅子とテーブルから離れて、ほ
かの人たちに見えるやうにしてやった。
そして須磨子の着物の裾をまくり上げ
た。彼女はノーパンツであったので、
実に魅力のある小さいお尻が丸裸にな
ってむき出された。

皆は彼のすることをじっとみていた。

彼はこの丸いお尻をなでたり、さすつ
たり、かみついたりした。そして細い
足の間へ両手をおしこんで無理にひろ
げた。×毛の間に赤い××が見えたの
で、一同はみな欲望を起して来た。

「あゝ、こゝにあるのは、これはなに
かい？ お前はここの小さな×を女将さ
んに見せようといふのかい。お前はズ
ロウスもはかないでだらしないよ。」

彼は彼女のお尻を二ツ三ツたゝいた。
お尻は少し赤みを帯びてきた。彼は更
に言葉を つづけた。

「なぜお前は×をこんなところに出し
てゐるのだ。」

「私はねえ——」

須磨子は興奮にあへいでゐた。

「この×の中へなにか×れたいのかい
？」

「まあ、恥しらずだろう、奥さま、さ
うではございませんか？」

女将はうなづいた。この戯れは彼女
は大変お気に召した。女将は自分の娘
どもがあるのも忘れてしまった。

「お前は どうして、そんな子供っぽい
×をしげしげ眺めてゐるの？」

と女将は安夫にさゝやいた。

「その娘は×のほかになにもないぢや
ないか。」

「だけどなかなかよいのだよ。」

と安夫は追従笑ひをしていった。

「お前は、今夜はその娘だけをやるの
ぢやあるまいね？」

「いや、この娘だけではないだが、ま
づ手はじめだね。」

「安夫、お前はさっさとこの家を出
ておいで！」

「はいはいわしは、どこへでも行きま
すだ。わしみたいな男はどこへ行つて
も大歓迎受けますだよ。」

すると女将は色を失つてあわてた。

この娘たちがこの山男になにか歎願す
るのを期待してゐた。でも安夫は平気
な顔で、前から仕組んだ計画によつて
すべてをやつてゐたのである。

「わしはまづ女将さんを、はがひじめ
にいたしあせう。もし女将さんがわし
のいふ通りのことをはさったら、二度
つづけざまにね。」

女将はさっきからすねてみたものゝ、
彼女の肉欲は催淫薬にあふれて自製の
できぬ発火点をさまよつて、早くなん
とかして貫ひたい欲情で一ぱいであつ
た。

「お前のいふことなどは、ほんとにロ
クなことぢやないわ。」

女将はいぶかしがつてゐる。

「とにかくやってみますだよ。」

女将はもう我慢できなかった。彼は
女将をなんの躊躇もなく自分のところ
にひきよせた。そのとき彼は一方の手
を持ってはげしく波打つてゐるおっぱ
いを着物のきれ口から引張り出した。
娘たちも女中たちも、このあさましい
女将の痴態にあきれたが、そのすさま
じい好色ぶりに圧倒されて、その情景
に吸ひつけられてしまつてゐた。

「美津江に恵美子や。」

と彼女はあえぎながら叫んだ。安夫は女将を膝の上に抱き上げ、すっかり露出されたおっぱいにはげしくかぶりつき吸ひ立てゝゐた。恥も外聞もない、女将はもう淫楽の鬼と化し、

「お前たちもこゝにおいで」

二人の娘たちは、母親の言葉に従った。娘たちは恥かしくて恥かしくて其の場を逃げ出したかったが、それよりこれからどんな光景が演出されるか、その好奇心の方が強く彼女たちの心をとらへた。赤くほてる顔をおさへて、ほんとの生娘でもあるやうに、娘たちははにかんでゐたが、そのからだのうちには恐いほど強烈な肉欲の情熱が燃えさかつてゐた。安夫に抱かれたまゝソファに運ばれた女将は、「お前たちもあたしのするのを見てその通りなさい。」

といって帯をといて丸裸になつて横になった。安夫の側にはこれも同じく丸裸の美しい真理子が腰かけてゐた。小さな須磨子はちよつとの間みえなくなつたが、よくみるとたゞ須磨子の足だけがみえてゐた。その足を安夫は両

腕の間へしつかりとはさんでゐた。真理子は今ちょうど安夫の猛り立った××をつかんで、まだほんとにせまい須磨子の×の中へ×れるやうにせつせとつとめてゐた。須磨子はその上半をソファの下に横たへて、ひじで身をさゝえてゐた。安夫は真理子のおっぱいをもてあそび、真理子は安夫の××をしながら、須磨子の×へ、須磨子の手は真理子の股の間に伸ばされて、三人三様の楽しみを与へ合つてゐた。一方、すぐその隣りでは女将と娘たちが同じやうな恰好で楽しみ合つてゐた。

男一人に、女五人の丸裸の肉体が、もみあふ妖しい雰囲気、誰も彼も次第に酔つてきた。間もなく安夫は娘たちの無類にふつくらと発育した太股をみるこゝろができた。彼は昼間、うす暗い布団部屋で見るこゝろでできなかった。楽しさを、今取り返すことができた。

真理子はせつせとこの硬い××を、自分の友の××の中へ差込んでゐた。安夫は次第に氣持よくなつて、非常に色欲に燃えてきた。そして彼の手は真理子のおっぱいをもう長い前からいぢりまはしてゐた。真理子も切なげにか

らだをくねらせて、息づかひ荒々しくして男の心をそゝるのであつた。

母娘の一組も佳境へつき進んでゐるらしく、興奮にのたうち廻り、快感にしばれ、ハアハアと肩で息をつきながら、もつと強い、もつとよいものを求めてうごめいてゐた。安夫はたまらなくなつてきて、自分から力をこめて強く須磨子の×へ××をつき込んだ。真理子をはねのけ、ソファの下の須磨子をおさへ込むと、須磨子は大きな声でハアアとうめいて、しつかりと彼の首に両腕をからめつけた。隣の娘たちは、そこでなにが起きたかを知つてゐたので、彼女たちはすっかり氣が狂つてしまった。女将も、娘たちも、真理子も度ギモを抜かれ、失心したやうになつて彼と須磨子のはげしい肉の営みを囲りに立ったまゝ、眺めてゐた。五六回××しすると、須磨子は悲鳴に似た声を立て、よがり××を×つてしまった。

ぬれた疲れを知らぬ××を××いた彼は、須磨子をつきこに倒したまゝにし、この二人の真赤に顔を染めてゐる乙女の前にやつて来た。そしていたるところを、肩から、胸から、腹から、

太股から、なめるようにして色欲にもえてなでまわした。娘たちは自分たちに加へられたことを恥辱と感じなくて、むしろ此の愛撫を喜んで迎えた。性の歓喜のために彼女たちのおっぱいは、ぶるぶるうちふるへて波打つてゐた。両股のつけねは、にじみわいた××にぬれて、光り輝いてゐた。

「すてきだ、わしはあなた方三人をみんな喜ばしてあげるだよ。わしはわしの約束を守る。それでまづ女将さんをはがひじめにしたい。それからあなた方の番だよ。さあ手伝つておくれよ。」

女将は安夫の一人の女を降参さしても、ピンとしてゐる硬い×をみたときには、嬉しさのあまり目を輝かした。そして彼の命によつて、上半身をソファの上に横にした。すると美津江と恵美子は母親の偉大な脚を一つずつ持上げて、腿の内にあるバラ色の破れ目を見えるやうにしなければならなかった。女将は欲望のためにひろく脚をひろげた。そして××はひくひくとけいれんしてゐた。彼はそこに拳のやうな××をあてがふと、下から上へ、上から下へとこすりつけた。じくじくと湧き出

る××に、安夫の××はヌルヌルして気持がよかった。女将は××が××にあたると身ぶるいをしてよがり、××ば××にのぞむと腰を持ち上げて××ようとおせつた。××は果てなく流れ湧き、×毛をぬらし、肛門へと流れて行った。

「ねえ、早く×れてよ!!」

と女将はうめいた。安夫は立ったままグイと××き込んだ。二人の娘は母親の片腕をしっかりと抱え、そのおっぱいにかじりついて、飢えた小犬のやうに吸ひはじめたり、腋の下に舌を入れてくすぐり出した。二人の女中はの持つてゐた脚を代つて両側より抱いたまゝ、腰のあたりや太股のあたりをなめたり、噛んだり、吸つたりしてくすぐった。女将はからだの自由がさかなかったが、動けるだけ動き、あばれられるだけあばれてよがり、声を立て、その快樂の強さを示した。

「もうくすぐるのはよして、ア、いゝ、もっと強く、もっと深く突いておくれ、ア、ア、ハアハアハア……」

と女将は夢中になつてしまった。四人の補助役の女たちはもう我慢できな

かった。興奮に燃え、みたされぬながらもうづく快さに××がジクジクと流れ出て、たまらないやるせなさに、彼女たちは押へ込んだ女将を責めた。るので、女将は息が止まるほどいゝ妙感に幾度もおそはれてはげしく×を×つた。さういう狂乱の裸女を見ながら、安夫は二回も×精してしまつた。×精のたび脳天を突き破る快美感に酔つたが、安夫の××は少しも疲れなかった。×れるとききしんだ×も、二回もたつぷりと安夫が×を×り、幾度も女将がもらしてゐるので、×は××にあふれてズボズボになつて、安夫に快感を与えなくなつてしまつた。彼が途中で×き出してしまつたとき、彼女は怒つて「やめちやいや、もっと××しておくれ!!」

と大声で叫んだ。しかし安夫は×いて椅子に腰かけた。すると真理子はすぐにぬれて湯名の立つてゐる××をきれいに拭くために彼の側にきた。すると美津江は、真理子の手からナプキンを奪つて、安夫の巨大な×をて健ねいにぬぐつてやつた。男のたくましく青筋立て、ある×を美津江が眺めたとき、

またそれについてゐる楽しみの力と液をみなぎらしてゐる大きなXをみたとき、美津江は氣もくるはんばかりになった。

二人の姉妹は、今度は自分たちへXれてくれとせがんだ。しかし、安夫は別のことを主張した。彼女たちは母親をすっかり片づけたテーブルの上ののせて、股をできるだけひろげさせて、そのXをブドー酒で洗ってやった。彼女たちがX×によれた女将のX×を清めてゐる間に、安夫は二人の娘のX×をつかんで、遂に彼女たちがX×X×まで刺戟した。

「安夫さん、どうぞ今度は私のへXれてね。私はもの狂ひ出しさうだわ」と美津江は歎願した。そして彼をジュータンの上に倒して、股をひろげて彼の上にのしかゝるやうな嬌態を示した。

しかし、彼は両腕で美津江を軽々と抱へて、高く持ち上げ、彼女の母親の上に向ひ合ひにかさねて、彼は自分の両手を両名の裸の波打つてゐる乳房の間に押込んで、一度に四つのおっぱいをいぢりながら、X×しばしの二十五

センチの堂々たるX×を美津江のX×にあてがった。なかなか中へはきしんでXりさうでなかったが、さきほどより流ればなしの美津江のX×のため、ガイと力をこめてXきたてると、彼女は痛さのため大声をたて、母親にかじりついた。彼は今度もすっかりXれることはできなかったが、昼間よりはずつと深くXつて、締りがよいので快よかった。痛さのため美津江がもたえるほど、締めつけられながらX×はズルズルとますます深くXつて行った。美津江は大きなX×をXれられて泣き出し、たい位痛かったが、その痛さの反面、腰一面にみなぎりあふれて来る快感に、死んでもくいいない喜びを味った。美津江の胃袋の下までX×がとゞいてゐるやうで、下腹部はクワツと燃えて、すっかり痛みのとれてしまった彼女のX×は、ケイレンをしながら安夫の業物をかたくかたくかみしめた。XいたりXれたり、左へ廻したり、右へ廻したり、後から腰を使はれ美津江の子宮はあばれをX×にさいなまれ、つかれ、こすられて次第に快美の絶頂に近づいて行った。下の母親はもたえる娘をし

っかり抱いて、安夫の大きなX×がX×をくすぐる度に、女将はフンフン息をはずませてゐた。恵美子と真理子と須磨子は自分のX×やX×をくじりながら、この横暴な男の豪快な性交ぶりを息を殺してみつめてゐた。六浅八深と突きまくる安夫の巧みなX×さばきに、美津江は快さに狂はんばかりになつて、

「ハア、X× X×」

と変な調子はづれの声を立てながらX×をXつてしまった。それでも安夫はやめなかった。もう一度、あの氣持よさを享樂せんと美津江はくすぐったいX×を締めて、安夫のX×をかみついてゐたが、彼はいたづらをしはじめた。再び美津江が快くなった頃、彼女のX×からスッポリ抜き出したX×を今度は下で待ちこがれた母親のX×に差し込んだ。娘のとちがって、母親のは何の苦もなく、ずるずるとX×まで呑んでしまった。女将は待ちこがれてゐただけにはげしく腰を動かした。

「あゝ、いい!!」

と女将がよがり声を立てると、上の娘がたまらなくなつて腰を動かすので

娘の××がくすぐつていよいよたまらなくなる。女将は×く寸前、安夫が引×いて上の娘に、娘が×きはじめると母親へ——。そんな具合に交代に×立て、遂に二人ともに完全に×を×つてしまひ、彼も公平に二人の女に熱い×液を子宮の奥深くそゝいで、しびれる快感を心ゆくまで享樂した。安夫は恵美子にふかせた。真理子と須磨子はこのフクといふ仕事を、くたつとなつた母親と娘の者にしてやらねばならなかつた。美津江は恥しいのですぐに起き上つた。彼女は母親の巨大な肥満した肉魂と、中心にある×毛を眺めた。女たちは平素の恥しさをすっかり忘れてしまひ、安夫が自分の前で彼女たちに踊るやうに命じたら、性の暴君の命令通り、皆なその通りにした。

女将は真理子と組んで、須磨子は美津江と組んで腰をふり性交の姿態をまねて踊つた。安夫はこの踊り狂ふてゐる組を眺めて、それに手拍子で合せてゐた。恵美子は安夫によりそつて、あさましいこの踊りをあさましいとは思はず、淫欲をたゞよはせた瞳を輝かせてみつめていた。安夫は恵美子の欲心

を知ると、この娘を喜ばしてやらうと思つた。疲れを恢復した彼の××は再び欲情に狂い立った。彼は恵美子にくばせして、ジュータンの上に横になつた。彼女はすぐ彼の上になつたが、彼は彼女の足を彼女の顔の方にむけて、自分の上へ逆さにねかした。彼女は彼のこれから試みる肉交の姿勢をのみこむと、すぐ自分で彼の一物をできるだけ深く自分の中へ×し込んだ。彼女はそのとき非常な痛みを感じた。彼女の××からは真赤な血さへ流れてきた。彼女はそんなことにはひるまず、遂にはしっかりと彼の××を×の中へ×れて、しっかりと彼の上に坐つた。硬い棹を三分の二も自分の×の中へ×れると、彼女の顔は紅潮した。彼は彼女の腰をしっかりと抱いて、ぐつと下から強く×込んで、この娘の第二回目の処女から女の行為を完成してやった。

恵美子の興奮は実に恐ろしいものであつた。その豊かなかたいおっぱいは嵐のやうに波打つた。彼女はお尻を狂喜のやうにはげしく上げたり下げたりしてゐた。

「もうあたし、たまらないわ!!」

女のいふ言葉はたいいていきまつてゐる。たまらないといつても、なみの男みたいにあっけなくいつてしまはない。たまらないとよがりながら、よがりよがつて氣をやるものである。その点得心得てゐる安夫は、腰をくるくる廻して子宮に××をこすりつけた。

男も女もハアハアフウフウ息づかひながら完全な肉欲の満足を果してしまつた。

「もう一度して!!」

恵美子は子宮にそゝぎかけられた精液の快感が忘れられずにせがんだ。

「あゝ、今度は私がやって貰ふ番です。私はまだ一度もしてないわ!!」

真理子が叫んだ、いやあたしよ、あたしよと恵美子からやつとのことで引×いた安夫に向つて女たちが殺到した。恵美子だけはぬれた××をむき出したまゝ、足をひろげてねてゐた。ほかの女たちは安夫の×をつかもうとして争つた。男と生れた以上、これくらひ女にもて、女にせがまれたらさぞ幸福であらう。と思ふのは凡人のあさはかさ、安夫みたいに精力絶りんであつてはじめてできることで、普通の男では三回

も四回も続けて××が続かない。見よ!! この安夫の底力はこれから更にたくましく発揮されるのである。

「真理ちゃん。お前はテーブルの上にねな、そしてすっかり×を出しなよ。さうだ。今度は恵美ちゃん、お前はここの娘の口の上に坐りなよ。さう、さうだよ。」

女将も再び自分の娘の前にねることにした。自分の番をぼんやり待っているやうな女ではない。テーブルの上で演じられる性劇を横から眺め楽しみながら、自分たちもそれに似た性劇を演じるといふ、二重の享楽に身も心もとかすのである。女将の口の上に好色娘の美津江がしゃがんだ。

須磨子は安夫と恵美子の間へ坐った。そして前の恵美子の×と男の袋とをかはるがはるいぢった。これですっかり用意が出来た。安夫は最後に残された女、真理子の×に××しはじめた。豪華な性劇の幕は切って落された。女将は下から娘の××をなめ、娘の美津江は体をまげて母親の××をくじりなめ廻した。一方安夫の巨大な××の一撃を受けた真理子は、自分の口の上にあ

る恵美子の××に舌を深く差込み、恵美子は前に坐ってゐる須磨子の××に指を×込み、彼女と抱き合つて唇を吸ひ合つた。安夫が一×きするとその衝撃が順々に伝つて、ほかの者はなめ合つたり、くじり合つたり、吸ひ合つたりした。ハアハアスウスウといふあへぎや溜息や、身ぶるひ、乳房の波動が起つた。かくて快感は次第に頂点に近づいて、うめき声と共にみなのからドロドロした×液が湧きはじめた。女たちはとうとうからみ合つたり、乳房をくすぐつたりした。

安夫はこれをせんと懸命に×きまぐつた。真理子は顔の上に恵美子を、腹の上に須磨子を乗せて苦しかったが、それよりも安夫が力の限り×きまくる快さにしびれ、酔ひ、うなり、よがつて腰を持ち上げ、ぐるぐると廻した。安夫は須磨子と真理子の乳房を交代にしっかりとつかんでもみはじめた。下の真理子が、

「ア、×××××もつと突いて!!」と叫んだとき、安夫は汗ぐつしよりかいて、はげしく突きまくつた。真理子の××がケイレンを起して、彼の××

をやさしく締めたり××をなめると、彼もたまにかねて再度の××をしてしまった。と同時に、すべての女たちも同じやうに××を×つた。彼がぬれ××を拭きもせず椅子の上にぐつたりと沈み込んで、自分の前にねころがつてハアハア息づいてゐる女たちをみたとき、安夫はほゝえんだ。彼は五人の女に満足を与えた。学問もない、技能もない、顔もよくない彼に、天は巨大な疲れを知らぬ××を与へた。天は二物を与へずといふが、彼は男性として最も誇りの高い物を与へられた幸福者であつた。まことにうらやましき限りではないか。

湯の街はすっかり寝静つてゐたが、これに似た性劇はそこ、の旅館の密室で試みられてゐるにちがひない。しかし、これほど暴行的な性の営みが試みられてゐたであらうか。

これだけの精力鑑賞のあとには、休息と栄養補給が大切である。性欲のあとは食欲が五人をおそつた。女将や娘たちや女中たちは遠慮なく飲み、喰つた。すっかり酔つた女は眠り、ある女は丸裸のまゝ踊り出し、ある女は安夫に情交をせがんだ。彼女たちは厚顔な

欲望を露骨にむき出した。そしてその報酬として彼女たちは一人づつ、ソファの上にねせられ、夫婦の営む正しい姿勢で安夫にやられたので、快感のために息がつまりそうであった。この五人の女は、つぎつぎと一人の山男とありとあらゆる淫楽三昧に耽った。彼女たちにはせがまれても、彼は決して拒絶しなかった。彼の袋からは無尽蔵の精液が生産され、彼の棹はいつも女々の要求に応じられた。

それ以来、彼は五人の女を妻として、一つの立派な部屋を与へられた。この部屋は宮様といへども、これ以上美しい部屋を望むことのできないほどの、ぜいを尽した立派なものであった。女将ばかりでなく二人の娘も女中たちもそれ以来魅惑的な服装をまとうて、安夫の気をそゝることにとめた。安夫は仕方なしにやることはなかった。この変態的な夫婦の話が有名になって、この湯の街は非常に繁昌した。金儲けのうまい女将は、自分たちの享樂を金を取って秘密に客に見せることにしたので、客は連日満員であった。

やがて、春乃家の温泉に入ると、男

は精力絶りんとなり、女はこよなき快感を得られるといふ評判が高つて、いよいよ春乃家ばかりでなくその湯の街は発展した。めでたしめでたしで私の夜話は終る。



挿絵画家求む！

本誌の小説、読者投稿作品、文献資料などに応しい挿絵を求めています。リアルなもの、イメージふうなものなど、独創的な画風を歓迎します。

- (1) ペン、筆、鉛筆
- (2) ケント紙、画用紙、和紙。
- (3) サイズ

タテ描き——本誌——ページ大。

ヨコ描き——本誌1/2ページ大。

優秀な作品は本誌に掲載、次号より原稿を依頼するほか、他誌にも紹介、推選します。

○画料・一枚三千円

そのほか、カットも求めています。奮ってご応募ください。

へ宛先

現代芸術研究会・編集室

※郵送中に破損することがあるので包装にご注意ください。

女郎蜘蛛 前篇

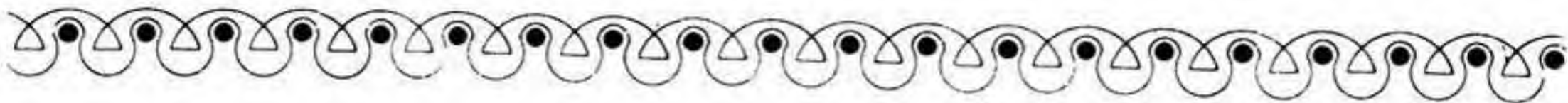
十五の花

秋祭りのいろ／＼の見世物も、もう十時をすぎると、ばつたり人足がと絶える。この瀬戸内海に面した小さな半漁半農の町の秋祭りも、今日はもうこれで客はないものと思はれた。

チャチな見世物小屋を出している竹藏は、とつぷり暮れはてた空に美しくきら／＼光っている星をながめながらそう考えていた。

竹藏の一座は御多聞にもれず、年中旅から旅を續ける見世物藝人で、蜘蛛娘のお金一寸法師の庄作、河童頭の三郎、竹藏の情婦で三味線引きの定子それと二人の踊り子ちどりと美那子の總勢が七人の小さな一座であつた。

何處の町へ流れても、この人数では大した入りは望めなかつた。近年ちどりと美那子に女らしい色氣がついて来て、卑わいな歌を唄はせると、わつと湧く事はあつても



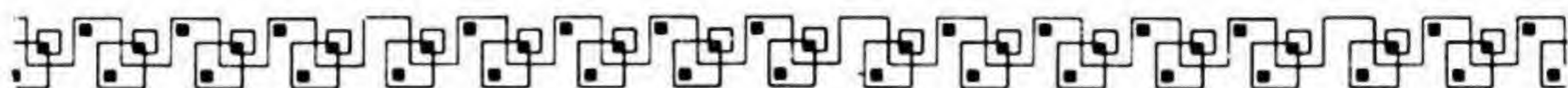
まだ充分客を引く魅力はなく、一座の人気者はくも娘のお金と、一寸法師の庄作であつた。

二人のコンビで方才もやれば芝居もする。何といつても一番受けるのは「深夜のたわごと」といふエロ仕草であつた。二人の奇型兒が、あやしい腰つきで身振りをする、このうす暗い小屋一面に幻想的な雰圍氣を漂はせ、観客をたくまずして夢現の世に誘い込むのであつた。

だが竹藏は最近めつきり乳つはつてきた踊り子のちどりに眼をつけていたようやく十八になつたばかりだが、むつちりとした肉づきで、男好きの目をしており、腰の線もふつくと女らしくふくらみ、何とか定子に氣ずかれず物にしようと狙つていた。

こうした藝人達は決して宿屋へは泊らなかつた。

小屋掛けしたその中に、區切りをつけてその中に寝る。無論竹藏と定子は一の間なのだが、竹藏はもう定子には何の感興も覺えなかつた。



秋とは云つてもまだ残暑の候で、ましてや暖国のこと、むし／＼として仲々寝つかれなかつた。遠くの方から風に乗つて海鳴りの音が斷續的に聞えてくる。竹藏は寝苦しきのまゝ、ぶら／＼と境内を少し歩いて見ようと思つて、二、三步あるき出した途端すぐ横の天幕の暗さの中から声が聞えた。

「ね、三ちゃん、何の用なの？こんな所へ呼び出して——」

聲は美那子の様であつた。竹藏は思はず立止つた。

「うむ。俺、こんな所へ呼び出して済まねえと思つてゐる。だけどこんな所でどもなけりやお前に會えねえものな」

三郎は數え年で十八である。やはり先天的な奇型で、頭の天辺が切り落された様な皿頭で、その平つたい頭でコマ廻しや、いろ／＼な藝當をするのである。この様な社會の者は年中が旅で、他のしげきがないから一般に早熟でまた男女關係は非常にルーズである。

それと云うのが、大体生れ落ちるからすぐ親の手を放れて人買の手に移るから、ほとんども満足な教育は受けて居らず、年ごろになると本能のおもむくまゝに行動する相手の美那子は十五だが、ほつそりした子供々々した体で、胸の起伏などほとんどなく、まだ乳臭い少女だった。

「それで？何か話があるの？」

「うん、おれ、實は美那ちゃんが好きなんだ。ずっと前から——おれ口下手で、よう自分の思つてゐる事が云えんけど、お前かつてもうじき親方に女にされるに違ひねえんだ。ちどりちゃんはまだ狙はれてゐる。まあどの道親方にはお前達女はお初穂を取られるに違ひねえんだが、おれ、お前だけは親方に取られたくないんだ。な、俺の氣持分るか」

「うん分んない。大体親方に女にされるつて、あたゐ生れた時から女よ」

「そ、そりやそうさ。お前が誰が見たつて女さ。だけど女にされるつてのはそうぢ

やないんだ。な、お前知らなけりや教えてやる。おれに女にさせてくれ」

「まあ、いやだ。女にさせてくれなんて——どんな事をするの？」

「そ、そりや簡単さ。だけど人によつて異うからやつて見なけりや分らない。な、いゝから」

「いや。こわいわ、あたし」

「む、ちつともこわい事あないんだ。一しよに寝りやそれで良いんだ。ほら、定子さんと親方が一緒に寝てるだろう。あんな風にすりやそれで良いんだよ」

「なあーんだ、一緒に寝りやそれで良いの。そんならもうあたい女になつていろ」

「え、ほんとかい。だれだい相手は——」

「ふふふ、ちどり姉さんよ。あたい何時でも一しよに寝てるもん」

美那子は無邪気に笑つた。白痴的な笑いであつた。笑うと片えくぼが出来て案外可愛いい顔になつた。

「なんたおどかすない。女同志ぢやだめなんだ。男と寝なくちやなれないんだ、なこゝでもいゝだろう」 竹藏は聞き捨てにならないと思つた。それに対して美那子は何か答えていたが、かすかに物のくすれる様な音がして、後はしゝんとしてしまった。彼は不意にはげしい好奇心におそはれた。美那子には少しも女は感じていなかつたがこの無知な者同志がどの様な情事をくり広げるか、怒りより好奇心が先に立つてそつと忍び寄つて見た。三郎は立つたまゝしつかり美那子を抱きすくめ、のしかゝる様に女の小さい口を吸つていた。肩に廻した三郎の両手は激情にぶるぶるふるえているが美那子は何の反応もなく、放心した様に抱かれているだけであつた。

三郎は立つたまゝ美那子に足をかけると、その場に押し倒そうとした。

「あら着物がよごれるわよ」 「なあに、下にゴザが敷いてあるから大丈夫さ」

「でも女になるつて、只寝りやなるの？」

「うん。只だまつてちつとしてりや、それでみんな済んじもうんだ。俺だつて初めて

だけんど、なあにうまくゆくさ」

三郎は息も荒く美那子をそこところがすと、ばつと着もの、裾をまくり上げ、夜目にも白い美那子の股に手をさし入れると、ズロースを引きづり下しにかゝた。

「あらツ三ちゃん。ズロースを取つちうの、寒いわ」

「こうしなけりや、女になれないんだよ。美那ちゃんはまだつておれのするまゝにし
てりや良いんだ。分つたかい」 「うん」

三郎はする／＼ズロースを引ずり下すと、いきなり忙しくのし掛つていつた。だが
どちらも初めてなので、一体どうすれば良いのかさっぱり分らない。ただ徒らに腰を
動かしているが、むくり上つた三郎の××があちこち美那子の内股をつきまくるだけ
で少しも入らない。

「ね、三ちゃん、これで良いの？これであたい女になつたの？」

「いや、そうじゃない。だけどおれ、分らないんだ。一体どうすればいゝんか」

「ぢやあまだのなね。でもあつい太いものが、ちくちく私のオ××にさわるけど、あれなに？」

「あゝこれか。これは男の印なのさ。な美那ちゃん、これお前の手で無茶苦茶にこすつてくれないか。おれ今日はそれで我慢する——」 「どうして？」

美那子は両手で三郎の××をはさむと、三郎の云う通りにこすりはじめたまだようやく半むけの状態なのが、きゆつくと引きむく様に美那子にむかえると、じーんと體全体がしびれる様に快よかつた。

「ね、美那ちゃん、もつと強くやつてくれ——遠慮は入らんよ」

「えゝ、でも、痛くないかしら——かまわない？」 「うん、いゝよ。痛くたつて」
見ていて竹藏はお可笑しくてならなかつた。いくら初めてとは云え、何てだらしのない奴だと思つた。しかしこうして美那子に××をなぶらせ、氣持よさ相にうめいていゝる三郎を見ると、何だか彼も妙な氣持になつてきて、今しばらく手をつけないつもり

でいたが、どの道荒鉢を割るのなら、今夜一つつまんでやらうと乙な気分になった。そこで竹藏は「こりや三郎、そんな所で何をしているんだ。美那も一緒に——」といきなり怒鳴りつけた。

「あつ」　と三郎も美那子も思はず飛上った。

「あの——」　と口をもぐ／＼さしているのに

「馬鹿者奴。変に色気づき上つて、その格好は何だ早く息子を片づけろ」

「はい済みません」　「早く歸るんだこんな所でまご／＼していると承知しないぞ」

三郎をしかつておいて、一しよに引取らうとする美那子に

「美那は一寸用がある。おれと一緒に来い。川までゆくんだ」　「あい」

彼は美那子を連れ、恨めし相な三郎を残して、すぐ裏手を流れている川原へ下りて行つた。澄んだ美しい星が無数にまたたいていて、天の川が頭の上に長く尾を引いていた。宮の太鼓の音が如何にも秋祭りらしくわびしく聞え、二、三のアベツクラし

い人影が見えた。竹藏はやわらかい草むらに腰を下すと

「美。先那刻何をしていたんだ」と叱る様にたづねた。

「あの——あたい何もしていない。たゞ三ちゃんに女にしてやると云つたで——」

「それで女にして貰つたのかい」

「うゝん、だめだつた。だつて三ちゃん分ないつて云つてたもん」

「そうか。お前女になるつてどんな事をするのか知つてゐるのかい」

「知らない。けど男と一しよに寝ると女になると三ちゃんが云つてたで——」

「はゝゝ馬鹿だなあ美那は、どつち道いづれお前も女にならなくちやならんが、今日はおれが一つ女にしてやらう。だけど定子にはだまつてゐるんだぞ。その代りお前に何か買つてやらう」「うん。何買つてくれるの」

「まあその中何でもお前の好きなもの買つてやる。さ、こつちへ来い」

彼は美那子の手を引くと、自分の横に坐らせ、胴を抱くと一しよにごろりと仰向けに

倒れた。草むらに倒れ込むと、すつかり二人の姿がかくれてしまつて、その暗さの中へは星影も届かなかつた。竹藏はこのまだ何も知らない少女を抱いても、女という昂奮は覚えなかつた。その代り、この無知な肉体にあらゆる惨虐なさいなみを想像すると、今まで覺えたことのないしげきを感じた。半ば眠つてゐる様な肉体に、痴体のあらんかぎり盡す、それはそのまゝ悪魔の世界であり、感情のルツボとなる譯であつた。竹藏は美那子の帶を解き、ズロースを脱がせようと、そのか細い未知な肉体をつく／＼ながめた。まだ胸のふくらみは低く、丁度××の丘の様でそのまん中にぽつんと小さなグミの味の様に、乳首がついてゐる。細い胴体、足もすんなりしてゐて、只腰廻りだけはやうやくこれから女にならうとする前徴のやうに、やゝ脂肪のまわつた張りを見せていた。ズロースを脱がされても何のしう恥もなく、だらりと伸した足のつけ根に、すべ／＼した丘があり、右手で膝をこじあけて見ると、××がぽつんと突起していて、その下××は固く口を閉じてゐる。竹藏は美那子をいためつける

のを後にして、自分もパンツをぬぐと、それでもびん／＼張つて来た××を女につきつけた。

「美那。一寸起きろ」と女を起すと、自分の××を吸う様に命じた。

「これをどうするの？」

美那はさん／＼使つてどす黒くむかれている竹藏の××を見ながら云つた。

「うん。お前の口の中に入れて、べろ／＼と先の方を舌でなめるのさ。分つたかい」

「うん」 美那子は云はれたように、彼の股間に顔を寄せると、高射砲の様に伸びている××をくわえた。竹藏は女の頭を抱くと、ぐつと抑えた。長い××が女の咽喉まで届きそうであつた美那子はげしく首を振つた。手を放すとふつと大きく息をして「そんなにすると、息が出来なくなつちやつて——」

「そうかい。そいつは悪かつたな。ぢやお前のやりよい様にしな」

彼は後は女のするまゝに委せた。美那子はすんぐりした彼の××を半分位口にほ／＼張

ると、××を舌と上唇で強くはさんで吸つた。

「うゝむ」と彼はうめいた。中々調子がよい。

「美那。中々上手すぢやないか。その調子でどん／＼やつてくれ」

美那子は「うん」と頭でうなづいて、更にべろべろやり出した。

××を上唇と下唇でびつたりはさみ、きゅつと力一杯吸はれると、体の力が全部抜かれる様に快よかつた。その中、齒でやわらかくかんだりするので余計気持がよい。

女というものは先天的に娼婦の素質があるのか、初めてだというのに中々堂に入つたものだ。

彼は今度は女を仰向けにすると、ぐつと兩股を広げさせ、××から××にかけて舌でなぶつてやつた。まだ子供なので、氣の行く事はあるまいが、彼の嗜好心を満足させる為であつた。舌をまるめて、××から下、××にかけて割×を這つてゆくと、やはり気持がよいのか、ふん／＼と鼻をならした。

「どうだい。気持がよいのか」 「うん。あたい何だか、くすぐつたい——」

「はゝゝゝそうかい。今こういう風にしておかないと、後で一寸いたいからな」

「そう。あたいもう女になつたの？」

「そうだな。半分位なつたかな。だけどこれから本當になるんだ」彼はそう云うと、自分は仰向けに寝て、女をだき起すと、股間にまたげさせ、可愛らしい××を手さぐりでさぐり當てると、そこへ××を當てがつた

「さ、そのまゝでしづかに腰を落してゆくんだ。痛かつたら途中で休んでもよいよ。

足はうんとひろげて」 「そう？」

美那子は云はれた通り、うんと兩足を延ばし、ほとんど尻丈の重みになると腰を落した。「いたいツ」××に熱いものを感じ、同時に美那子が悲鳴を上げた。

「待て々々」彼は美那子の尻を持上げて

「な、美那。もう一度先刻のをやつてくれ。今度は吸はなくてもいいからべつとりつ

ばをつけて、ほらこの×をべとくぬらすんだ。俺はお前のをやつてやる。そうするとつばですべつて×りやすくなるんだ」「うん」

美那子は云はれた様にべつとりと××をつばでぬらした。彼はロ一杯につばをため、美那子の××を顔近く手で引寄せると、べつと××部に吐きつけた

「さ、これでよい。もう一度やろう」

美那子はだまつて再び上に乗った。固い小さい××であつた。××があまりにもきつちりしまつていて、容易な事ではなかつた。それでも美那子の尻に手を添え、少しずつ慎重に×いこませてゆくと、どうやら×つていつた美那子は

「いたいく」を連発していたが、しかしさすがは道具である。とう／＼無理矢理×め込んでしまつた。

「どうだい美那、痛いかい。どんな氣持だ」

「うゝん。何かしらこう——はさまつてゐる様な氣がして——」

「そりやそうだろう。先刻お前が舌でなぶつていた奴がはまり込んでいるのさ」

「これで——これであたい女になつたの？」

「うん、もう少しでな」 竹藏はそう云うと、ゆつくり腰を動かしはじめた。きつちりしまりすぎてするので、腰を動かす度にきゅつ／＼と上皮をさらにむき上げる様にするので、刺げきは満点である。

それに子供とは云つても、さすがに若い女で、老人のかさ／＼のとは違つて、結構ねつとりと××内もぬれており、反つて奥につかえる様な手応えが快よかつた。

竹藏は美那子の尻に両手をかけると、ぎゅつと強くつかみ、上下左右に動かした。女が上になつていたので、仰向いた××の先が子宮の奥までつき當り、何とも云へないすべ／＼した柔かいものが××の先に感じられ、竹藏はだん／＼催して來た。

竹藏はそのまゝゆつくり体を起すと、今度は自分が上に乗り、女の兩足をすぼめさせると、太股ではさむようにしてしめつけた。すると××がさらにしめつけられ、はさ

み取られる様な快よさがあつた。彼は上体をがつくり美那子の胸にもたせ、顔をかゝえこむと、はげしく口を吸つた。

蛇のような小さい唇であつた。すつぽりと彼の口の中に吸い込まれ、その薄いべらべらした舌を引きすり出すと、彼は味う様にしてしやぶつた。

美那子はもう彼の為す儘であつた。

女にされるという事が、どんな意味を持つのか考えもせず、無論考える力もないのだが、十五の處女を暗い川原に散らして行つた。

この様な無知な女は、一たん性欲の味を知ると、本能のおもむくまゝに行動する。竹藏は今までの例でも二、三度女を自由にしておきると、後は全然省みなかつた。それで女達は仕方なく不具者の庄作や、三郎などを相手にする様になるのであつた。

一寸法師の庄作は、今までしば／＼その恩恵に浴していた。三郎は最近他の小屋から買はれて來たので、その様な経験はないが、庄作は竹藏の手を付けたお下りを殆んど

頂いていた。天は二物を與えずで、この庄作の品物は天下無類のもので、反つて女によつては庄作の方を喜んだ。竹藏はだん／＼精が×きそうになつてきた。再び美那子の股を思い切りひろげ、××をつけるだけつきのばすと、子宮を破るような勢でつきまくつた一振りする毎に、きゆつ／＼と上皮がひきちぎれる様にひきむかれ、もう×の先は眞赤になり、今はもう×るばかりになつた。

「美那。おれがこうして突くと、お前は下から尻を持ち上げるようにしな。うまくやらないと駄目だぞ」 「でもあたいた痛い——」

「なにもうすぐ済むんだ。さ、やれ」

彼はぐんと突くと、下から美那子が尻を持ち上げる。すると更に××に刺げきがくははり、五六度それをくり返すと、今はもうたまらず 「うゝむ」

と一騒うなると、どくどくと精を×つてしまった。

「あら。何やら出て來た——」

美那子がおどろいたようにさげんだ。「ふゝゝゝ」
竹藏は満足そうに笑うと、草をひきちぎつて一物をぬぐい、ゆつくり立ち上つた。

お金の戀

くも娘のお金は今年二十二になつていた。

何の因果か全身に眞黒な毛が密生し、身長はせい／＼一尺五六寸、というのは腰の骨が碎けたようになっていて、下足とのつり合いが取れず、兩足は右に延びたまゝ、いざりのように這つて歩かねばならなかつた。

前手足だけは常人と違いなく成長しているので、丁度蜘蛛の様な格好に見えるのであつた。奇型兒を後天的に作る方法があつて、一寸法師など嚴重な箱に首だけ出して、胴体を封じこめたまゝで育てると、顔だけは年令の割に育つが、体は箱枠にさまたげられ、その枠内丈の成長に止つてしまふという。

お金もその例かれ知れなかつた。何處の生れで、どんな過去をもつて、どんな事を考えているのか誰も分らなかつたが、お金はお金なりに女の悩みを持つていた。

竹藏の小屋へ引取られてからも五年にもなるが、お金はひそかに竹藏を戀していた次々に竹藏が新しい女に手をつけ、それがまた代る／＼他の男達に引つがれるのを度見ていた。

どの女もどの女も恥づる色もなく、夜ともなると思い／＼の狂態をくり広げお金をやました。お金は兩手を交互について歩くので、殆んど音は立てず、今までにもなやましくなると、よく竹藏の小間をのぞいたが、いつもそこに見るのは変つた女達とのおくどい性の遊戲であつた。それを見たときのお金の顔はみる／＼みにく／＼ゆがみ眼を異様に光らせ、熱い吐息をもらすのであつた。

今夜もお金は妙になやましくなつて、そつと自分の小間をぬけ出した。ふらり／＼と兩手で上手に胴体を支え、竹藏の小間をのぞいた。

が、そこには竹藏の姿は見えず、この間から風邪氣味の定子が独りで所在なさそうに本を読んでいた。仕切りはカーテン一枚なので、中の様子はよく分る。竹藏は何處へ行つたのかと一寸思案していると、重い足音がしてお金は素早く物蔭にかくれた。歸つて来たのは竹藏であつた。彼は何食はぬ顔で中へ入ると

「あーいゝ夜だつた」とごろりとそこに轉がると、独り言を云つた。

定子はぢろりと上眼越しに彼を見て

「ふん、いゝ夜つて何處へ行つて来たんや」と云つた。

「うん一寸裏の土堤までな。遠くの山の中に燈りが見えて、中々きれいだつた」

「ふん何阿呆くさい。また誰か女の子でも引つけて来たんと違ふか？」

「阿呆云え、やきもちもいゝ加減にしろよ。第一引つかけるつて誰がいるんだ。ちどりや美那子はまだ子供だし、あとはお金だけぢやないか」

「ふん、口では子供々々と云うてからに、腹の中では何思つてけつかるか分つたもん

ぢやない。あんたなんか、いざとなりやお金にだつて手を出すんだらう」

「じよ、冗談云うない。お金はありや女ぢやねえ化物だよ。あんなものにこの俺が——ぶつ、あんまり笑はすなよ」

「とか何とか云つて、近ごろのお金の眼の色を見まつせ、ほんに色氣づいて、殊にあんたを見る時の眼の色つたらありやしない」

「馬、馬鹿言えよ。何ぼ何でもお金に——おれが——」

「ふん。どうか分つたもんじやない」

これを聞いていてお金は悲しくなつてしまつた。

「あんな化物——」

と戀する男が言つた。普通の女なら悲しくあきらめてしまふが、お金は逆に斗志をあふられ、是が非でも一度は竹藏とつるんでやらうと思つた。それに定子の言い草も氣に食はなかつた。てんで腹の中ではお金の事など考えてもいない事は、お金によく分

つていた。

「ねえあんた、それより今夜はどう？」と定子は誘いかける様に急に優しく言つた。

「え、お前、身体が悪いんじゃないのか？」

「ふふ、それとこれとは別さ。あんたなんか精力を少し吸い取つておかないと浮氣するからね」今のいま、美那子を押へつけて來たとも知らず、定子は言つた。

「ふん、いゝ氣なもんよ。俺あかまわねえが、お前体に悪いぜ」

「ふふ、あたしやそれをするとは反つて体に藥なのさ。それともお前さん出來ない譯でもあるんかい」

「ば、馬鹿いうねえ。變な言いがかりをつけるなよ」

竹藏は氣が進まなかつたが、美那子を押へた弱味があるので、いかにも表面では氣のある様子を見せたが、心の中ではやれ／＼と思つた。彼は近頃とんと定子には興味を失つていた。ぶらりとたるんたしなびた乳房、かさ／＼に干からびた皮膚、まだ二

十七というのに、荒淫のためか衰えが早かつた。顔にもしわが増へ、異様に嫉妬深くなりそれと逆比例してあの方面丈は盛んに要求する様になつていた。定子は「ねえ」と入口を一寸見て竹藏を誘つた。お金はぶるつと身ぶるいした。

女というものはどうしてあんな嫌な眼をするのだろう。慾情にきら／＼と光っている定子の眼を見てお金はそう思つた。竹藏は仕方なさ相に定子の團に這つて行つた。

お金はじつと息をひそめた。

「ねえ。お前さんほんとに浮気はしてないね。美那子はまだ子供だけど、ちどりはもう體も一人前だからね。あたしや心配さ」

「まあ、そう気を廻すなよ。体にさわるぜ。それよりこう、どうだい」

竹藏は定子の胸をはだけ、ぐつと抱きしめると、いきなり裾をまくり上げた。皮膚のたるんだ青白い足が二本長々と延びていて、そのつけ根にこれはまた稀に見る毛××がひく／＼とはや次に來るものを待つ様にうごめいている。お金はあつと思つた。何

という毛深い女であろう。まくり上げられたへそから下××にかけて、一面に陰毛に覆はれ、××の入口は指で毛をかき分けねば分らない位であつた。丁度大きな毛虫が腹を反して寝ている様であつた。見ていると、竹藏の指がその密毛をかきのけ、這いわけ、陰××から××にかけて、じわ／＼ともみほぐして行つた。

お金は自分がそうされている様に、背すずがぞくぞくとしびれる様にふるえた。定子は、耐えられない様に竹藏の首に腕を巻くと「うゝん」と鼻声を出して口を求めて行つた。「ふーっ」

と大きく息をつくると竹藏は早く片づけてしまいた相に定子の口をはげしく吸い、いきなり定子を下にのしかゝると、右膝で兩股をこじあげた。

「うゝん、はや？早いぢやないの——」口をはなして定子がいつた。

「何だか身体が、かつたるいんだ。風邪を引いたのかもしれない。早く一丁片づけて寝ようぢやないか」

竹藏は警戒しつゝ答えた。定子は一度本能にかられると、一晚中求めてねかさなく
せがある。先刻美那子の荒鉢を破つたばかりで、氣苦労とつかれがある。竹藏は早く
定子を片づけて眠りたかつた。「ふーん仕方がないわね」

定子は不満そうに返事をする、荒々しく自分から眞ッ裸に着物を脱ぎすて竹藏を下
にしてのしかゝつて行つた。お金の方からは二人の頭が先方にあるので、大きな定子
の尻が竹藏の××を××にくわえ馬乗りになつている様が後しろむきに見えた。全く
お金にはまともに見られない図であつた。

「一体あんなにすると、どんな氣持がするのであろう。女と生れたからには、一度は
経験して見たい。けれど――」

とお金は悲しくなつてしもう。身体の格好こそ先刻竹藏のいつた様に化物かもしれな
いが顔立ちは中々可愛らしく、客席からも「ようべつぴん――俺と一丁やらないか」
と野次は飛ぶが、一座の誰もが、お金を相手とするものがない。相棒の一寸法師の

庄作さえ、ちどりに無中になつていて、お金など本當にだれもかまつてくれない。女とすら思つてないのかもしれない。私だつて、皆と同じものがあるし、いくらでもあんな事が出来る。

お金は考えると氣がむしやくしやして一その事一座の女という女を全部殺してしまつてやつたら、男達は争つて自分の前に膝まづくのではなからうかと妖しい想像さえするのであつた。そうなつたら、どんなに楽しいだろう竹藏も庄作も三郎もみんな自分ちやほや氣嫌とるし、私は好きな事をいつていればよい。お金の想像はそれからそれと果しない。

ふと、物音がしてお金の想像は破れて、部屋の中に氣をとられた。見るなりお金は「あッ」と思つた。先刻の定子が上になつていた姿勢から、いつしか妙な格好になつていた。

この姿態ならお金には打つてつけの体位だつた。押し車といつて、女がうつ伏せに

なつて、両手で体を支え、男が立つたまゝ女の兩またの中に入り××をさし込んだまま女の太もゝを手で支ふていて少しづゝゝ車を押す様に前に進むのだ。お金は呆れると共に感心してしまつた。随分いろゝゝな方法があるものとは今迄でも想像はしていたが、この姿態なら、くも娘といわれる自分にも充分こなせる体位であつた。

定子は顔を眞赤にして、尻をもじゝゝさせ、心死に激情に耐えている様子であつた。その中、「あゝもう――」

と切なげにさけぶと、ぶるゝゝツと両手をふるはせ、きゆつと兩足先で竹藏の胴をはさんでしまつた。竹藏も同時に立つたまゝはげしく腰を動かし何か一氣に押出す様にして、ふうゝゝと荒々しい息を吐いて、どたりとそこへ座つてしまつた。そのひょうしに××がするりと抜け出て、今はだらしとした××がにぶい電光の下にさらされたうす黒い、先の太い男の物が、湯氣を上げてゴザの上を上下している様を見ると、お金は切なさ知らずゝ片手を浮かすと、自分の××をむちやくちやくにくり廻すの

であつた。

いたづらぐも

翌日も上天気であつた。客足もそう悪くなく、庄作、お金のコンビがアンコールをあびくた／＼につかれてしまつた。今日は妙に皆元気がなかつた。ようやく座がはねると、めい／＼寢間に引取つて——といつても男寢間と女寢間の二間だけであつたが——眠つてしまつた。

ちどりは若い娘らしく、もう前後不覺にねているし、美那子も横になるが早いから、もう白川夜舟であつた。

すぐ隣りの男寢間の方でも、もう眠つてしまつたのか、ことりとの物音もしない。お金だけが覺めていた。お金は晝は眠くてならなかつたが、一切から解放されて、横になると反つて眼が冴えてしまつて、小さな物音にも神経がいら／＼するのであつた。

昨夜見た竹藏と定子の狂態がいやでも目に浮ぶ。

人間の愛慾のすさまじさ、みにくさ、そして激しさ、がひし／＼と夜の深みと共に体に迫つてきて、かつ／＼と体がほてつてくるのであつた。お金はやるせなげに吐息をついた。そして自分の横にのび／＼と手足を投げ出して、ねている二人の娘を、つく／＼うらやましいと思つた。

自分の様な者が、どうしてこの世の中に生れて來たのであろう。女と生れながら、女として扱はれもせず、いや人間としてさえ扱はれない哀れな一生。一体これから先なにを目當に生きて行けばよいのか？考えると全くやり切れなく苦しくなる。

お金は一尺五寸の胴体からほつと深いため息をついた。

●とその時である。隣りの寢間にことりと物音がして、誰か起きたらしい様である。お金はじつと耳をすまじた。

こそ／＼と小さい音がして、そつと這い出して來たのは一寸法師の庄作であつた。彼


は身長は三尺位、年は二十七、八でもあろうか。あとひげの濃いすんぐり頭で、先頃
からひとしきりちどりを狙っていた。お金は暗やみでも眼がきいた。

夜になると竹藏の寝間に小さな電燈が一つ燈るだけで、後は場内まつくらである。
月の美しい夜といつても、天幕でさえぎられているので、光は絶体届かない。夜は全
く闇である。その闇の中によく淫魔がばつこする。「ふふふふふ」

とお金は薄氣味悪く笑った。何事か思い定めた風であつた。はつと両手で泳ぐよう
に這うと、美那子とちどりを寝間のすみに転がして、その後にお金はころがつた。ど
うせ庄作の目的はちどりであるのであるから、自分が代つてさん／＼庄作をからかつ
てやろうと思つたのだつた。

男を求め、男を戀し乍ら、お金は最初の男としては竹藏を目標にしていたすゝつと
仕切りのカーテンが開いて、庄作がぬつと顔を出した。

眞暗な仕切りの中の様子にしばらく眼をなれさせるように、じつと呼吸を図るよう



にうかがっていたが、その中見當をつけたのか、そろり／＼と入つて來た。白いパンツが暗闇の中にほのかに浮いて、びく／＼している様子がお金にはお可笑しくてならなかつた。今迄の女達の話では、一寸法師とはいふ条、品物丈は天下無類のものらしく一度庄作の××を味つた後は、他の男では物足らなくなるとの事だつた。庄作は一膝／＼はい寄つて來て、大体こゝら辺りの見當と、お金の顔に手をふれると、そつといざり寄つて來た。どつ／＼した固い手がお金の鼻にかかり、ちつとそのまゝ寝息を圖つてゐるようであつた。

お金は、庄作にいたずらするつもりで自らみがわりを買つて出たのだけれど、実際に男性というものを、性交という目的を前において迫られると、ぞくぞくと身内が妙な期待と恐れにふる／＼て來て自分が本当なのか、此替りが本当なのか分らなくなつてしまつた。

庄作は、ふつと手を引き込めると、しづかに顔を寄せて來た。男くさい息が、お金

の息に交り、息をひそめていると、庄作はいきなり亂暴にもくちびるを盗みに来た。お金は思はず首を横にして拒んだ。

「ちどりちゃん。おれ、おれ、分るだろう。おれの氣持——」

庄作はせき込んで、それでも低い声でさうやいた。「——」お金はだまつていた。

「この間からいつてるだろう。な察してくれよ。一ぺんおいらと寝て見な忘れられなくなるんだぜ。な、ちどりちゃん」

庄作はこゝを先途とかき口説くと、矢庭に兩手でお金のかおを強い力でだくと、ちゆつと口を吸つてしまった。

あつと思う暇もなかつた。生あたゝかい男のくちびるか、びつたり蛙のように吸いつき巧妙にお金の齒の間からしたを引きづり出すと、むさぼるよに吸いはじめた。

「うつ——くるしい——」お金は思はずうめいた。

「お互いに黙つてさえいりや、分りつこないんだ。な、入れさせてくれよちどりちゃん」

ん。」庄作はそういうと、もう耐えられないように、お金の股間に手をやつた。がたちまち、何かを感じいたらしく、ぎよつとしたように体をこわばり

「お、お前、だれなんだ。ちどりちゃんぢやないな。だれなんだ、お前は一体——えお、お前はお金だろう。こんな毛むくじやの足はお金よりないんだ。お金だろうお前は、——べつ汚ない」

庄作は憎々し氣につぶやいた。そして忙てゝ身を引くと、さも汚いものにふれたように二、三度つづけてつばを吐いた。お金はむら／＼と腹が立つて來た。

「そうさ、お金さ、それがどうしたんかい。汚いつて？笑はせるない。お前こそよつぽど汚いや。なんだい、どろぼう猫ぢやあるまいし、こそ／＼女の寝間に這い込み上つて、親方にいつてやるからそう思いな。はばかり乍らお金ぢやんは一寸は出來が違ふんだ。なんだい一寸法師が一人前のかおして——」

お金はまくし立てた。危ふく妙な氣持になりかけていた所へ、お金と分つて急に毒

づかれた事が、恥かしさと共になんとしても腹にすえかねた。聲もキン／＼と高くなつた。庄作はすっかり忙てゝしまった。竹藏に聞かれたら只では済まない。

「ご、ご免よ。おれあいゝ過ぎた。おれとお前とは長い間の相棒ぢやないか、な親方にや黙つていてくれよ。な、お金ちゃん」

彼は何度も低い声で、くど／＼とわびると小さい体をふつと消すように去つていつた。再びもとの静けさと、闇が帰つて來たが、お金は妙に胸苦しさを覺えて仲々ねつかれなかつた。うと／＼とすると、庄作のねつとりとした、くちびるの感触がよみがへつて來て、それが氣味悪さと共に、なにかこうやるせない思いも感ぜられて、初めての經驗から受けた打撃が中々消えなかつた。

月 夜 道

この町の秋祭りは三日で打上げである。次は六里ばかり離れた同じく海に面したK

町でこゝは二日間の豫定であつた。

竹藏は次の町の興行の打合せに一足先に出発し、今夜は先方泊りである。座員達は定子を除いて、この最後の一日の興行をのび／＼と演じていた。竹藏はこのような社会の親方としては、むしろ優しい男だつたが、それでも座員達に取つては、なにかしら煙たい存在で一日の留守が頭の上の冠が取れたように身が軽く感ぜられるのだつた。その日も無事に一日を打ち上げ最終の夜行で次の興行地まで行く事になつていた。全く忙しい、渡り鳥のような生活である。

終列車は十時三十分である。切符を買いに出掛けた三郎があたふたとかけ戻つて來た。外出する時は鳥打をかむつて出るので、河童頭は分らず、ま見たところ、農家の冷飯食いといった格好である。「定子さんく」

彼は駆け込んでくるなり、忙ただし氣にさげんだ。彼らは定子の事をそのまゝの名で定子さんと呼んでいた。竹藏の妻のような存在であるが、これ位當にならない地位

もなく、竹藏の氣が變ると、何時なるとき追い出されるか分らない。今迄もそうであつたし、亦これからもそれは變るまい。

だから彼等としても「おあねご」とも「奥さん」とも呼べず前の仲間同志の呼名である「定子さん」で通していた。亦竹藏もそれを默認していた

この次仮りにちどりがその地位に取つて代つても、矢張り「ちどりさん」であつた。

「なんだよ喧しい。どうしたのさ」

身辺の荷物片づけをしていた定子がうるさそうに振向いた。

「へえ。済んまへん。だけど大変な事なんで——」

「だからどうしたといつてるのよ。切符は買ったのかい？」

「へえ。その事で——なんでもこの向うで脱線があつたらしいんで、今夜中汽車は出ねえつて話で——へい。」

「ほんとうかい？」定子は驚いて立上つた。

「なんであつしが、てんどうなうそなど——へい」

「困つたねえ。親方はいないし、どうしよう。明朝までに先方に着いていないと、豫定がすつかり狂つちまつて——」

「ねえ、定子さん、どいなもんでしよう」と庄作が口を出した。

「汽車がそんな事で駄目なら、こら仕ようのないこつちや。というて行かにやならんし、まあ荷物などそう大して無い事やし一つ貨物自動車で行つたらどうでつしやろ」

實際庄作のいふように荷物というものは銘々の身の廻りのものと小道具が少しある丈であつた。小屋掛けに必要なものはその土地々々で賃借するならばしになつていた「そうやなあ。ぢやそうしうか。仕ようがないねん」

定子は心を決めると再び三郎を交渉に出した。そしてどうやら次の興行地迄行く自動車を見つけて來た。途中に峠が一つあり、そこ丈が難所といえはいえた。

ちどりは最近妙に氣持のいら／＼するのを覺えていた。

何か力強いものに力一ぱい抱きしめられていた様な、また、全身でしがみついていた
い或るもの——の存在を人知れず感じていた。

それは思春期の少女が持つ、大人えの世界、異性えの興味に通ずる必然的な一つの過
程である事も知らずに、ちどりは自分で自分の氣持の了解に苦しんでいた。

三郎の雇ったトラックは今、夜の街道をまっしぐらにK町へ走っていた。ちどりは
兩足を投げ出し、荷物に背をもたせながら、親方の竹藏の事を考えていた最近殊更自
分に優しくしてくれる竹藏をちどりは矢張りうれしく感じていた。周囲のどの男を見
ても不具者ばかりの中に、竹藏だけはまともな人間であり、また中年の苦み走った好
男子であつた。

ちどりもお金と同様、ひそかに恋——という程のはつきりした自覺はなかつたが、
とに角慕はしいものを感じていた。

「でも——」とちどりは頭を振る。

すぐ横に自動車に弱い定子が寝ているのを見ると、それはとてもはかない夢だとちどりは考えていた。ちどりは十二、三の頃からこの小屋に育つて来た。その都度變る竹藏の情婦に惑は叱られ、惑は仕込まれ、或は慰められて竹藏の人となりも性格もよく分つていた。亦何人も今までに取替えられた女達の中で、ちどりは定子の前に情婦だった都留子が一番好きだった。この女は一かどの学があつて、藝事の間に読み書きの手ほどきもしてくれちどりはそのお蔭で一應一通りのものを教えられた。いはばこの小屋での一番の学者であつた。

近ごろ、毎日／＼日毎に乳房の張りが大きくなり、そつとのぞいて見る鏡の中に、自分の顔が美しく成長してゆくのを、うれしさと誇らしさの半面、故知らぬ恐れをも感じていた。

一座の中に美しい女がいると必ず男達の中に争いが起る。今の所竹藏が強いハツタリで皆を抑えているが、一たん爆發すると、根が單純な、本能だけに生きる不具者だけ

に多分な危険があつた。一寸法師の庄作も、ちどりにには恐ろしい存在であつた。最近
はもう遮二無二強引な手を用いてくる。

先夜の夜這いもちどりは知つていた。お金の腹の中までは分らなかつたが自分の身代
りになつてくれた事は事実だから、お金には充分感謝していた。よほど徴りたのかあ
れ以来、庄作が忍び込んで来るといふ事はなくなつてちどりはほつとしていた。

トラックはようやく峠にかゝつて来た。峠という丈あつて、そう高くもない山なのだ
が、それでも標高は三百米位。山すそを少しばかり廻つて、それから坂道にかゝるの
であつた。この峠を下り切ると、そこがK町であつた。

ギューと妙な音がして、急に車がストップしてしまつた。乗つていた者全部が危うく
ふり落され相な急停車である。

「おや、どうしたんや、運転手さん」定子が寝ながら不氣嫌に怒鳴つた。

「へえ、一寸——待つてやつて下さい」

運転手が早速下りて行つて、エンジンの様子など調べていたが、中々故障の場所が分らないらしく、徒らに時間が経つばかりであつた。

「ねえ、ほんとにどうしたのさ。分らないの？」

「へえどうも。心棒が折れたらしいんで——お客さん方にやあ済まねえがもうこれ以上動きませんや。折角だつたけどこゝで下りてくれませんか」

「下りてくれつて？ 冗談ぢやないよ。私達あと覽の通りの一行で、それも自分自分一人ならともかく、荷物まであるんだよ。歩いてくれつて、馬鹿も休み／＼おい／＼よ」

「と仰言つたつてどうにも新しいのを補給しなくちや動きませんや」運転手も中ツ腹らしく答えた。

「だつたらその新品とやらを取り代えたらどう？」

「それがこゝにある位なら、とうに直してまさあ。とに角これぢや仕様がねえからお客さん方だきやあ歩いて下せえよ。荷物は明日必ず届けやすから——」

「ぢや何だつていうの。明日にならなきやこの車動かないつていうのね」

定子はそういつてしばらく考えていたが

「ねえ運転手さん。私達はどうしても今晚中に向うへ行かにやならないんですよ。ね、お願い。あなた一つ走りその新品とやらを取つて来て頂けません？」と定子は哀願する構にいつた。

「え？これからまた引返して——」

「え、そう。たのみます。ご覧の様に満足な者は一人もいないんですからね、運転手さんお願い——」

定子はこゝを先途とかき口説いた。定子には運転手の魂たんが分つていたこちらの足許を見て物をねだる思わくに違いないと思つていた。どうせ酒手だろうと思うが、それ位で済めば安いものだと思つていた。

事實このまゝつき放されたらどうにもならない。峠一つとはいつても里数にしてまだ



三里はあつた。

「ね、あなたお嫌かも知れませんが、その代り充分お禮はしますからね。だめ？」
この様にいはれて男はしぶくという様に立上つた。

「ま、それまで仰言るなら一つ走り行つて来やしよう。なあに帰りは車で来ますから
そう時間はかゝりますまい。ぢやあとに角行つて来やしよう。う」

「そう。行つてくれるの有難いわね。ぢやお願いしますわ」

定子は立上ると夜空をながめた。明日も天気か月が出て来て、峠の道を明るく照らしていた。



編集室ノート

本誌の内容が大幅に変わった為、戸惑ってられる読者も多いと思いますが、先月号のこの欄でもお知らせしましたように今後はSMに限らず、性のあらゆる分野を開拓していくことになりました。旧誌の衣鉢を継ぐことが

できなかったのは編集子としても誠に無念であり、SMマニア諸氏に対して深くお詫びすると共になんらかの方法（現在計画中）で少しでもご期待に添いたいと考えています。このところ、SMの投稿が急激に増えて嬉しい悲鳴をあげていますが、フェチやコプロなど特異な分野の投稿が少ないようです。短い文章で結構ですからどしどしご寄稿下さい（H）

（直接購読のお申込みは、きたん社へ）

「読者投稿」歓迎！

◆テーマ①「妻の情事」

妻の情事といっても、最近は浮気に限らず、夫婦交換や3人プレイ、あるいは夫公認の情事などいろいろですが、そんな体験をありのままに飾らぬ文章で書いてみてください。

◆テーマ②「SM手記」

SMあるいはフェチなど、ご自分の性向や体験を独白するようなつもりで書いてみてください。上手に書こうとすると一行も書けなくなるのが文章です。日記をつけるつもりで書くのがコツといえましょう。

◆規定・四百字原稿用紙（タテ書き）5枚／50枚。写真（カラー・モノクロ・ポラ）があれば添えてください。

◆原稿料・四百字原稿1枚700円・写真1枚千円。

◆締切り・57年11月30日

新人求む！

SM界で現在、活躍中の作家、イラストレーター、カメラマン、縄師などの方たちは、ほとんど旧「奇ク」誌から巣立ちました。その伝統と実力は、出版界でも高く評価され、新誌からも有望な新人の輩出が期待されています。将来SMに限らず、出版界での活躍を希望する方は、作品（小説、イラスト、劇画、劇画原作、写真など）を添えたお手紙を本誌編集室宛にお送りください。また、芸能界やショウ・ビジネスを希望する女性は、最近の全身写真（水着またはヌードの立姿）と簡単な略歴、得技、希望職種などのほか、S・B・Hの各サイズを書き添えたお手紙をください。指導、推選します。

〔宛先〕

〒160東京都新宿区新宿1の7の11

加藤ビル1F

（株）きたん社内

現代芸術研究会